

佐賀市文化財調査報告書第15集

東千布遺跡

(東千布遺跡・久富遺跡)

昭和 60 年 3 月

佐賀市教育委員会

佐賀市文化財調査報告書第15集

東千布遺跡

(東千布遺跡・久富遺跡)

昭和 60 年 3 月

佐賀市教育委員会

	誤	正
図版目次	図版14. SK002 祭祀遺構	SR 002 祭祀遺構
11頁 8行	SC 004 土壇墓	SP 004 土壇墓
21頁 6行	SP 001 祭祀遺構	SR 001 祭祀遺構
42頁 下段		註1. 大門遺跡 佐賀市教育委員会 註2. 大門西遺跡 佐賀県教育委員会 註3. 六本里木遺跡 " 註4. 金立開拓遺跡 "
44頁 Fig 33		2 (m)
45頁 Fig 34		0 2 (m).
56頁 Fig 45	(m)	(cm)

序 文

この報告は、県道小城北茂安線改良工事に先がけて、昭和58年度から昭和59年度にわたって進められた埋蔵文化財発掘調査の報告書です。

今回は佐賀市金立町に所在する東千布遺跡と久富遺跡の調査を実施し、多数の貴重な資料を得ることができました。なかでも特筆すべきものとしては、弥生時代の墳墓群、祭祀遺構、中世の掘立柱建物跡などがあり、調査後、これらの遺跡は消滅してしまいましたが、今後、本報告書がその記録として広く活用されることを願う次第であります。

尚、調査に際して御協力いただいた地元の方々をはじめ佐賀県教育委員会文化課、佐賀県土木部道路課、監理課、佐賀土木事務所の関係各位に深甚の敬意を表します。

昭和60年3月31日

佐賀市教育委員会

教育長 山 田 清 人

例 言

1. 本書は昭和58年、59年度に実施した、県道小城・北茂安線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査は佐賀県土木部からの委託により、佐賀市教育委員会が主体となり実施した。
3. 遺構の実測は佐尾啓子と調査員が行った。遺物の実測は野中須矢子、島京子、浜田糸子が行った。
製図は、野中須矢子、島京子が行った。
遺物の復元作業は西首金子、喜多ヒサ子、浜田糸子、無津呂早苗が行った。
写真撮影、焼付は調査員が行った。
4. 本書の執筆・編集は福田が担当した。
5. 調査及び報告書の作成については、佐賀県文化課の多大な助言を得られた。記して感謝したい。

本文目次

I 東千布遺跡

1. 序 説	1
(1) 調査に至る経過	1
(2) 調査の組織	1
2. 遺跡の立地と環境	3
(1) 地理的環境	3
(2) 歴史的環境	3
3. 遺 構	4
I 区	
(1) 甕棺墓	4
(2) 土墳墓	7
(3) 溝	10
(4) 土墳	11
II 区	
(1) 甕棺墓	12
(2) 祭祀遺構	18
(3) 土墳	21
(4) 住居址	22
(5) 溝	22
4. 遺 物	26
(1) 土 器	26
a. 埋葬に用いられた土器	26
b. その他の土器	39
c. 石 器	41
5. ま と め	41

II 久富遺跡

1. 遺跡の立地と環境	43
(1) 地理的環境	43
(2) 歴史的環境	43
2. 遺 構	43
(1) 住居址	44
(2) 土 墳	46
3. 遺 物	52
4. ま と め	62

插图目次

Fig. 1	東千布・久富遺跡周辺遺跡分布図	2
Fig. 2	遺跡周辺見取図	4
Fig. 3	SJ001甕棺墓実測図	5
Fig. 4	SJ002甕棺墓実測図	5
Fig. 5	SJ003甕棺墓実測図	5
Fig. 6	SJ004甕棺墓実測図	5
Fig. 7	SJ005甕棺墓実測図	6
Fig. 8	SJ006甕棺墓実測図	6
Fig. 9	SJ007甕棺墓実測図	6
Fig. 10	SP001・002土墳墓実測図	8
Fig. 11	SP005土墳墓実測図	9
Fig. 12	SP006土墳墓実測図	10
Fig. 13	SK001土墳実測図	11
Fig. 14	SK003土墳実測図	11
Fig. 15	SJ002・009・010甕棺墓実測図	13
Fig. 16	SJ011・013甕棺墓実測図	14
Fig. 17	SJ014甕棺墓実測図	14
Fig. 18	SJ016・018・019・022甕棺墓実測図	15
Fig. 19	SJ023・024・026・027甕棺墓実測図	17
Fig. 20	SJ028・032甕棺墓実測図	18
Fig. 21	SR001祭祀遺構実測図	19
Fig. 22	SR002祭祀遺構実測図	20
Fig. 23	SK007土墳実測図	21
Fig. 24	SK008土墳実測図	22
Fig. 25	SB001掘立柱建物跡実測図	23
Fig. 26	甕棺実測図(1)	28
Fig. 27	甕棺実測図(2)	29
Fig. 28	甕棺実測図(3)	31
Fig. 29	東千布遺跡出土土器実測図	38
Fig. 30	東千布遺跡出土土師器・磁器実測図	40
Fig. 31	磨製石剣実測図	41
Fig. 32	久富遺跡周辺見取図	43
Fig. 33	SB001住居址実測図	44
Fig. 34	SB002住居址実測図	45
Fig. 35	SB004掘立柱建物跡実測図	45

Fig. 36	SB005掘立柱建物跡実測図	46
Fig. 37	SB006掘立柱建物跡実測図	47
Fig. 38	SK003土墳実測図	48
Fig. 39	SK004土墳実測図	48
Fig. 40	SK008土墳実測図	49
Fig. 41	SK009土墳実測図	50
Fig. 42	SD006溝実測図	51
Fig. 43	久富遺跡出土土器実測図(A区)	52
Fig. 44	SD006溝出土土師器実測図(B区)	55
Fig. 45	SD006溝出土手捏土器実測図(B区)	56
Fig. 46	久富遺跡出土陶磁器実測図	58
Fig. 47	久富遺跡出土石器実測図	59
Fig. 48	久富遺跡出土石器、土製品実測図	60
Fig. 49	東千布遺跡Ⅰ区遺構配置図	折込み
Fig. 50	東千布遺跡Ⅱ区遺構配置図	〃
Fig. 51	久富遺跡A区遺構配置図(上層)	〃
Fig. 52	久富遺跡A区遺構配置図(下層)	〃
Fig. 53	久富遺跡B区遺構配置図	〃

表 目 次

Tab. 1	東千布遺跡Ⅰ区甕棺墓一覧表	23
Tab. 2	東千布遺跡Ⅰ区土墳墓一覧表	24
Tab. 3	東千布遺跡Ⅱ区甕棺墓一覧表	24
Tab. 4	東千布遺跡Ⅱ区土墳一覧表	25
Tab. 5	東千布遺跡出土主要甕棺観察表(Ⅰ区)	33
Tab. 6	東千布遺跡出土主要甕棺観察表(Ⅱ区)	33
Tab. 7	東千布遺跡出土土器観察表	39
Tab. 8	久富遺跡出土土器観察表	52
Tab. 9	SD006溝出土土師器観察表	53
Tab. 10	手捏土器観察表	56
Tab. 11	久富遺跡出土陶磁器観察表	58
Tab. 12	久富遺跡出土石器観察表	61
Tab. 13	久富遺跡出土石器・土製品観察表	62

図 版 目 次

- 図版 1. 1. I区調査前 2. I区東部 3. I区西部
2. 1. SJ001、002甕棺墓 2. SJ003甕棺墓 3. SJ004、005甕棺墓
3. 1. SJ006甕棺墓 2. SJ007甕棺墓 3. SP001土墳墓
4. 1. SP002土墳墓 2. SP003土墳墓 3. SP005土墳墓
5. 1. 土墳墓群（北から） 2. SK001土墳 3. SK009土墳周辺
6. 1. 調査前 2. 調査区西部 3. 調査区東南部
7. 1. 調査区西南部 2. 調査区東部 3. 調査区全景（甕棺取上げ後）
8. 1. SJ001甕棺墓 2. SJ002、003甕棺墓 3. SJ008、013甕棺墓
9. 1. SJ009甕棺墓 2. SJ010、011甕棺墓 3. SJ012甕棺墓
10. 1. SJ013甕棺墓 2. SJ014甕棺墓 3. SJ015甕棺墓
11. 1. SJ016甕棺墓 2. SJ018甕棺墓 3. SJ019甕棺墓
12. 1. SJ022甕棺墓 2. SJ022接合部 3. SJ023甕棺墓
13. 1. SJ028甕棺墓 2. SJ014、032、033甕棺墓 3. SJ035甕棺墓
14. 1、2. SK002土墳 3. SK007土墳 4、5. SK008土墳
6、7. SR001祭祀遺構 8. SK002祭祀遺構
15. 1. 調査前（東から） 2. A区全景（西から）
16. 1. A区東部（西から） 2. A区西部（東から）
17. 1. SB001住居址 2. SB002住居址周辺
18. 1. 建物跡近景 2. SK004土墳
19. 1. 全景 2. SD006溝
20. 1. 表土はぎ状況 2、3. 甕棺検出作業状況
21. 甕棺（SJ001、003、005、006、007）
22. 甕棺（SJ002、011、014、016、023）
23. 甕棺（SJ018、024、026、027、028）
24. 甕棺（SJ009、010、022、023、027）
25. 甕棺（SJ009、010、013、019、032）
26. SK001、002、003、008、SR001、002出土土器、表土下層
27. SK002、008、010、SD017、包含層出土土器、表土下層
28. SD006出土土器（土師器、B区）
29. SD006出土土器（土師器、手捏土器）
30. SD006出土土器（手捏土器）、SD001、007包含層、表土下層出土土器
31. 東千布、久富遺跡出土石器、土製品

I . 東千布遺跡

1. 序 説

(1) 調査に至る経過

昭和57年度2月頃、県道小城・北茂安線の改良工事は突如として開始され、県教委と佐賀市教育委員会は、緊急調査を実施すべき旨の協議を佐賀県土木事務所に申し入れたところ、昭和57年度分の工区に限り、工事と併行して発掘調査を実施するという応急的な措置しかとれなかった。

昭和58年度分工区に関しても、時期的にみて当初予算への組入れは困難であったため、58年度6月補正によって調査を実施することになった。調査は昭和58年の夏に金立町東千布の丘陵の一部と、同年秋に金立町久富の水田部分を実施した。また、昭和59年度には東千布の丘陵の残部を5月から7月にかけて調査を実施した。

また、報告書に関しては、2か年調査分の合本であるので、本来年度別に分けて報告すべきであるが、報告書作成の都合から遺跡別に記述した。

(2) 調査の組織

調査主体 佐賀市教育委員会

調査担当

事務局 佐賀市教育委員会社会教育課

古川博志（社会教育課長）昭和58年度

中村 弘（社会教育課長）昭和59年度

喜多 猛（社会教育課長補佐）

北原 学（社会教育文化係長）総括

本告敬資（社会教育文化係）庶務担当

福田義彦（社会教育文化係）調査担当

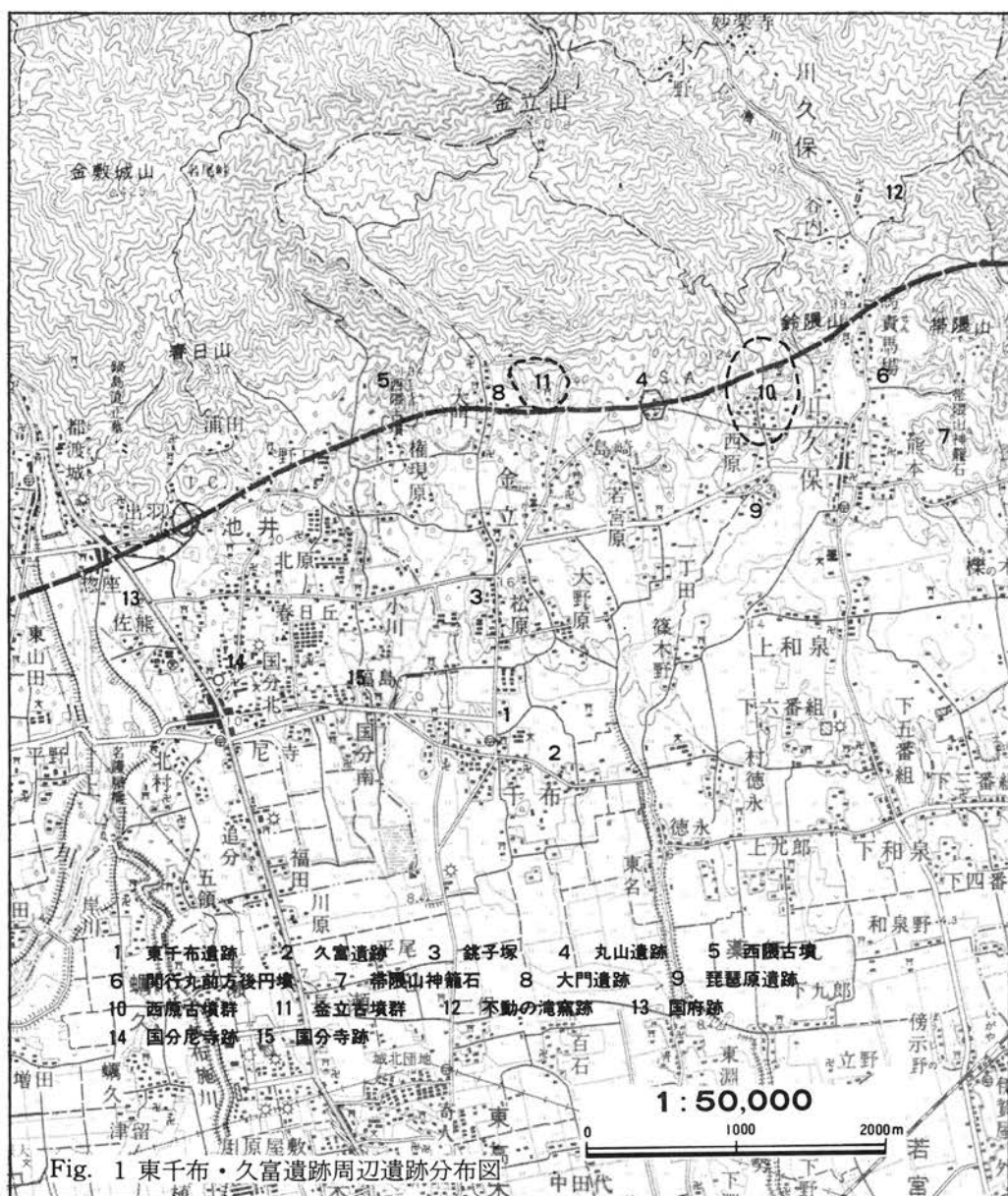
発掘作業員 広瀬八重子、広瀬 幸子、後藤美智江、大石ヤスエ、山田 芳栗

村川キクエ、池田トシコ、山本 国枝、大野 道江、生田ミヨコ

生田ヨシエ、原 ミチエ、武富ヨシノ、宮地 峯子、小柳シゲノ

坂本ユキエ、小柳代志枝、内村 美里、佐尾 啓子

調査協力 佐賀県教育委員会、佐賀県土木事務所、(有)江下建設



2. 遺跡の立地と環境

(1) 地理的環境

東千布遺跡は佐賀市金立町大字東千布にあり、金立山南麓から派生している低丘陵に位置し、標高12mを数える。千布は元来西千布と東千布とに分かれ、西は才淵川、東は久富、北は金立に接し、南は友貞に接する。西の一部は市ノ江川に接している。

当遺跡の現況を見ると、低丘陵南端に位置しているように見うけられるが、元来、南接している金立小学校敷地にまでこの丘陵は及んでいたものとする。

(2) 歴史的環境

周辺は佐賀市では遺跡の密集地帯であり、遺跡分布地図においてもそのほとんどが埋蔵文化財包蔵地と推定されている。実際調査された遺跡としては九州横断自動車道建設に伴う調査がその大半を占める。西方から順に三郎山遺跡、大門西遺跡、大門遺跡、六本黒木遺跡、金立開拓遺跡、藤付遺跡、丸山遺跡、西原遺跡、鈴熊遺跡とならんでいる。これらは金立山から南方に延びている丘陵上にあり、主として古墳群であるが、時代的には縄文時代から近代までの複合遺跡が多い。さらに南下すると家形石棺をもつ西隈古墳、4世紀代の古墳で県下第2の規模を誇る前方後円墳の銚子塚、現在は湮滅しているが、江戸期、鍋島藩士である草場佩仙によって調査された花納丸古墳、6世紀代の横穴式石室を主体部にもち変形文鏡等多数の遺物を出土した県史跡である関行丸古墳などがあり、この北部山麓は古墳のベルト地帯とすることができる。

平垣地、微高地になると調査例が少なく遺跡の正確な地点、規模は不明であるが、昭和55年度に調査した琵琶原遺跡は集落遺跡として佐賀市で初めて調査されたもので特筆するに値する。ここでは弥生時代後期～古墳時代の住居址が調査したものだけでも50数軒を数え、その位置している低陵全域の住居址数を想定してみると百軒は下らないと考える。

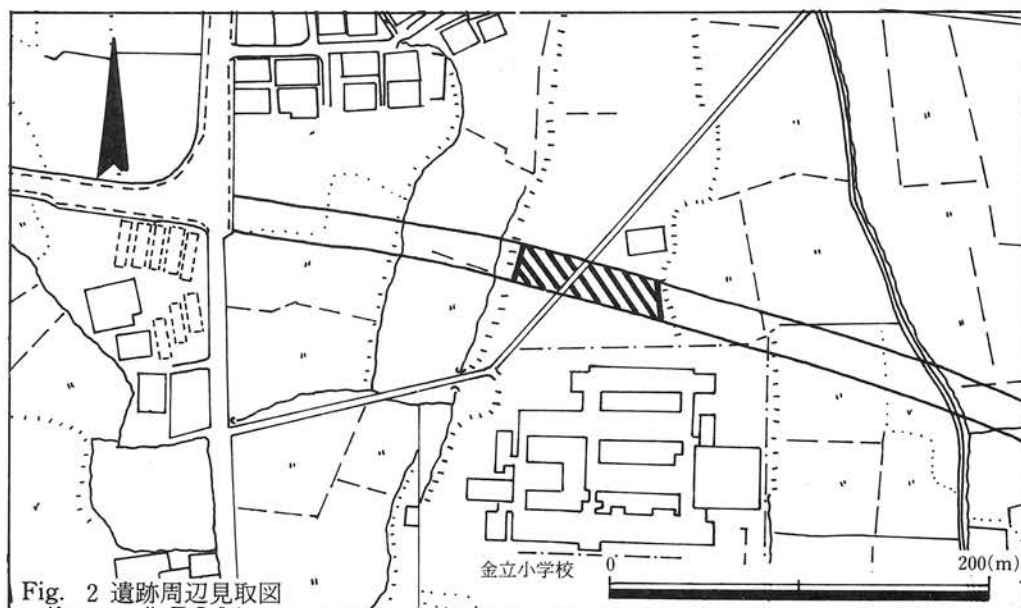
遺跡周辺で古墳時代以降の遺跡の調査例はほとんどないが、昭和50年頃、西方約100mの低丘陵で、資材置場造成に伴う確認調査で古墳時代～中世の柱穴、溝、ピット等を検出したと報告されている。また、これは調査例ではないが、当遺跡北西部約200mで、昭和40年代後半、宅地造成の際石棺墓とおぼしきものが発見され、棺内より剣が検出されたが、原状に復し造成に着手したと地元の人より報告があった。

古墳時代以降遺跡周辺で確認された遺跡は全くないが、文献によると中世頃からこの千布の名称が存在していたことがうかがわれる。それは、永徳四年（1384）の今川仲秋の書下（河上神社文書）によるものであるが、このことから考えあわせると千布の名は鎌倉末期には存在していたと思われる。また、元龜二年（1571）神代長良の寄進状写（玉林寺文書）によると「神代兵部種良 神代清次郎周利 彼息女千宮女三人 為餽料、千布三百町之内友貞分土穴南ヨリ仁段…」とあり、室町期には千布が神代氏の勢力下にあったことがわかる。この千布の南方に位置する友貞にあったと伝えられている千布館跡は神代長良の父、神代勝利の出生地の館跡ともいわれている。

ともあれ、当遺跡からも鎌倉～室町期の遺物・遺構が若干検出されていることから、神代氏関係の遺構の可能性もある。

3. 遺 構

調査区の工期の都合でⅠ区とⅡ区とに分けたが元来は同一丘陵にあり、同一の遺跡としてとらえることができる。しかし、偶然にもⅠ区とⅡ区では甕棺墓に時代的な差位が見られたので、報告にもその区分を利用した。



(Ⅰ区)

(1) 甕棺墓

調査区の東部に集中しており、主軸はその全部が南北方向をとる。この甕棺墓群が位置している付近はこの低丘陵が西側に傾斜をする起点であり、この一群より西部には甕棺はもちろんのこと、他の弥生期の遺構は全く見られない。これらの甕棺墓は時代的には弥生時代前期末頃のもので、それ以降のものはⅡ区で検出されている。

SJ001甕棺墓

Ⅰ区東北部に位置する成人用複式棺である。上面の全体を SD016 に削平され、墓壇東側の一部をピットに、西側掘込みを SD015 にそれぞれ切られている。墓壇は長径 1.9m、短径 1m 程度の楕円形を基調とするもので、底面は北部に向けて緩やかな傾斜がある。上・下甕とも、ほぼ同規模の甕形土器を使用し、埋置形式は接口式で墓壇の中央に置かれている。主軸方位 S-E 4.5°、傾斜角 6°。SJ002 甕棺墓に切られている。

SJ002甕棺墓

Ⅰ区東北部に位置する成人用複式棺である。掘込みの上面全体を SD016、東側掘込みの一部と西側掘込みを SD014 と SD015 にそれぞれ切られている。墓壇は元来長軸 2.1m、短軸 1m 程度のものであったと考える。上・下甕とも大甕を使用し、埋置形式は残存状態がきわめて悪いの

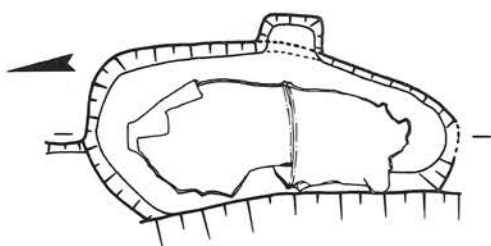


Fig. 3
S J 001甕棺墓実測図

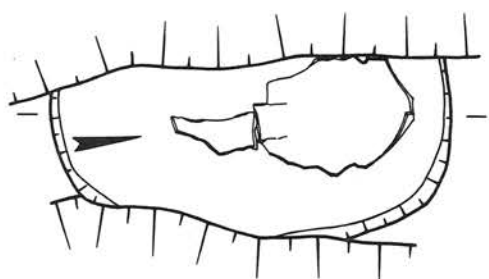
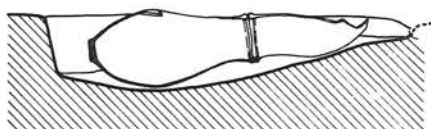


Fig. 4
S J 002甕棺墓実測図

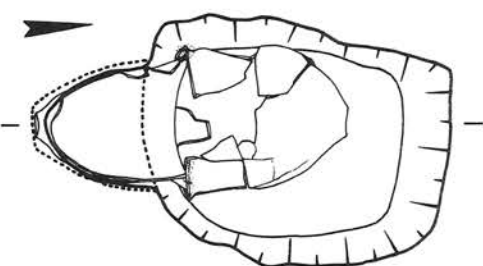
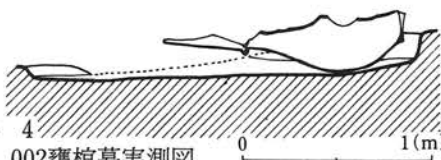


Fig. 5
S J 003甕棺墓実測図

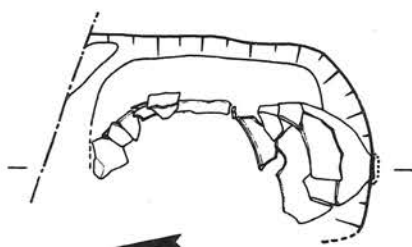
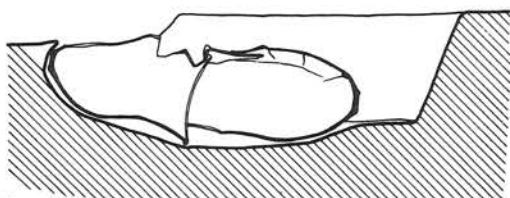


Fig. 6
S J 004甕棺墓実測図



で判断しにくい、接口式か覆口式ではなかろうか。主軸方位N-E 4°、傾斜角8°。墓墳北端がSJ001甕棺墓の墓墳をごく一部切っている。

SJ003甕棺墓

I区の東南隅に位置する成人用複式棺である。墓墳は長辺1.6m、短辺1.3mの隅丸長方形を基調とし、南壁に奥行0.6m程度の横穴をやや上方に向けて掘り込み大甕をわずかに角度をもたせ埋置している。棺は上甕が下甕よりやや大きめの甕形土器を使用し、埋置形式は覆口式である。接口部に粘土目貼りを施しているが一部しか残存していない。主軸方位N-W 1°、傾斜角-8°。南壁に掘り込んだ部分は樹木の根により破壊されていた。

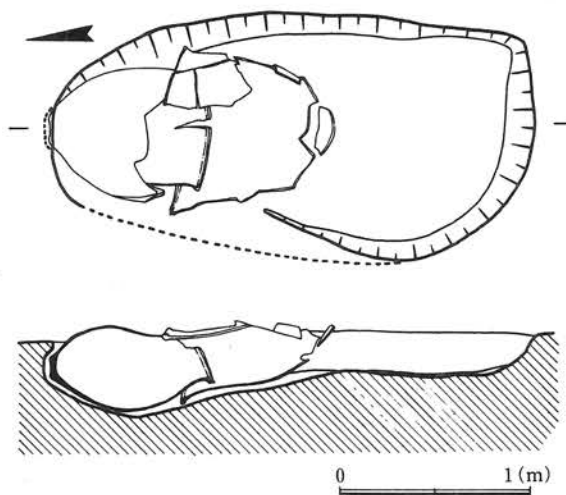


Fig. 7 S J 005甕棺墓実測図

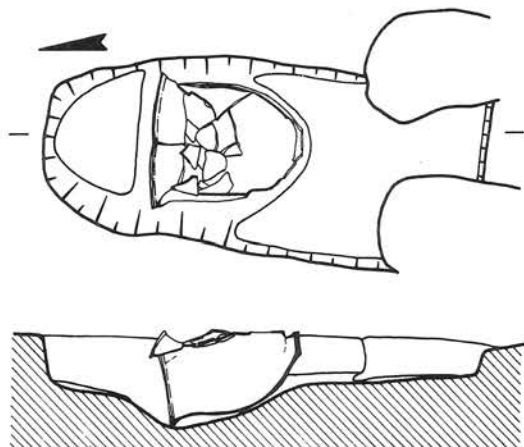


Fig. 8
S J 006甕棺墓実測図

底面中央部から北壁にかけてなだらかな掘込みがあり、北壁に設けられた横穴部分はわずかに残存している。この掘込みに上・下甕ともほぼ同規模の甕が用いられ、埋置形式は接口式。主軸方位N-W1.5°、傾斜角8°。北西部掘込みを溝に切られている。

SJ006甕棺墓

I区東北部に位置する成人用単棺である。墓壇は長軸2.35m、短軸1.03mを計る長楕円形を基調とし、底面中央より、やや北寄り、さらに掘り込まれたところに棺は埋置されている。棺はやや下方に口縁部が向けられ、主軸方位N-E5.5°。傾斜角-17°単棺であるから木蓋の存在を考えたが、埋土中には木質は検出できなかった。東南隅と西南隅をSD001、SP002にそれぞれ切られている。この切合い関係は明確でなかったが、SP001の石蓋が旧状のままで動かされて

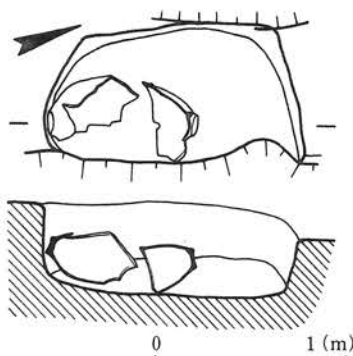


Fig. 9 S J 007甕棺墓実測図

SJ004甕棺墓

I区東北部に位置する成人用複式棺である。墓壇の西半分を中世の井戸状遺構に破壊され、墓壇底面はほとんど残存していない。墓壇上面の平面形は、残存している墓壇掘方から推定して楕円形を基調とするものとする。棺は大破しているが、ほぼ同規模の甕を使用したもので、埋置形式は接口式をとる。主軸方位N-E5.5°、傾斜角21°。

SJ005甕棺墓

I区東北部に位置する成人用複式棺である。墓壇は長軸2.55m、短軸1.3m程度の長楕円形を呈するが、元来は2m弱の楕円形であったものと推定する。墓壇底

いる様子がなかったので当甕棺墓が SP001等の土墳墓（石蓋土墳墓）に先行するものと判断する。

SJ007甕棺墓

I 区東端に位置し、当調査区唯一の小児用複式棺である。東側掘込みを SD015に、東西部掘込みの一部を SD017にそれぞれ切られている。墓壇は南北1.35m、東西（残存長）0.7m程度で元来楕円形を基調としたものとする。甕は墓壇の南壁寄りに埋置されており、上甕に鉢形土器、下甕に壺形土器が用いられ、埋置形式は覆口式をとる。傾斜角は上甕12.3°、下甕-23.5°で「く」の字状で一定しておらず、主軸方位はN-W5.8°。

(2) 土墳墓（I 区）

甕棺墓と同様に I 区の東部に集中し、方位もほぼ南北方向である。合計 7 基の土墳墓を検出したが、残存状況の比較的良好なものを抽出し後述する。この中で石蓋をもつものが 2 基存在するが、表土はぎの時点で石材らしきものが点在していたことから 2 基以外のものも元来石蓋を有していたのではなかろうか。用途は大人用 2 基、小人用 5 基と考える。

SP001土墳墓

I 区の東部に位置する小児用石蓋土墳墓である。墓壇は長辺1.11m、短辺0.6m、深さ0.35mで上面の平面形は限丸長方形である。頭位は底面幅がほぼ均一であるため不明であるが、隣接している土墳墓との関係から考えて南位か。石蓋は長さ0.95m、幅0.6m、厚さ0.04m程度で、掘込み下0.05m付近に置かれ、西から東へわずかに傾斜をもたせてある。その板石の北西隅に塊石を検出したが蓋石から剝離したものではなく別個体で、元来他に数個あったものとする。西側掘込みを近代の攪乱により一部破壊されている。主軸方位N-E13.5°。

SP002土墳墓

I 区東部に位置する小児用の失蓋の土墳墓と考える。墓壇は1.18m×0.46m、最深部0.4mを計り上面の平面形は限丸長方形を基調とするものである。北壁に接して幅0.1m、長さ0.4m、南壁寄りに幅0.16m、長さ0.26m程の掘込みがそれぞれ存在することから、ここに小口の板もしくは板石をたてて棺を形成したものとする。この掘込みの位置関係から推定して棺の内法は0.9×0.3m程度のものと考えられ、北壁がやや広がっているため頭位か。墓壇中央、掘込み下0.2m付近に0.3×0.2m程度の扁平な板石が残存するが、本来数枚の石蓋があったものと思われる。主軸方位N-E9.3°。

SP005土墳墓

I 区東部に位置する成人用と考えられる失蓋土墳墓である。長辺2.47m、短辺1.47mで上面の平面形は隅丸長方形を呈する。その墓壇底部中央付近に長さ1.8m、幅0.6m、深さ0.08mの長楕円形を基調とする掘込みがあり、屍床もしくは埋葬施設主体部の痕跡である。この掘込みは南側が北側に比してやや広がっており、南側が頭位か。掘込み東側を SP003・004とそれぞれ

れ切合い関係をもつが、新旧関係は不明である。埋土の状況から見ると時期差はあまりないように考える。主軸方位N-E11°。

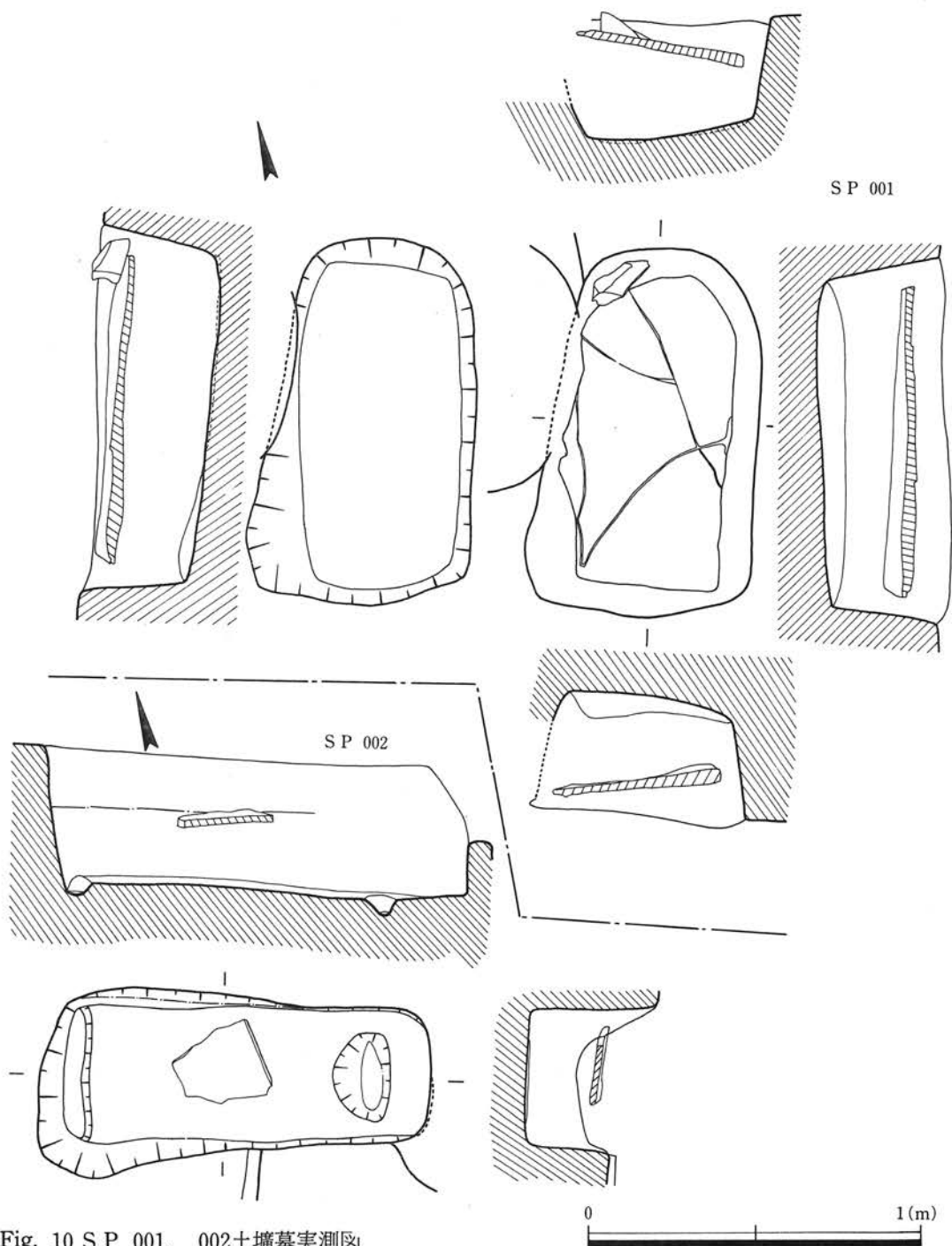


Fig. 10 S P 001, 002土墳墓実測図

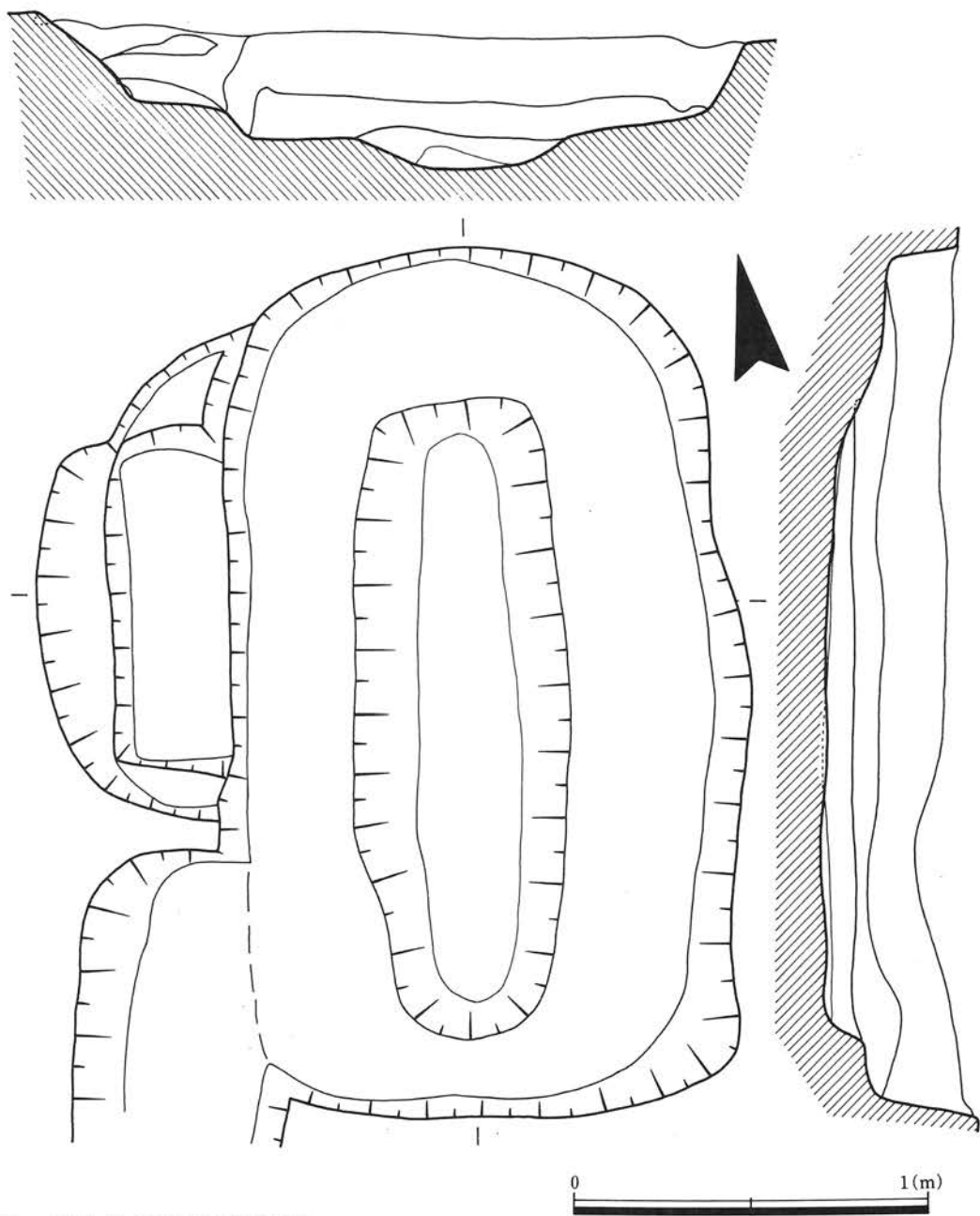


Fig. 11 S P 005土墳墓実測図

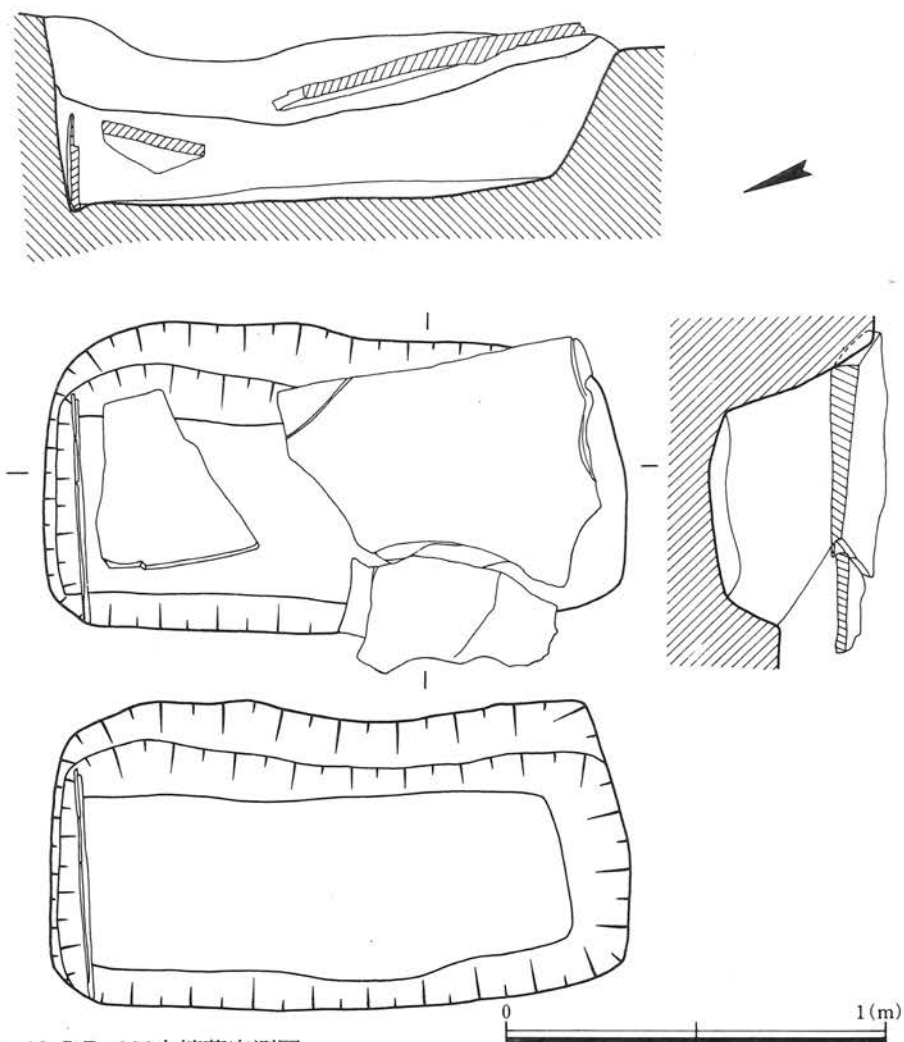


Fig. 12 S P 006土墳墓実測図

SP006石蓋土墳墓

I区東部に位置する小児用の土墳墓である。北壁にいわゆる石棺墓に用いられる小口石を立てているが、他の三壁には蓋石の残存状態からみて板石が立てられていたとは考えがたいので、これは土墳墓の範疇に入ると考える。墓墳は長さ1.53m、幅0.78m、深さ0.5m程度で、上面の平面形は隈丸長方形を呈する。北壁から東壁にかけて掘込み下0.2m内外の所に稜が存在するが、これは墓墳掘方が壊れた公算が強い。掘込みは小口石のある北壁が鉛直に近く、南壁はゆるやかな掘込みである。蓋石は南壁寄りにある三個体は接合関係があり北壁寄りのものを含めて合計三個体残存する。元来蓋石は墓墳の規模から推定して2～3個使用されていたものと考ええる。

(3) 溝

調査区の東部と西端部に集中している。規模は幅0.3～1.2m程度、深さ0.1～0.6m程度でその全長はすべて不明である。方向は大部分が南北方向であるが、SD004・008に限って中央部付近を東西方向に走り、西端に至って南下する。時期的にはその埋土から検出された遺物により鎌倉から室町期の所産と考えられる。性格についてはおおむね排水路と考えられるが、SD004溝に限ってはその形状・規模から見て排水機能だけではなく土地の区画の意味もあるのではなかろうか。溝の総数は明確なものだけで18条を数えるが、SD014・015・016付近ではそれ以外にも切れ合っており、合計20条程度の溝が存在したと考える。また、SJ006甕棺墓・SC004土墳墓・SK011土墳をむすぶラインを東側の掘込みとする溝が地形の段差・攪乱の状況から考えられる

が、その掘込みは不明である。

(4) 土 墳

調査区東半部に集中し、形状はその大半が不定形である。SK002・003・012が中世の所産でそれ以外はすべて弥生期のものである。

SK001土墳

I区東北端に位置する不定形の土墳である。検出最長幅3.2m、最深部1mを計る。内部には6～7個程度のピットが存在するが、この土墳のものか、独立したピットで切合い関係を持つものかは識別できなかった。遺物としては埋土全体から弥生期の土器細片を検出した外、比較的残存状態の良いものとして図中にある壺形土器がある。

SK003土墳

I区中央西寄りに位置する径0.76mの土墳である。深さは最深部で0.74mを計り、断面形はU字形を基調とするものである。埋土は淡黒褐色を呈し、その全体から中世の土器細片を若干検出した。当遺構は土墳として扱ったが、湧水が豊富で井戸の可能性もある。しかし、丘陵東側にある水田より湧出している可能性もあり、当時の地下水脈がこの遺構底部に及んでいたかは疑問である。

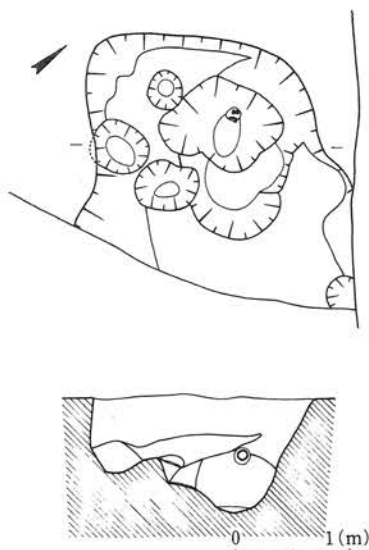


Fig. 13 SK 001土墳実測図

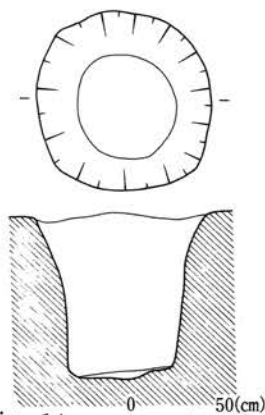


Fig. 14
SK 003土墳実測図

(II区)

(1) 甕 棺 墓

調査区全体に検出され、少なくとも三群に分かれると考える。時期的には弥生中期初頭のもものと弥生中期中頃のものですべて複式棺から成る。主軸方向はおおむね南北方向をとるが、SJ020に限って東西の主軸方向である。

SJ002甕棺墓

II区の西端に位置する成人用複式棺である。墓壇上面の平面形は長辺2.4m程度、短辺1.7mの隅丸長方形を基調とするものであるが、北壁を中世のSK002土壌にほぼ完全に切られている。また、東南隅にはSJ003が隣接している。甕は上甕が下甕に比してやや小型のもので、埋置形式は接口式をとる。主軸方位N-W12.3°、傾斜-5.3°。

SJ009甕棺墓

II区南西部に位置する成人用複式棺である。墓壇上面の平面形は南端が調査区外で全様は明らかでないが、楕円形を基調としているものとする。短径0.76m、深さ0.44m。長径は1.6m程度と推定する。上甕に壺形土器を、下甕に甕形土器を使用し、埋置形式は覆口式のもので、墓壇北寄りに埋置されている。主軸方位S-E4°、傾斜角12.5°。

SJ010甕棺墓

II区南西部に位置する小児用複式棺である。掘込み面南部を不定形の土壌に切られ、東側掘込みをSJ011甕棺の掘込みと接している。墓壇は長辺1.88m、短辺0.9mの隅丸長方形を基調とするもので底部は棺が埋置されている付近がさらに一段掘られている。上甕に小型の甕を、下甕に中型の甕を使用し、埋置形式は接口式となっている。主軸方位N-E7.5°、傾斜角-5.5°。

SJ011甕棺墓

II区西寄りに位置する成人用複式棺である。墓壇は長辺2.6m、短辺1.54m、上面の平面形は隅丸長方形を基調とするもので、底面はゆるやかな傾斜がある。棺は上甕がわずかに小規模で、棺の埋納形式は挿入式となっている。接合部には幅0.1mの粘土帯がめぐっている。掘方南西部がSJ010甕棺墓と接しているが、その新旧関係は明確ではない。また、その境界付近の掘込み面上部には長さ30cm程度の板石があり、SJ011又はSJ010甕棺のどちらかの墓標的なものであった可能性があるが、どちらに伴うものかは不明である。主軸方位N-E5°、傾斜角-13.5°。

SJ013甕棺墓

II区中央西寄りに位置する小児用複式棺である。墓壇上面の平面形は長径1.5m、短径0.82mの楕円形を基調とするもので、断面は舟底状を呈する。付近は小児用甕棺墓が集中しており、北からSJ007・008・013と並ぶ。また隣接している成人用甕棺として、SJ031、014甕棺墓がある。埋置形式は接口式で、主軸方位N-E7.8°、傾斜はほぼ水平。

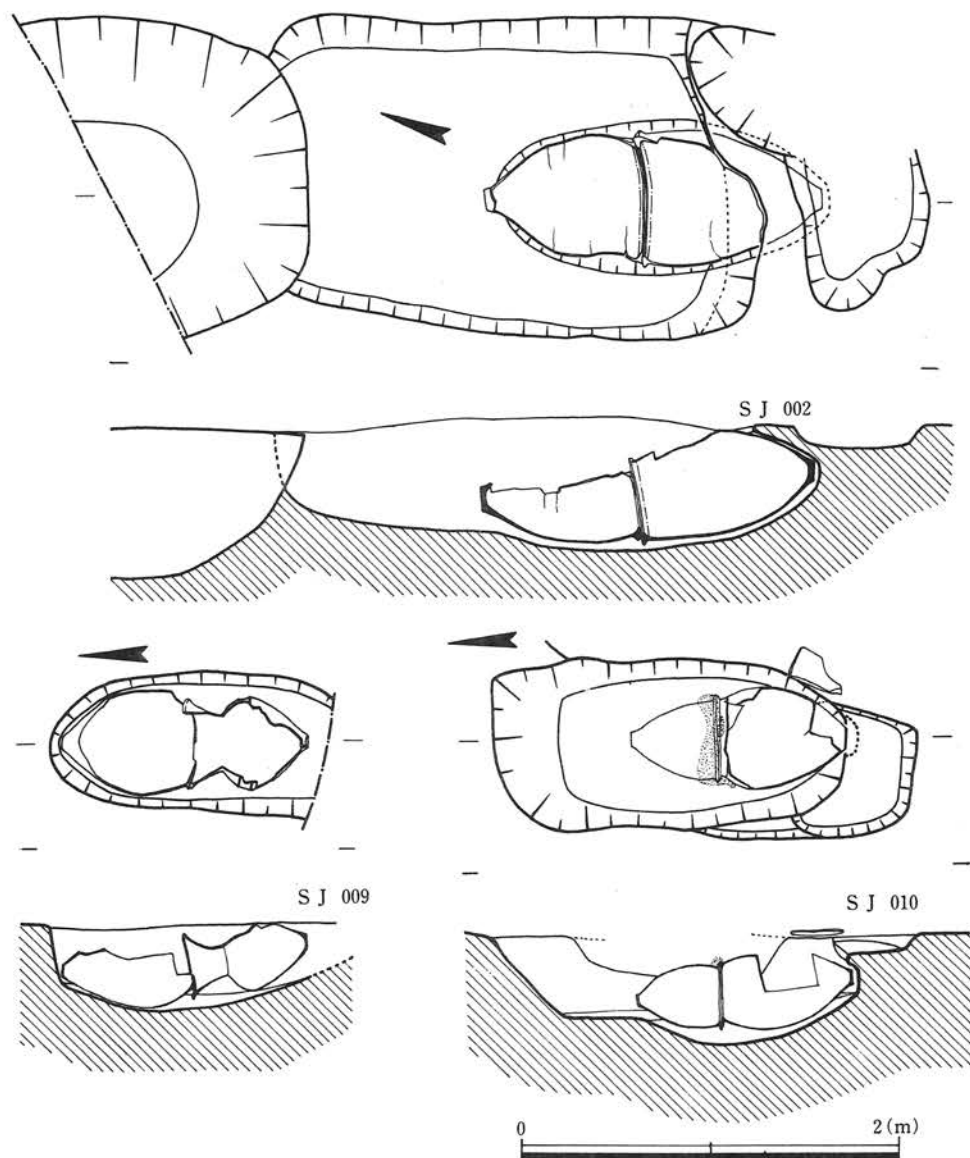


Fig. 15 S J 002, 009, 010 甕棺墓実測図

SJ014 甕棺墓

II区中央に位置する成人用複式棺である。墓壙上面の平面形は長径2.84m、短径1.3m程度の長楕円形を基調とするもので、断面は舟底状を呈する。墓壙南部が小土壌によって切られており、その際南壁に穿たれた穴の天上部が陥没したものとする。甕は墓壙南寄りに置かれ、上下甕ともほぼ同形の甕を使用している。主軸方位N-W11°、傾斜角1°。東側掘込みをSD005溝に切られている。

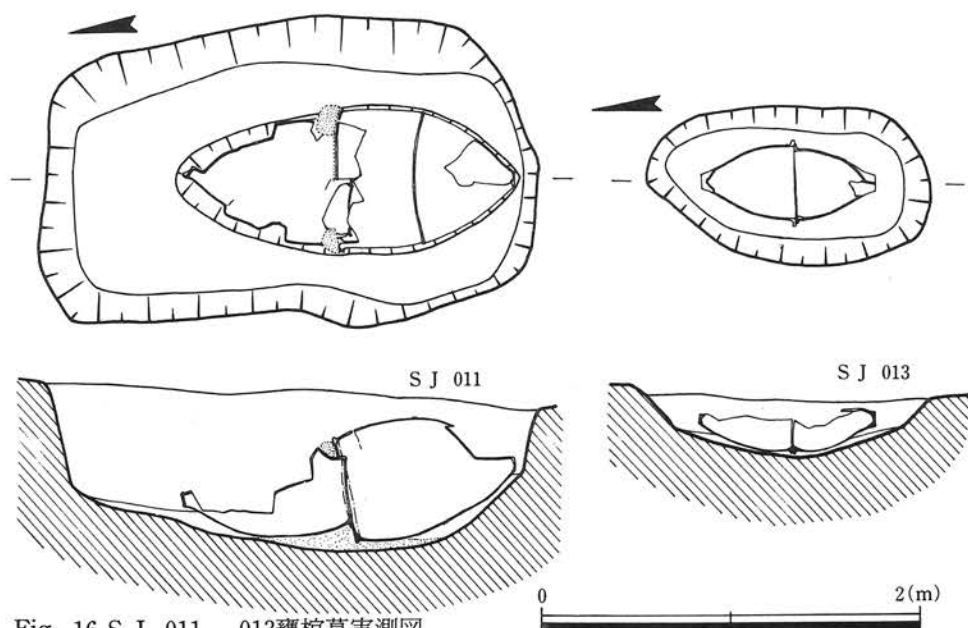


Fig. 16 S J 011, 013甕棺墓実測図

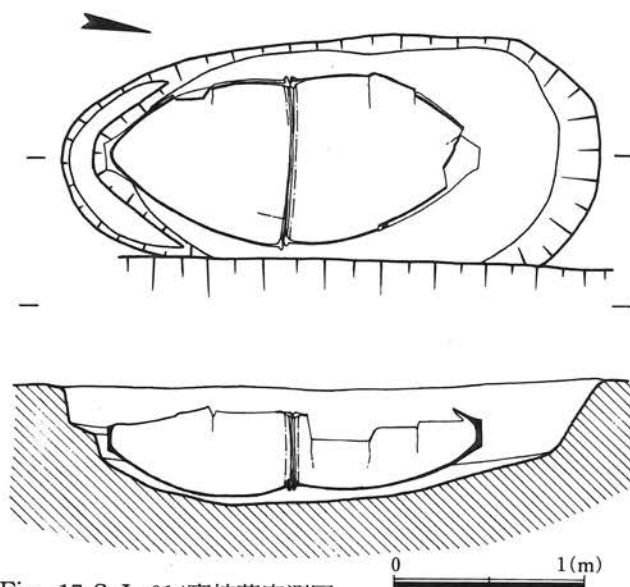


Fig. 17 S J 014甕棺墓実測図
15.5°、傾斜角10.5°。

SJ016甕棺墓

II区のほぼ中央南寄りに位置する成人用複式棺である。墓壙は縦1.74m、横1.28mの隅丸長方形を基調とするものである。上下甕ともほぼ同規模の甕形土器が用いられ埋納方式は接口式をとる。下甕は墓壙北壁に掘り込まれた、奥行0.5m程度の穴に挿入されている。墓壙の北東コーナーを径0.6m程度のピットに切られている。主軸方位N-W

SJ018甕棺墓

II区の東部に位置する成人用複式棺である。墓壙上面の平面形は長軸2.18m、短軸1.04mの不定形を呈するが、元来長辺1.4m程度の隅丸長方形と考えられ、北壁部に下甕を挿入していた穴が陥没したものと推定する。上甕に鉢形土器、下甕には大型の甕形土器を使用し、埋置形式は接口式である。墓壙の南東隅をSD001溝に切られ、さらに楕円形の小ピットに切られてい

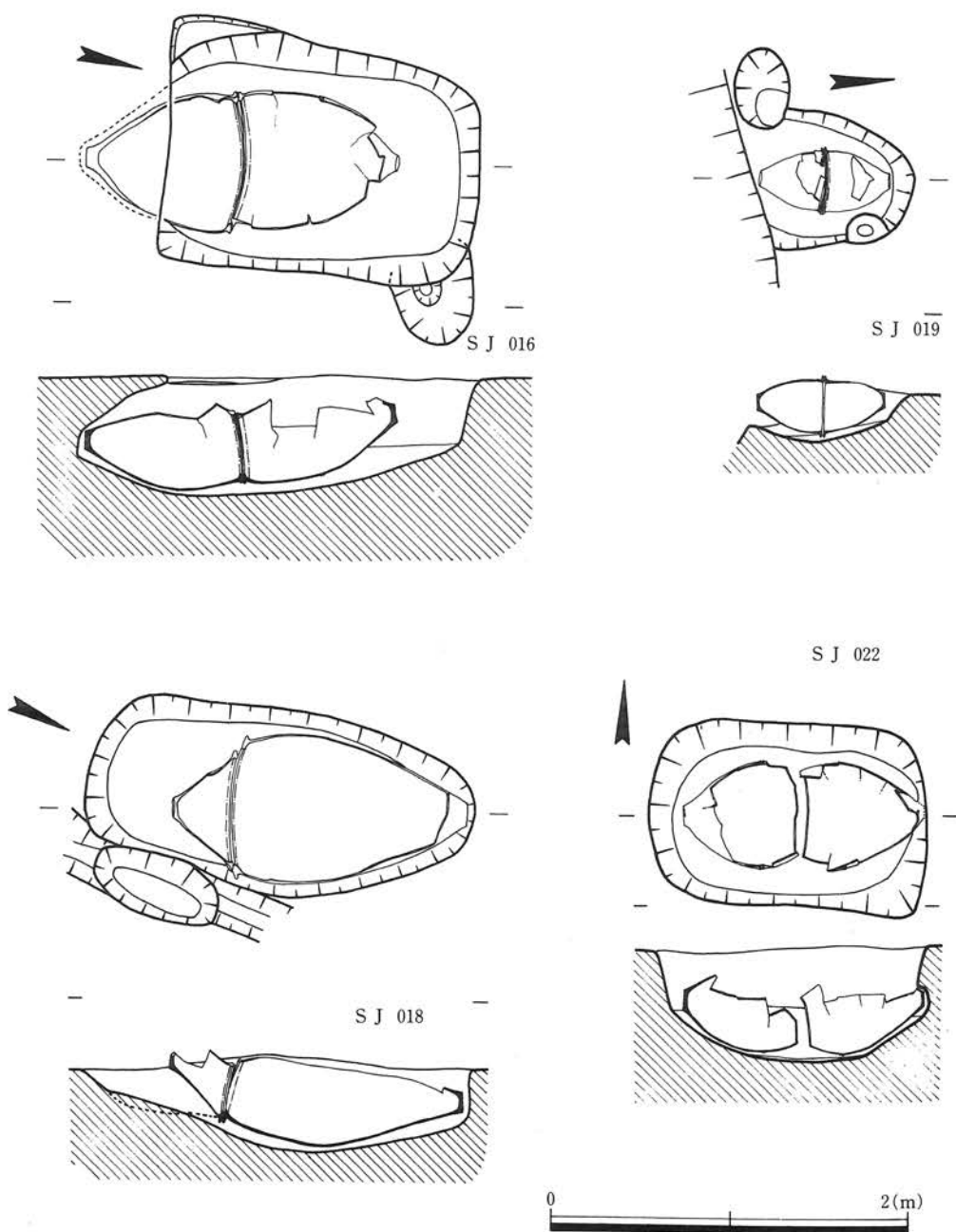


Fig. 18 S J 016. 018. 019. 022甕棺墓実測図

る。この棺の位置している付近は低丘陵の東端であり、元来浅く埋置されていたこともあるが、後世の攪乱により上部を欠損しているものが多い。主軸方位S-E63°、傾斜角7.3°。

SJ019甕棺墓

II区中央南端にある小児用複式棺である。周辺には小児用のSJ032・033甕棺墓があり小児用のものが比較的集中している所である。墓壙は長径が1m程度、短径が0.9mの楕円形を基調と

するものである。甕はほぼ同規模のものを東壁寄りに置き、埋置形式は接口式である。西壁をSD004に大きく切られている。主軸方位N-W90°、傾斜角-2.5°。

SJ022甕棺墓

II区東部に位置する成人用複式棺である。墓壇は長辺1.56m、短辺1.04mの隅丸長方形を基調とするもので、底面の断面は舟底状を呈する。棺は上下甕ともほぼ同規模の甕形土器を使用しているが、双方共に口縁部を打ち欠いている。検出状況では擬似口縁部が若干間隔をおいて埋置されているので元来の埋納形式は推定の域を出ないが、接口式の部類に入るものとする。また、接合部には粘土帯は全く見られない。この甕棺墓の特徴として主軸の方向が他の一連の甕棺墓群と大きく違うことが挙げられる。主軸方位S-W89°、傾斜角0°。

SJ023甕棺墓

II区の東南部に位置する成人用複式棺である。墓壇上面の平面形は長辺1.6m、短辺1.3mの隅丸長方形で、北西隅をSD002に切られている。棺は南壁に大きく穿たれた横穴に下甕が挿入されている。上甕が下甕に比してやや小型の甕を用いてあり、埋置形式は挿入式である。主軸方位S-E32.5°、傾斜角33.5°。

SJ024甕棺墓

II区の東南隅に位置する成人用複式棺である。墓壇上面の平面形は長辺1.7m、短辺1.26mの長方形を呈し、北壁に大きく穿たれた横穴に下甕を挿入している。また、墓壇上面は北西隅から東南隅にかけて不定形の大型土壌に切られている。棺は上下甕ともほぼ同規模の甕形土器を使用し、埋置形式は接口式である。主軸方位S-E19°、傾斜角-2°。

SJ026甕棺墓

II区の東南部に位置する成人用複式棺である。墓壇は基本的には長辺1.76m、短辺1m程度の隅丸長方形を呈するものであるが、西部掘込みを小土壌に切られている。また、東部中央から南西コーナーにかけてSK018土壌と切合い関係があり、土壌が甕棺墓に先行するものとする。棺はこの調査区では最も深く埋置されているものの一つで、最深部は掘込み下0.84mを計る。上下甕ともほぼ同規模の甕形土器が用いられ、埋置形式は接口式で、接合部付近に目貼りの粘土帯がめぐる。主軸方位S-E20.5°、傾斜角-5.8°。

SJ027甕棺墓

II区東部に位置する成人用複式棺である。墓壇は東西0.9m程度、南北約1m程度と推定される長楕円形で、北部をSJ028甕棺に、東部をSD002溝にそれぞれ切られている。棺は墓壇中央から南壁方向に斜めに穿たれた穴に埋置されており、埋置形式は上甕の残存状況がきわめて悪いので推定の域を出ないが、挿入式であるとする。主軸方位N-E0.5°、傾斜角38.5°。

SJ028甕棺墓

II区の東端に位置する成人用複式棺である。墓壇上面の平面形は長辺1.6m程度、短辺1.3m

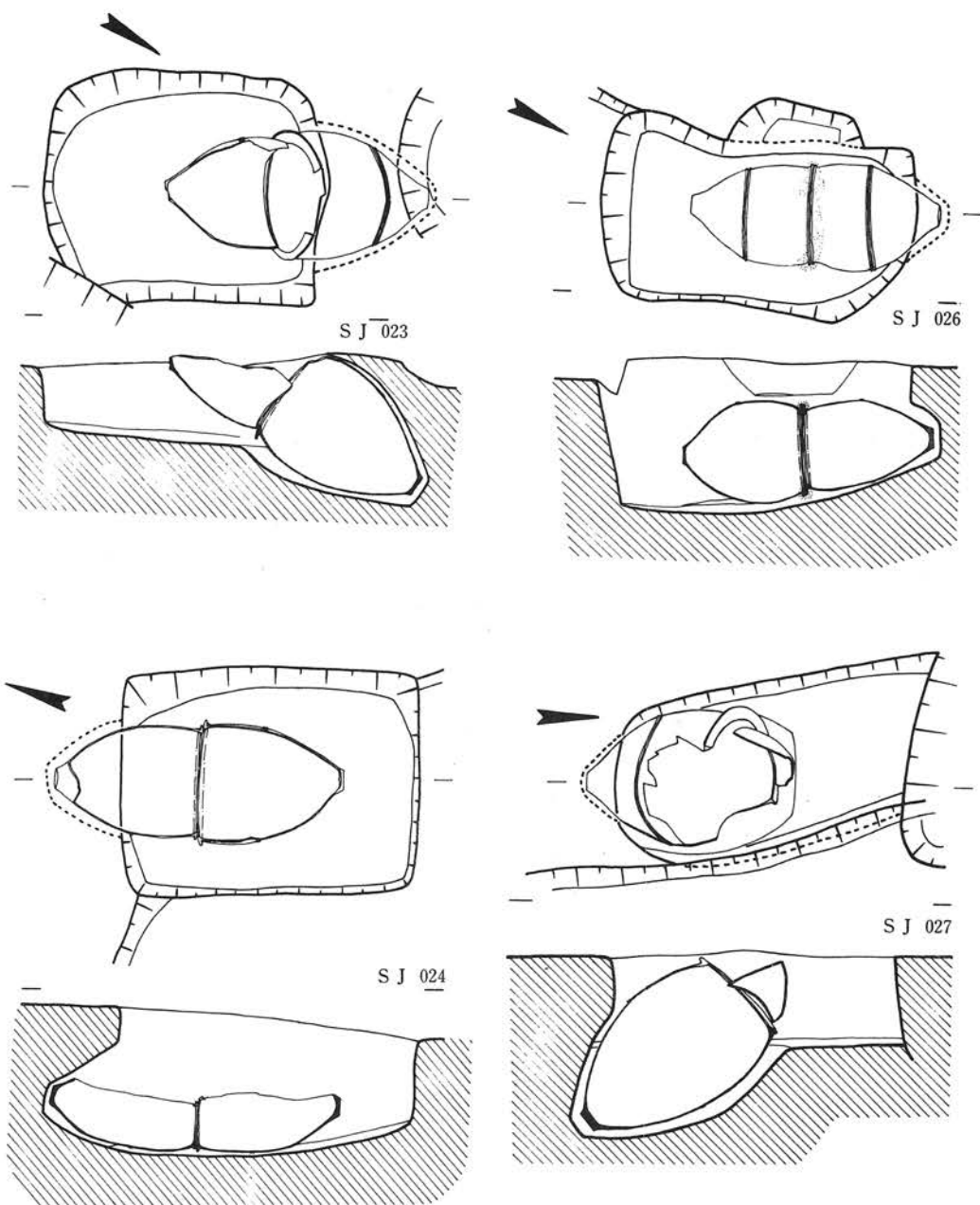


Fig. 19 S J 023. 024. 026. 027 甕棺墓実測図

程度の隅丸長方形のもので、南壁に0.4m程度の横穴を穿っているが、陥没し、形状は不定形を呈する。また、東側の掘込みをSD001、小ピットにそれぞれ切られている。棺は上甕の鉢形土器、下甕に大甕を使用したもので接合部は挿入式である。主軸方位N-E23°、傾斜角3.5°。SJ027 甕棺を切っている。

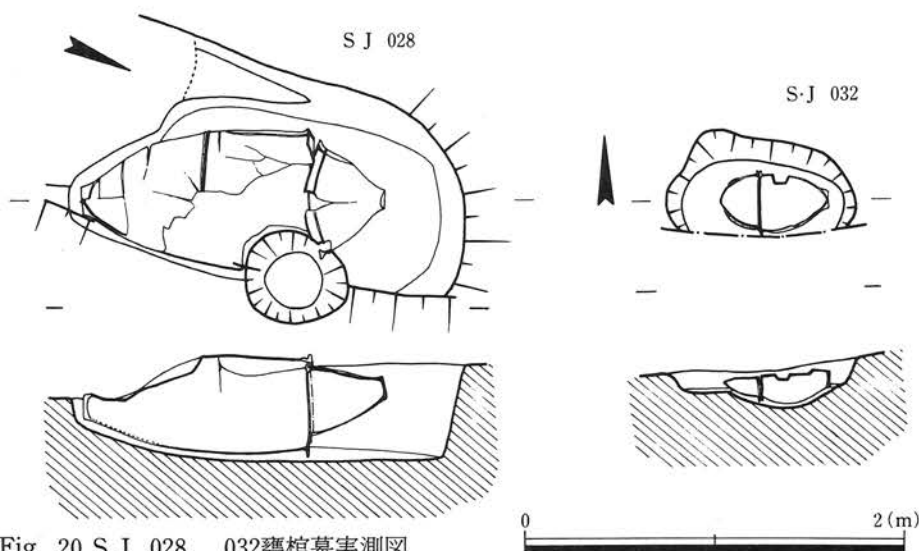


Fig. 20 S J 028, 032甕棺墓実測図

SJ032甕棺墓

II区の中央南端に位置する小児用複式棺である。墓壙上面の平面形は長径1m、短径0.6m程度の楕円形を基調とするものである。棺は東壁寄りに置かれ、その埋置されている付近は一段掘り下げられている。甕は上甕に鉢形土器、下甕に甕形土器が使われており、接合部は接口式である。主軸方位N-W57°、傾斜角5°。

(2) 祭祀遺構

主としてII区中央付近で4か所に検出した。付近は甕棺墓の空白地帯であり、10平方メートル程度の広がりをもつと考える。遺構は同時期に造営されたものではなく、わずかながら年代差があり、その形状・規模も変化に富む。

SR001祭祀遺構

II区中央のやや東寄りに位置する。上面の平面形は長径2.8m、短径1.25mを計る長楕円形である。また、遺構中央部には長径1.2m、短径0.7mの楕円形を呈するレンズ状のくぼみがある。深さは最深部で0.66mを測る。

埋土は一層の黒褐色土、二層の淡黒褐色土の二層から成り、遺物は主として一層から出土し、いわゆる底面直上のものは検出できなかった。遺物の種類としては壺形土器の他、高坏脚部、甕形土器細片等がある。

SR002祭祀遺構

II区中央にあって、SR001の北西部に位置する。上面の平面形は、最大幅2.8m、最小幅2m程度の不定形を呈する。底面はゆるやかな起伏があり、北東部が最も深く掘込み上面から0.65mを測る。底面は砂層となっていて湧水がある。

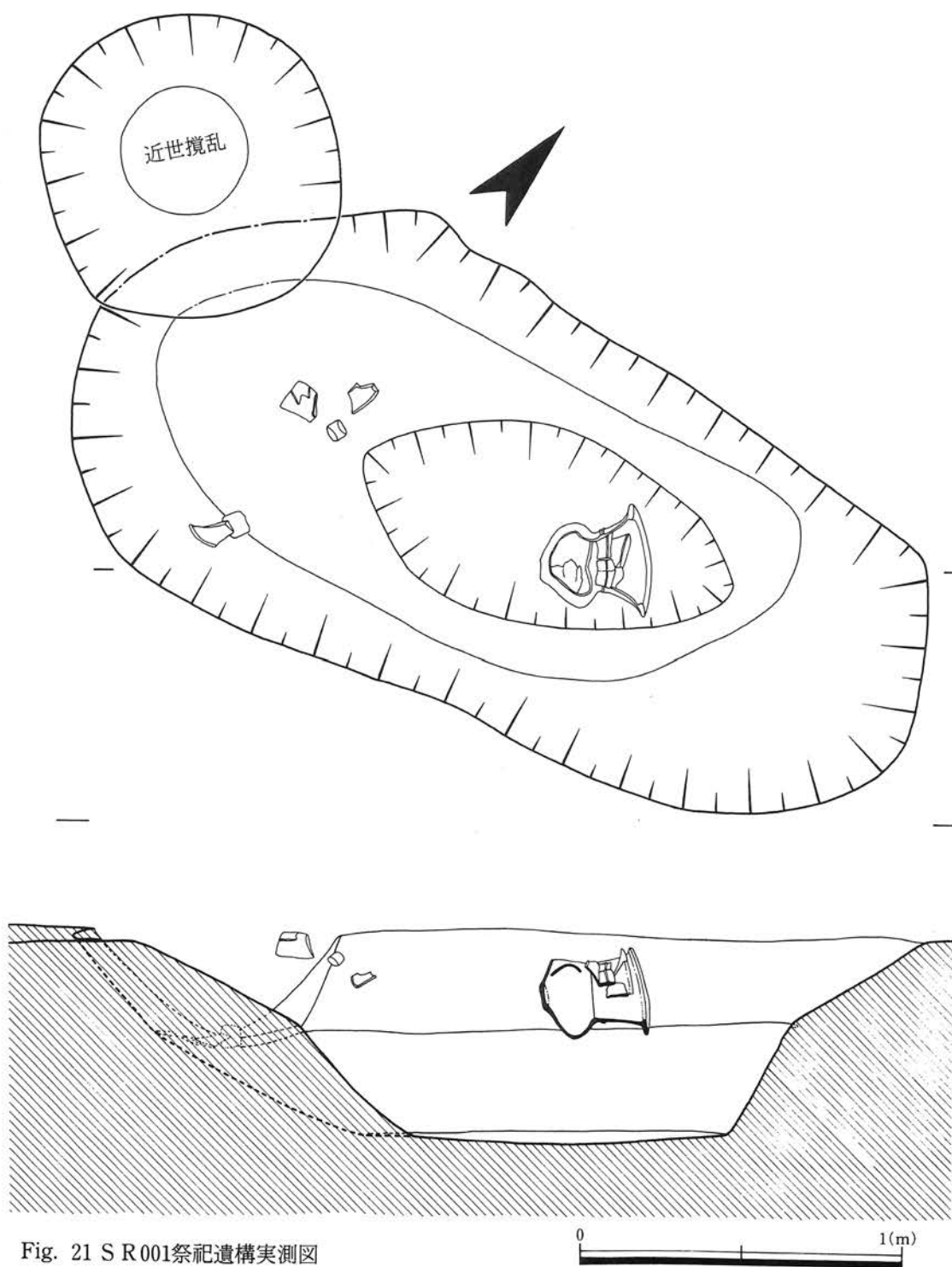


Fig. 21 S R 001祭祀遺構実測図

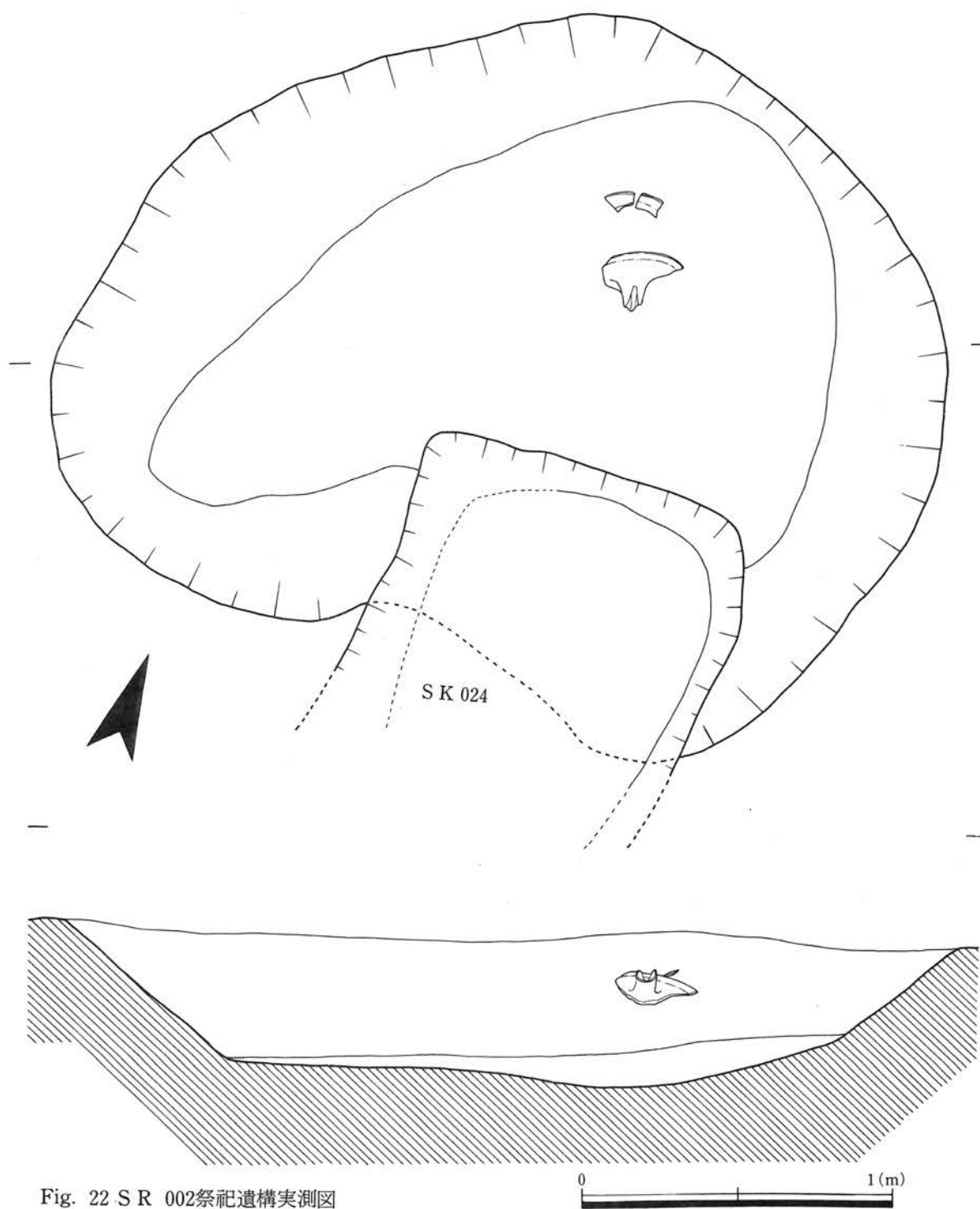


Fig. 22 S R 002祭祀遺構実測図

埋土は黒褐色でSR001のものと大差ない。遺物は遺構北東部から高坏の破片が検出されたが、掘込み下0.2～0.3m程度の深さで出土しいわゆる底面直上のものはない。時期的には遺物の特徴やSR001との位置関係から見て大差ない時期と考える。

(3) 土 壌

調査区西半部に集中し合計26基検出した。形状、規模も様々なものがあり、時期的には検出された遺物から弥生時代のものが多数を占める。大型のものは前述のSP001祭祀遺構に類似しているところがあり、後述する土壌も祭祀遺構の可能性もある。

SK007土壌

II区南西部に位置する。農道のため西部掘込みを調査できなかったが、東西検出全長3.8m、南北最大幅3.72mを測る不定形の土壌である。この付近は西南方向にむかって傾斜があるので深さは南部と北部では0.3m程度の差があるが、中心部で約0.7m程度を測る。

埋土は上層が黒褐色、下層が淡黒褐色で遺物そのほとんどが上層から検出された。種類は弥生時代前期末頃の甕で、その破片から二～三個体分と推定する。時期的に見るとI区に見る墓群の広がり東端と考えられる。

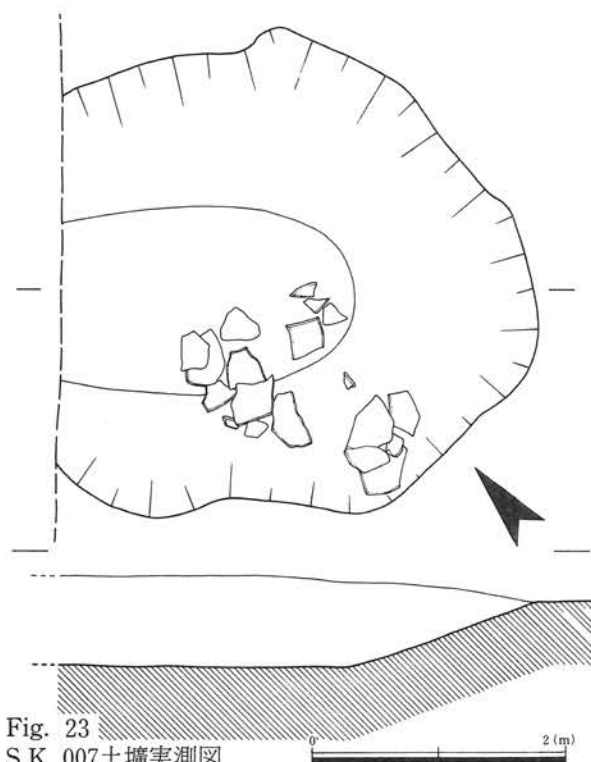


Fig. 23
SK 007土壌実測図

SK008土壌

II区西南端に位置する。SK009土壌と切合い関係を持ち、掘方南方は調査区外のため検出できなかった。東西幅2.4m、南北検出全長3m程度で、上面の平面形は南北に長い楕円形を基調とするものと考え。最深部は遺構中央南寄りにあり0.8mを測る。

埋土は上層黒褐色、下層淡黒褐色の二層から成り、遺物は主として上層部の上半から多く出土した。時期的には弥生時代前期末頃の甕棺が大破された状態で検出したが、レベル的にはそれらの破片より深い地点で弥生時代中期にかかる高坏を検出した。このことはこの遺構がどちらの

時期の所産か惑うところであるが、可能性としては、弥生前期の甕棺を伴う土壌を、中期の高坏を伴う小土壌が破壊していることがあるが明確にはできなかった。

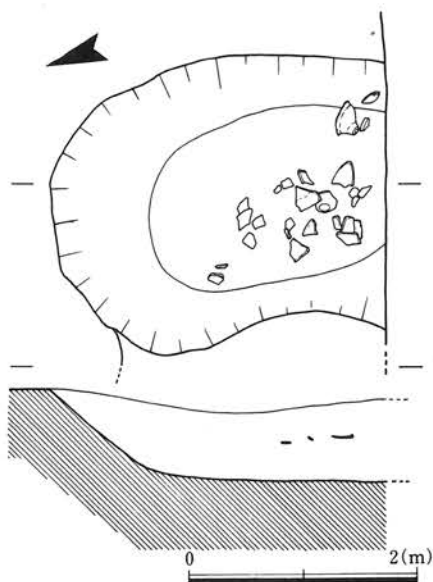


Fig. 24 S K 008土坑実測図

が、路肩破壊の可能性があったので遺物取上げ後すぐに埋戻した。

遺物の特徴から鎌倉～室町時代の所産と考えられる。

(4) 住居址

S B 001掘立柱建物跡

II区東部に位置し、南北主軸は東傾7°を測る2間×3間南庇付の建物である。桁行6.65m、梁行4.2m、庇幅1.2mを測る。柱間は南部の桁行で、東から西へ2.2・2.25・2.25mでほぼ均等にならぶ。妻柱は東西に検出した。柱穴の掘方は円形を基調とするものであるが、その規模は若干の差がある。

これらの柱穴以外にも周辺にいくつかのピットを検出した。それらの中にはこの建物と関係がある可能性を若干有していると考ええる。例えば当建物南西隅、南東隅、北部中央に庇とも推定できる一連のピットが存在している。これがこの建物に伴うものとすれば北側中央に一間の庇、南西隅から南東隅にまでめぐる庇ということになるが、ピットの位置関係の多少のズレと、2間×3間の建物規模にしては庇が多すぎるのではということから今回はそれらの一連のピットを時代的に差位があるものと判断した。

遺物は黒褐色土層中より土師器小皿の小片が若干出土した。また、いくつかの柱穴からは拳大の自然石を検出した。

(5) 溝

調査区東半にあって合計5条の溝を検出し、そのすべてが南北方向に走る。規模は上面幅0.4～0.5m、深さ0.1～0.5mを測る。

その他の土坑

今回図化できなかったものとして、西北隅に位置するSK002土坑がある。当遺構は、この遺跡を二分する農道下部に主たる部分が存在するが、現在農道の使用が頻繁なため、全体の調査を断念しなければならなかった。

検出規模は南北1.9m、東西1.2m程度で、上面の平面形は楕円形を呈するものと推定する。東部と南部が比較的ゆるやかに掘り込まれ、北壁部は垂直に近い。SJ002甕棺墓の北部掘込みを切り、最深部は0.8m程度を測る。

遺物は農道寄りで地表下0.3～0.5m程度から土師器小皿、坏が多量に発見された。農道下部にもまだ遺物の存在する可能性もあった

時期的には検出された遺物から判断して鎌倉～室町期のものと考えるが、調査区東端にあるSD001・002溝はその切合い関係からSB001建物に先行するものである。

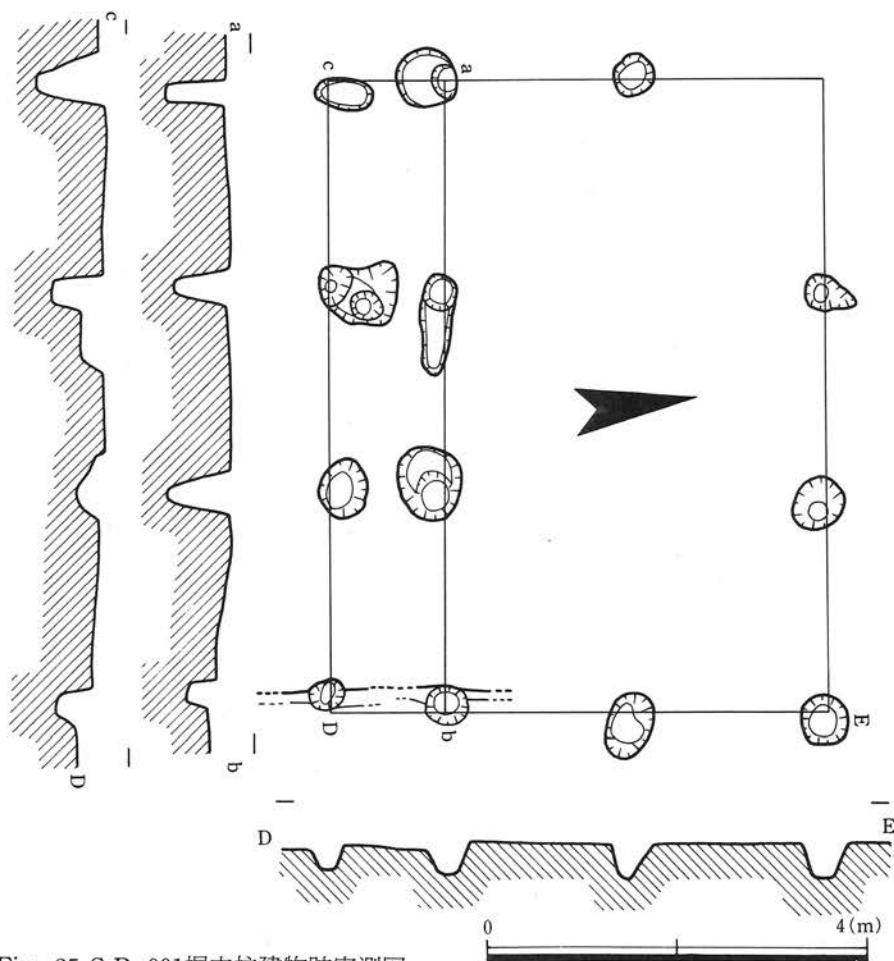


Fig. 25 S B 001掘立柱建物跡実測図

Tab. 1 東千布遺跡Ⅰ区甕棺墓一覧表

号数	甕棺形式	器形 (上・下)	土 墳 縦×横×深	方 位	傾 斜	備 考	時 期
1	接 口 式	甕・甕	(推) 1.5×7.4×0.24	S-E4.5°	6°		前期末
2	接 口 式	甕・甕	(推) 2.6×1.7×0.7	S-E 4°	8°	2号を切る	〃
3	接 口 式	甕・甕	1.2×0.6×0.38	N-W 1°	-8°		〃
4	接 口 式	甕・甕	0.82×0.5×0.1	N-E5.5°	21°		〃
5	接 口 式	甕・甕	1.36×0.9×0.16	S-W1.5°	8°		〃
6	単 棺	甕	0.64×-×0.1	N-E5.5°	-17°		〃
7	接 口 式	甕・甕	1.14×0.74×0.32	N-W5.8°	+12.3° -23.5°	小児用	〃

Tab. 2 東千布遺跡Ⅰ区土墳墓一覧表

遺構名	縦	横	深さ	方位	備考
SP001	1.11m	0.62m	0.38m	N-E 13.5°	6号甕棺を切る
SP002	1.17m	0.46m	0.39m	N-E 9.3°	
SP003	1.00m	0.46m	0.33m	N-E 18°	
SP004	0.92m	0.34m	0.23m	N-E 11°	
SP005	2.48m	1.50m	0.35m	N-E 11°	
SP006	1.53m	0.81m	0.43m	N-E 20.5°	
SP007	1.33m	0.59m	0.03m	N-E 15°	17号溝に切られる
SP008	2.21m	0.50m	0.40m	N-E 8°	
SP009	0.90m	—	0.38m	N-E 14°	

Tab. 3 東千布遺跡Ⅱ区甕棺墓一覧表

号数	甕棺形式	器形 (上・下)	土 墳 縦×横×深	方位	傾斜	備考	時期
1	接口式	甕・甕	1.53×0.76×0.24	S-E 14°	ほぼ 水平		中期前半
2	接口式	甕・甕	2.40×1.70×0.68	N-W 12.3°	-5.3°		〃
3	接口式	甕・甕	1.19×0.59×0.37	N-E 5.5°	7°	小児用	〃
4	接口式	一・甕	0.82×0.49×0.10	N-W 17.5°	11.5°	小児用	〃
5	接口式	甕・甕	—	S-W 33°	ほぼ 水平	小児用	〃
6	接口式	甕・甕	0.64×0.54×0.11	N-W 11°	-6.5°	小児用	〃
7	接口式	甕・甕	1.15×0.73×0.32	S-E 22°	5°	小児用	〃
8	接口式	甕・甕	0.80×0.61×0.26	N-W 44°	44°	小児用	〃
9	接口式	壺・甕	1.49×0.75×0.44	S-E 4°	12.5°	小児用	〃
10	接口式	甕・甕	1.88×0.92×0.58	N-E 7.5°	-5.5°	小児用	中期中頃
11	接口式	甕・甕	2.62×1.56×0.84	N-E 5°	-13.5°		中期前半
12	接口式	甕・甕	1.22×0.67×0.47	S-E 6°	-6°	小児用	〃
13	接口式	甕・甕	1.50×0.82×0.29	N-E 7.8°	ほぼ 水平	小児用	〃
14	接口式	甕・甕	2.85×1.19×0.62	N-W 11°	1°	東側を5号溝 に切られる	〃
15	接口式	甕・甕	1.78×1.24×0.59	N-W 18°	-2°	東側を4号溝 に切られる	〃
16	挿入式	甕・甕	1.75×1.27×0.67	N-W 15.5°	10.5°		中期初頭
17	—	—	—	—	—		—
18	接口式	鉢・甕	2.19×1.03×0.53	S-E 63°	7.3°		中期中頃
19	接口式	甕・甕	0.91×0.77×0.34	N-W 90°	-2.5°	小児用	〃
20	—	—	—	—	—		—
21	接口式	鉢・甕	1.00×0.82×0.42	S-E 19°	-5.5°	小児用	中期前半
22	接口式	甕・甕	1.57×1.03×0.64	S-W 89°	0°	上下甕とも口 縁部を欠く	〃

号数	甕棺形式	器形 (上・下)	土 墳 縦×横×深	方 位	傾斜	備 考	時 期
23	挿入式	甕・甕	1.55×1.29×0.78	S-E 32.5°	33.5°		中期中頃
24	接口式	甕・甕	1.68×1.28×0.79	S-E 19°	-2°		中期前半
25	—	—	—	—	—		—
26	接口式	甕・甕	1.78×1.00×0.80	S-E 20.5°	-5.8°		中期前半
27	挿入式	鉢・甕	1.50×0.96×1.00	N-W 0.5°	38.5°	東側を2号溝 に切られる	中期中頃
28	接口式	鉢・甕	2.10×0.91×0.48	N-W 23°	3.5°		〃
29	接口式	甕・甕	1.09×0.54×0.15	—	—		中期前半
30	接口式	甕・甕	2.07×1.29×0.50	N-W 7.5°	-2.5°		〃
31	挿入式	甕・甕	2.33×1.13×0.53	N-W 20.5°	4°		〃
32	接口式	鉢・甕	1.02×0.52×0.19	N-W 57°	5°	小児用	〃
33	接口式	甕・甕	0.96×0.46×0.18	S-E 26.5°	3°	西側を4号溝に切 られる 小児用	〃
34	接口式	甕・甕	1.75×0.61×0.33	S-E 14°	5.5°	小児用	〃
35	挿入式	壺・甕	1.25×0.70×0.32	N-E 14°	8°	小児用	〃
36		甕	0.91×0.34×0.20	—	—		—

Tab. 4 東千布遺跡Ⅱ区土墳一覧表

単位：m

土 墳 名	縦	横	深 さ	時 期	備 考
SK001	1.40	1.15	0.2	弥 生	
SK002	1.14	1.90	0.80	中 世	SJ002を切る
SK003	1.06	0.88		〃	
SK004	0.87	0.66	0.15	—	
SK005	0.91	0.90	0.30	—	
SK006	0.98	0.85	0.31	—	
SK007	3.75	2.57	0.78	弥 生	
SK008	2.98	2.30	0.46	〃	
SK009	1.86	2.14	0.27	〃	
SK010	1.76	1.09	0.15	〃	
SK011	1.40	1.30		〃	
SK012	1.40	0.96		〃	
SK013	0.80	0.76		〃	
SK014	0.80	0.88		—	
SK015	1.86	1.18		—	
SK016	0.72	0.42		—	

土 墳 名	縦	横	深 さ	時 期	備 考
SK017	0.69	0.58		中 世	
SK018	5.48	2.16		〃	SJ024・026を切る
SK019	1.10	0.76	0.37	〃	
SK020	0.86	0.54		—	
SK021	0.44	0.36		—	
SK022	2.30	2.14	0.78	中 世	SD003に切られる
SK023	1.04	0.92	0.33	〃	
SK024	2.92	1.10		中 世	SR002を切る
SK025	0.76	0.66	0.11	—	
SK026	0.80	0.65		—	
SK027	1.60	0.88		—	
SK028	1.80	1.07			

4. 遺 物

東千布遺跡は弥生時代の墳墓が検出遺構の大半を占め、その埋葬用に用いた甕が多数検出された。また、量的には少なくなるが、祭祀遺構からは高坏、壺形土器、土壇からは高坏、甕、土師器皿、坏、溝からは同じく土師器小皿、坏等を検出している。

土器以外の遺物は当遺跡では非常に少なく B I 区 SJ003甕棺墓内より磨製石剣の破片を一片検出した程度であとはこれといった遺物は出土していない。

(1) 土 器

a. 埋葬に用いられた土器

36基の甕棺墓が検出されたが、40基程度を復元し分類した。これらの埋葬用の土器は大別して甕、鉢、壺に分類でき詳細は下記のとおりである。

甕 { 大型甕……A₁・A₂・A₃・B₁・B₂・C・D・E
 小型甕……A₁・A₂

鉢……………A・B・C₁・C₂

壺……………A・B

大甕 A₁

弥生前期の大形壺から発達したものであるが、その形状をわずかにとどめる。器形は胴部付近から直線的に立ち上がり、口縁下部から外反傾向を見せ、口唇部に至っては内傾する。器壁は全体的に厚い。口縁下部外面で、壺形土器ならば頸部と肩部に2条の沈線をめぐらせている。

SJ003甕棺 (I 区) がある。上甕は底部を打ち欠き、口唇部外面に断面三角形の粘土帯を施している。器高82～84cm、口縁外径72cm。

大甕A₂

器形的にはA₁よりも前期大型壺の形状を色濃く残しているが、口縁部に新しい様相が見うけられる。全体的に丸みを帯び、胴部中央やや下位に最大径を有する甕形土器である。口縁部直下でくびれて外反し、口縁内部に粘土帯を貼り平坦に近い口縁を形成する。口縁上端外周には刻み目を施し、外面口縁下10cm付近と35cm付近に1条の沈線をめぐらせている。

SJ001(上)・006甕棺(単棺)がある。(双方ともI区)器高76cm程度、口縁外径53~65cm。

大甕A₃

概して丸みがなくなり、胴部上半部はわずかに内傾しているというよりも直線的に立ち上がるという表現が適している。A₂同様に器体上端のわずかに外反した部分に粘土帯を貼って口縁部を補強しているが、A₁・A₂に見られるような外面の沈線はない。

SJ001甕棺(下) 器高80cm、口縁外径63cm。

大甕B₁

器体上半部はわずかに内傾し、胴部最大径と口縁外径がほぼ等しく砲弾形を呈する。口縁部はT字形口縁である。T字形口縁はわずかに内側に低く傾斜しており、内側に強く突出する傾向を見せるが、外側へはB₂に較べ未発達である。底部はやや上げ底気味である。

SJ016甕棺(下)がある。(I区)器高86cm、口縁外径59cm。

大甕B₂

全体的な器形はB₁と似かよっており砲弾形を呈するが、口縁部がわずかに外傾する。T字形口縁で内側への突出が強く外側へは未発達である。口縁下10cm付近と胴部最大径付近に断面三角形の突帯を1条~2条めぐらす。

SJ011甕棺(上)・014甕棺(上)などがある(双方ともII区)器高90~110cm、口縁外径65~66cm。

大甕C₁

器体は砲弾形を呈しB類に比して大型化する。器体上半部がわずかに内傾し、T字形口縁を有する。B₂同様、口縁部は内側への突出が強く外側への突出は未発達である。胴部中央付近に断面三角形突帯を2条めぐらす。底部は平底である。

SJ027甕棺(上)がある。(II区)器高125cm、口縁部外径76cm。

大甕C₂

器体は砲弾形を呈し、東千布遺跡出土の甕棺では最大規模のものである。器体上半部はかす

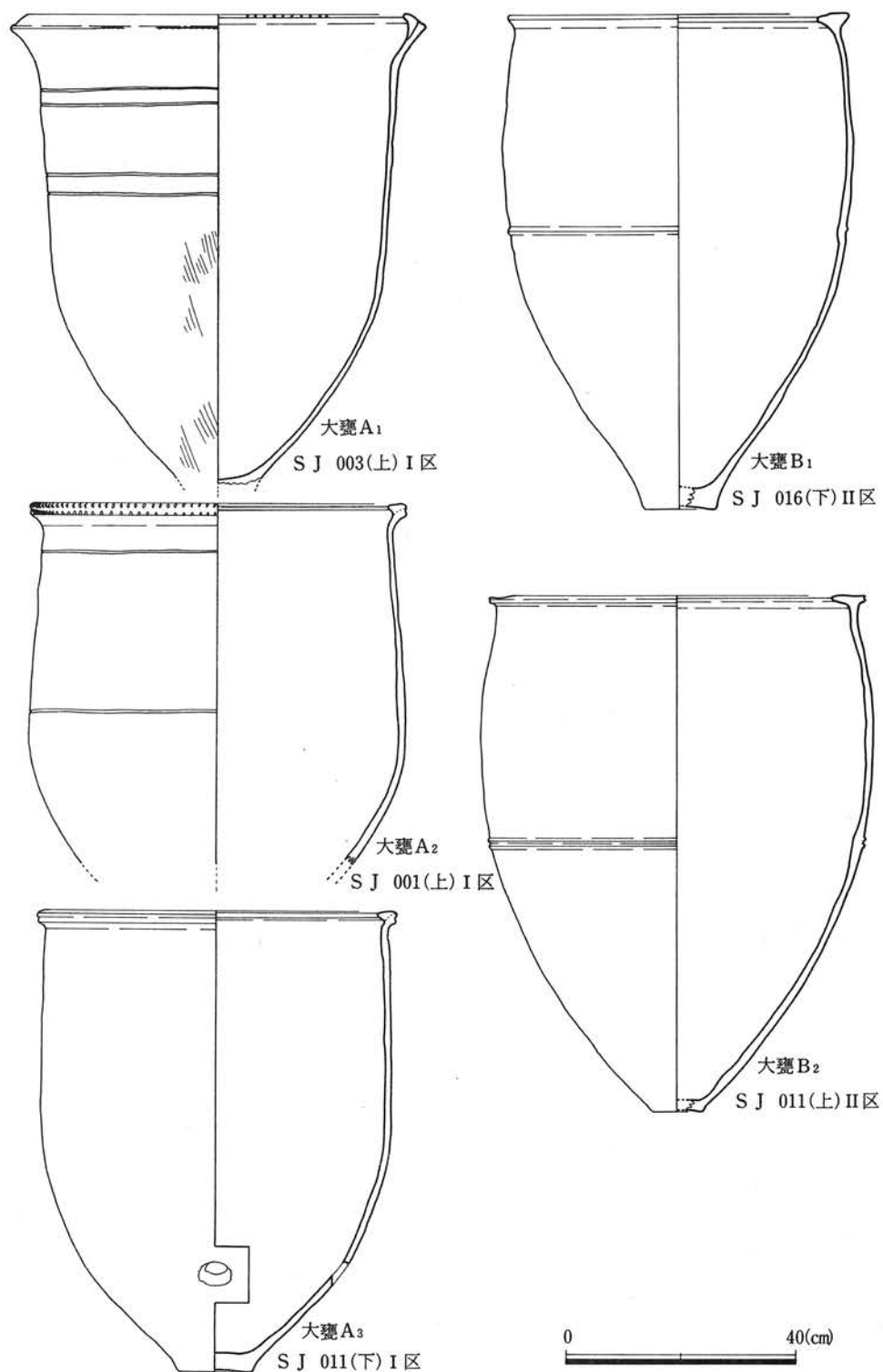


Fig. 26 甗棺実測図(1)

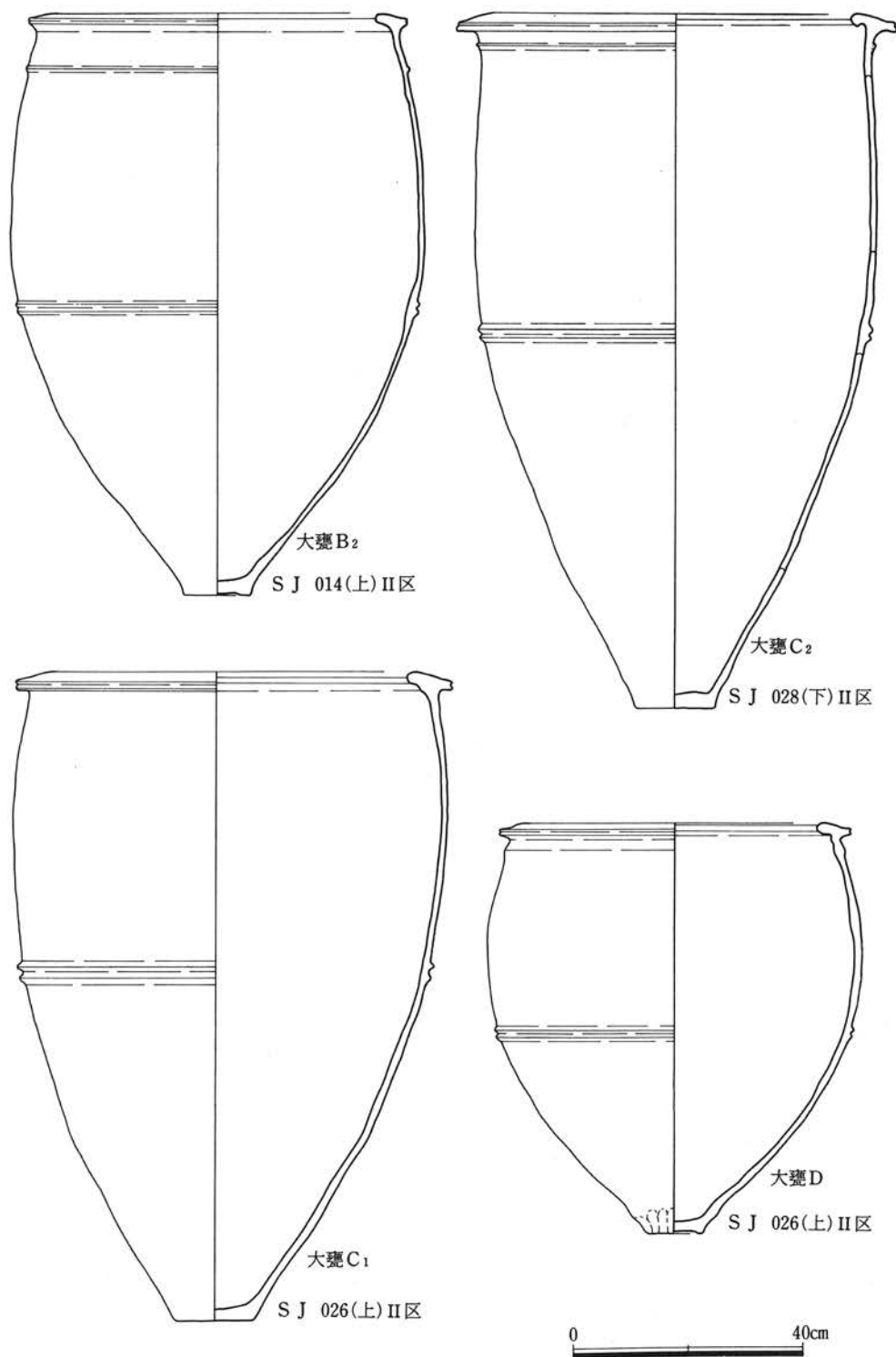


Fig. 27 甕棺実測図(2)

かな内弯傾向をみせ、口縁部はT字形のものを有する。口縁部は広がり外に向かってわずかな傾斜を有する。また口縁部はB₂よりも外側への突出が著しくなる。口縁下部と胴部中央付近に1～2条の断面三角形の突帯を貼りつけている。底部は平底である。

SJ028甕棺（下）がある。（II区）器高121cm、口縁部外径76cm。

大甕D

B₂を器高だけ低くした様相をもち、全体的に丸みを帯びる。口縁部はT字形をなし、内側への突出が強い。外側への突出はあまりない。胴部中央に断面三角形の突帯を有し、最大径は胴部上半にある。底部は上げ底気味である。

SJ009（下）・026（上）甕棺などがある。器高67～71cm、口縁部外径51～61cm。

大甕E

全体的に丸味を帯びた截頭卵形のものである。器体上半部は強く内傾し口径は狭くなり、器体中央付近に最大径を有する。口縁部は外側へ強く突出する。逆L字形に近いT字形平坦口縁をなす。口縁部下に0～1条、最大径部に1～2条の断面三角形の突帯がつく。底部は平底で厚くなり、径も大きくなる。

SJ027（下）・022（下）などがある。（II区）器高66cm、口縁部外径38cm。

小甕A₁

砲弾形を呈し、器体の上位がかすかに内傾する。口縁部は逆L字形の平坦口縁であるが外側への突出はまだ小さい。口縁下部に断面三角形の突帯を1～2条めぐらす。底部は厚さ2cm内外で比較的厚く、わずかに上げ底気味である。体部は底部より5cm付近で多少くびれ気味であるが、そこから大きく内弯しながら立ち上がる。

SJ013（下）がある。（II区）器高43cm、口縁部外径34cm。

小甕A₂

A₁よりも短躯で全体的に丸味を帯びる。口縁部はT字形口縁の様相をわずかに呈し、口縁上面は平坦な口縁の部類にはいりはするがやや丸味を帯びている。口縁平坦部は外側へ大きく突出している。底部はわずかに上げ底気味で厚さは1.2～1.5cmを測る。突帯は存在しない。

SJ019（上・下）などがある。器高36～37cm。口縁部外径32～33cm。

鉢A

器体は内弯しながら立ち上がり碗形を呈する小型鉢である。口縁部は内外への突出が同様に少なく、T字形口縁の名称も似つかわしくなく、あえていうならば断面逆三角形の口縁という

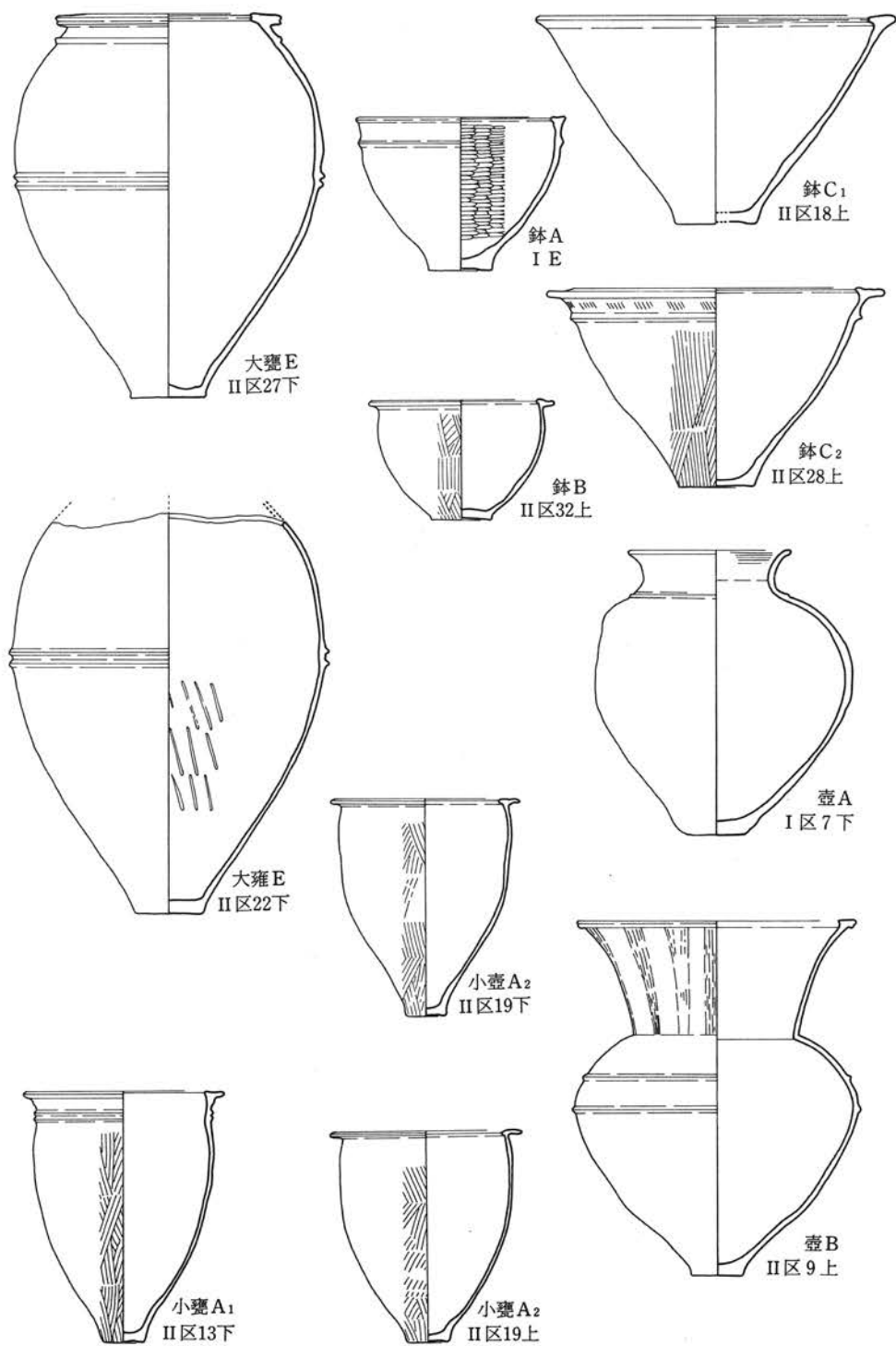


Fig. 28 甕棺実測図(3)

ことになろう。口縁下部に断面三角形の突帯が1条めぐり、底部はわずかに上げ底気味で厚さ1.8cmを測る。内面は全面が黒色で口縁部から底部付近までヘラミガキを施している。

SJ007（上）のみである。（Ⅰ区）器高24.5cm、口縁部外径36cm。

鉢B

半球形に近い碗形の器体に、内側へもわずかに突出した逆L字形口縁がつく。平坦口縁の部類に入ると考えるが、わずかに起伏があり、口縁部外端はやや下方に垂れる。底部は上げ底気味で厚さは1.5cmを測る。

SJ032（上）などがある。器高20.5cm、口縁部外径33cm。

鉢C₁

器体は直線的に大きく開く笠形を呈する大型鉢である。T字形口縁と考えるが、口縁部外面下部に変化があまり見られず、底部から直線的に延びる体部のラインが、そのまま口縁部外面端部までつづいているかのような様相を呈する。底部は上げ底気味で厚さ1.8cmを測る。

SJ018（上）のみである。（Ⅱ区）器高35.6cm、口縁部外径61.6cm。

鉢C₂

器体は底部から外側に大きく開く笠形を呈するが、体部のラインはC₁よりもやや丸味を帯びる。T字形平坦口縁は外側へ大きく突出している。口縁下部5cm付近に断面三角形の突帯を1条有する。底部は0.2cm程度の上げ底で厚さ1.1cmとC₁のものに比してややうすくなる。

SJ028（上）のみである。（Ⅱ区）器高34cm、口縁部外径57.5cm。

壺A

球形の様相を呈する体部に短く外反する口縁部がつき、頸部は短く内傾する。底部は径9.6cm、厚さ2.5cmを測る。体部は底部から内弯気味に立ち上がるが、胴下半部で一度わずかにくびれ、そこから再度大きく内弯し頸部に至る。最大径は胴部中央付近にあり、器壁は全体的に厚い。底部外端は丸味をもつ。

SJ007（下）のみである。（Ⅰ区）器高49cm、口縁部外径28.5cm。

壺B

鋤状口縁をもつ広口の壺である。口縁部は内外共に突出していて幅3cm程度の平坦面をもつ。頸部と胴部の境は明確であり、頸部内面には稜を有する。胴部中央から上半部にかけて、断面三角形の突帯を2条めぐらしている。底部は口径、器高の法量に比して9cmと小さく、平底である。頸部外面には等間隔で暗文が配されているが、部分的にはナデによって消されかけてい

る。また、全面に赤色顔料を塗布している。

SJ009（上）のみである。（Ⅱ区）器高62cm、口縁部外径47.5cm。

Tab.5 東千布遺跡出土主要甕棺観察表（Ⅰ区）

（口）口縁部 （凸）凸帯
（器）器形 （底）底部

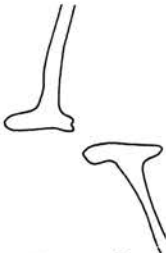
号数	器種	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	口縁部実測図(約1/6)
1 号 甕 棺	上	器高62.8cm(残存) 口外径 66.2cm 口内径 60.0cm 胴 径 65.7cm 底 径 不明	(口)外側に突出するT字形 (器)甕形 (凸)－ (底)不明	口縁部 ヨコナデ 口唇部に小さい刻みを施す 直線紋二条を口縁下と胴部にめぐらす 内外面ともタテ方向のナデ胎土、砂粒を含む、褐色	
	下	器 高 81cm 口外径 63.2cm 口内径 56.6cm 胴 径 61.4cm 底 径 13.2cm	(口)外側に突出するT字形 (器)甕形 (凸)－ (底)わずかにあげ底 胴下半部に穿孔あり	口縁部 ヨコナデ 内外面 タテ方向のナデ 胎土、砂粒を含む 褐色、口縁部より胴部にかけ一部灰 黒色	
2 号 甕 棺	上	不 明			
	下	器 高 不明 擬似外径59.2cm 擬似内径53.4cm 胴 径 60.0cm 底 径 14.0cm	(口)欠損の為不明 (器)甕形 (凸)－ (底)平底	口縁部、口唇部に刻み目があるがほとんど磨滅 口縁下8cm位に直線紋二条、胴部に二条めぐらす、口縁外頸部に貼り合せ、内部底部指先によるナデ、外面ハケ目、淡褐色	
3 号 甕 棺	上	器高81.0cm(残存) 口外径 72.5cm 口内径 64.8cm 胴 径 58.7cm 底 径 不明	(口)外側に外反するL字形 (器)甕形 (凸)－ (底)不明	口縁部 外反し口唇部が内側に突出している 。口縁外部に粘土を貼り付けている 。刻み目をめぐらしているが磨滅のため一部のみ 口縁下部 胴上部に直線紋二条をめぐらすが一週したかどうかは不明 胴部→底部にハケ目、胎土砂粒を含む、褐色、一部赤褐色	
	下	器 高 86.2cm 口外径 78.7cm 口内径 73.6cm 胴 径 70.0cm 底 径 14.5cm	(口)外側に外反するL字形 (器)甕形 (凸)－ (底)あげ底	口縁部 ヨコナデ 外面は磨滅がすすんでいる 底部はあげ底の平底で径は大きい 胎土は砂粒を多く含む、口縁部茶褐色胴部は淡褐色	

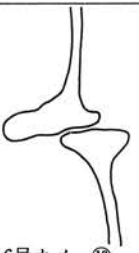
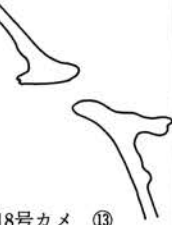
5号 甕棺	上	器高73.0cm(残存) 口外径 59.0cm 口内径 53.8cm 胴 径 59.9cm 底 径 不明	(口)外側に突出するL字形 (器)甕形 (凸)－ (底)欠損の為不明	口縁部 ヨコナデ 内外面ともタテ方向のナデ 輪積みあと顕著 胎土、砂粒含む、黒褐色	 5号カメ ④
	下	器 高 78.2cm 口外径 50.3cm 口内径 42.0cm 胴 径 60.0cm 底 径 13.0cm	(口)内側に突出するT字形 (器)甕形 (凸)－ (底)わずかにあげ底	口縁部 ヨコナデ 内外面 タテ方向のナデ 底部ややあげ底の平底で厚みがある 胎土、砂粒まじり土、褐色 一部口縁から胴部にかけ灰黒色	
6号 甕棺	単	器 高 76.8cm 口外径 52.7cm 口内径 46.0cm 胴 径 53.6cm 底 径 12.5cm	(口)外側に突出するT字形 (器)甕形 (凸)－ (底)わずかにあげ底	口縁部内部ハケ目 口唇部外面に刻み目 口縁下 ヨコナデ 内外面 タテ方向のナデ 輪積み痕顕著 胎土、砂粒を多量に含む 褐色、胴部の一部灰黒色	 6号カメ ⑥
7号 甕棺	上	器 高 49.2cm 口 径 26.7cm 胴径44.2cm(推) 底 径 9.6cm	(口)「く」の字状を呈す (器)壺 (凸)頸部下部断面三角形一条 (底)平底	口縁部内面に櫛状のヨコナデ 内面全体磨滅 剥落が著しい。	

Tab.6 東千布遺跡出土主要甕棺観察表 (Ⅱ区)

(口)口縁部 (器)器形 (凸)凸帯 (底)底部

号数	器種	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	口縁部実測図(約1/6)
2号 甕棺	上	器 高 93.7cm 口外径 48.6cm 口内径 36.2cm 胴 径 66.1cm 底 径 11.0cm	(口)内側に強く突出するT字形 (器)截頭卵形 (凸)胴部に断面三角形一条 (底)平底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 全体に底部から口縁部に向ってナデ あげている 胎土、砂粒含入	 2号カメ ⑦
	下	器 高 84.7cm 口外径 52.0cm 口内径 43.4cm 胴 径 66.3cm 底 径 12.8cm	(口)内側に強く突出するT字形 (器)截頭卵形 (凸)胴部に断面三角形一条 (口)平底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ ナデあげ 胎土、砂粒を多く含む	
9号 甕棺	上	器 高 62.8cm 口外径 47.5cm 口内径 41.3cm 胴 径 49.9cm 底 径 8.6cm	(口)広口壺形でT字形に近い (器)算盤玉形の体部をもつ (凸)胴部に断面三角突帯を二条 (底)平底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 頸部外面はヨコナデした後にタテに 4本～6本の暗紋を入れる 胎土、茶褐色の土に黒色を含む砂粒	 9号カメ ⑧
	下	器 高 67.0cm 口外径 47.6cm 口内径 36.2cm 胴 径 56.0cm 底 径 9.4cm	(口)内側に強く突出するT字形 (器)截頭卵形 (凸)胴部に断面三角形 突帯を一条 (底)平底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 内外面とも底部から口縁部にかけて ナデあげ	

号数	器種	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	口縁部実測図(約 $\frac{1}{2}$)
10 号 甕 棺	上	器 高 70.5cm 口外径 40.0cm 口内径 31.0cm 胴 径 53.8cm 底 径 10.0cm	(口) T字形 (器) 截頭卵形 (凸) 口縁下、胴部断面 三角形一条ずつ (底) 平底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 内外面ともタテ方向のナデ	 10号カメ ⑨
	下	器 高 46.5cm 口外径 40.0cm 口内径 32.5cm 胴 径 37.4cm 底 径 8.0cm	(口) T字形 (器) いちじく形 (凸) 口縁下断面三角形 一条 (底) あげ底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 胴部外面 2 cm巾位タテ方向ハケ目 内面胴部ナナメにナデ 底部に一定方向のナデ	
11 号 甕 棺	上	器 高 90.1cm 口外径 65.4cm 口内径 55.0cm 胴 径 67.0cm 底 径 8.8cm	(口) 内側に強く突出するT字形 (器) 砲弾形 (凸) 胴部断面三角形二条 (底) あげ底 底部に穿孔あり	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 外面、斜めナデあげ 内部 胴部にハクリ 底部に灰黒色	 11号カメ ⑩
	下	器 高 85.7cm 口外径 54.5cm 口内径 43.3cm 胴 部 56.4cm 底 径 9.0cm	(口) 内側に強く突出するT字形 (器) 截頭卵形 (凸) 胴部断面三角形二条 (底) 平底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 内外面ともにタテ方向のナデ	
13 号 甕 棺 (小児用)	上	器 高 49.2cm 口外径 37.9cm 口内径 33.0cm 胴 径 36.7cm 底 径 8.0cm	(口) 逆L字形 (器) いちじく形 (凸) 口縁下断面三角形 一条 (底) あげ底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 外面胴部ハケ目、ハケ巾 5 cm—45本 内面胴部、指頭調整 胎土、雲母を含む砂粒まじりの土 淡赤褐色、外面胴部、底部、黒色	 13号カメ ⑪
	下	器 高 43.0cm 口外径 34.8cm 口内径 29.0cm 胴 径 32.9cm 底 径 7.0cm	(口) 逆L字形 (器) いちじく形 (凸) 口縁下断面三角形 二条 (底) あげ底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 外面胴部ハケ目、ハケ巾 2.7cm—9本 内面 タテ方向のナデ 胎土、雲母を含む砂粒まじり土、茶 褐色、口縁部の一部、胴部全体黒褐 色、 内部底部だけ黒褐色	
14 号 甕 棺	上	器 高 100.9cm 口外径 56.4cm 口内径 44.8cm 胴 径 72.0cm 底 径 12.0cm	(口) 内側に強く突出するT字形 (器) 截頭卵形 (凸) 口縁下断面三角形一条 胴部断面三角形二条 (底) あげ底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 内面 タテ方向のナデ 外面 タテ方向のナデ 胎土 石英まじり土、茶褐色 外面胴部に灰黒色	 14号カメ ⑫
	下	器 高 95.7cm 口外径 58.3cm 口内径 43.7cm 胴 径 74.0cm 底 径 11.3cm	(口) 内側に強く突出する T字形 (器) 砲弾形 (凸) 胴部断面三角形一 条 (底) あげ底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 内面 タテ方向のナデ、底部にヘラ調整 外面 タテ方向のナデ 胎土 砂粒、0.5～0.8cmの石英がま じる、茶褐色	

号数	器種	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	口縁部実測図(約1/4)
16号 甕 棺	上	器 高 89.7cm 口外径 64.0cm 口内径 53.6cm 胴 径 67.0cm 底 径 9.6cm	(口)内側に強く突出するT字形 (器)截頭卵形 (凸)胴部断面三角形二条 (底)あげ底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 内面 タテ方向のナデ、外面、タテ方向のナデ 胎土、雲母を含む砂粒まじり 赤褐色一部灰黒色	 16号カメ ⑬
	下	器 高 86.2cm 口外径 63.8cm 口内径 52.0cm 胴 径 68.2cm 底 径 11.8cm	(口)内側に強く突出するT字形 (器)截頭卵形 (凸)胴部断面三角形一条 (底)あげ底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 内面 タテ方向のナデ 外面 胴上部ハケ目 タテ方向のナデ	
18号 甕 棺	上	器 高 35.4cm 口外径 60.0cm 口内径 50.2cm 底 径 13.4cm	(口)内側に突出するT字形 (器)鉢形 (凸) - (底)あげ底	口縁部 ナデ 凸帯部 - 胎土 砂粒まじり土 外面、内面 ナナメ方向のナデ	 18号カメ ⑬
	下	器 高 127.6cm 擬似口外径80.7cm // 口内径66.6cm 胴 径 86.6cm 底 径 13.5cm	(口)内側に強く突出するT字形 (器)截頭卵形 (凸)口縁下断面三角形一条 胴部断面三角形二条 (底)平底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 胴部 タテ方向のナデ 胎土 茶褐色砂粒まじり 外面、内面 タテ方向のナデ	
19号 甕 棺 (小児用)	上	器 高 36.0cm 口外径 32.6cm 口内径 24.5cm 胴 径 28.0cm 底 径 8.0cm	(口)内側に突出するT字形 (器)いちじく形 (凸) - (底)あげ底	口縁部 ナデ 凸帯部 - 胎土 雲母を含む砂粒まじり 外面ハケ、ナデ、胴部磨減で少しうすれている。二種類のハケ使用 底部3cm巾一ハケ目30本 内面ナデ	 19号カメ ⑭
	下	器 高 37.0cm 口外径 29.0cm 口内径 25.5cm 胴 径 29.0cm 底 径 7.0cm	(口)内側に突出するT字形 (器)いちじく形 (凸) - (底)あげ底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 - 胎土 雲母を含む砂粒まじり、淡褐色 外面ハケ目、一部磨減で消えているハケ巾3cm一16本、内面 ナデ	
22号 甕 棺	上	残存器高63.4cm 擬似口縁径 42.0cm 胴 径 58.2cm 底 径 11.7cm	(口) - (器)截頭卵形 (凸)胴部断面三角形二条 (底)平底	口縁部 - 凸帯部 ヨコナデ 外面 ナナメ方向のナデ 内面 ナナメ方向のナデ 胎土、石英を含む砂粒まじり、褐色 胴部外面灰黒色	 22号カメ ⑮
	下	残存器高 67.5cm 擬似口縁径 42.9cm 胴 径 56.6cm 底 径 11.5cm	(口) - (器)截頭卵形 (凸)胴部断面三角形二条 (底)平底	口縁部 - 凸帯部 ヨコナデ 外面 ナナメ方向のナデ 内面 擬似口縁部附近ヨコナデ ナナメ方向のナデあげ	
23号 甕 棺	上	器 高 70.3cm 口外径 45.5cm 口内径 37.9cm 胴 径 54.6cm 底 径 10.6cm	(口)内側に突出するT字形 (器)截頭卵形 (凸)胴部断面三角形二条 (底)平底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 内外面 ナデ 胎土 砂粒を含む 灰褐色	 23号カメ ⑯
	下	器 高 89.6cm 口外径 67.6cm 口内径 55.8cm 胴 径 63.4cm 底 径 10.8cm	(口)内側に強く突出するT字形 (器)砲弾形 (凸)胴部断面三角形二条 (底)あげ底	口縁部 輪積み痕顕著 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 内外面 ナデ 外面底部から7cm位へラ状の工具によるナデ痕胴部凸帯部輪積み痕顕著、茶褐色 口縁部、胴上部に灰黒色	

号数	器種	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	口縁部実測図(約1/6)
24号 甕 棺	上	器 高 84.0cm 口外径 57.8cm 口内径 42.0cm 胴 径 60.8cm 底 径 —	(口)内側に強く突出するT字形 (器)截頭卵形 (凸)胴部断面三角形二条 (底) —	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 内外面 ナデ 胎土、石英等砂粒を含む、灰茶褐色 胴部下部灰黒色、口縁下5~6cm 輪積み痕	 24号カメ ⑬
	下	器 高 79.1cm 口外径 64.0cm 口内径 55.6cm 胴 径 64.2cm 底 径 9.2cm	(口)内側に強く突出するT字形 (器)砲弾形 (凸)胴部断面三角形二条 (底)平底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 内外面 タテ方向のナデ 外面底部附近ヘラ状工具による痕跡、 胴部輪積み痕顕著、褐色	
26号 甕 棺	上	器 高 71.5cm 口外径 60.8cm 口内径 50.8cm 胴 径 65.0cm 底 径 10.2cm	(口)内側に強く突出するT字形 (器)砲弾形 (凸)胴部断面三角形二条 (底)あげ底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 内外面 タテ方向のナデ 胎土 石英、雲母含む、褐色 底部から凸帯部上10cm位まで灰黒色あり 底部から4cmヘラ状工具による痕跡様あり	 26号カメ ⑭
	下	器 高 69.0cm 口外径 54.2cm 口内径 44.8cm 胴 径 53.7cm 底 径 11.2cm	(口)内側に強く突出するT字形 (器)砲弾形 (凸)胴部断面三角形二条 (底)あげ底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 内外面 タテ方向のナデ 胎土 石英、雲母含む、褐色 底部、凸帯部下まで灰黒色あり 底部から4~5cm位までヘラ状工具による痕跡	
27号 甕 棺	上	器 高 113.2cm 口外径 76.0cm(推) 口内径 66.4cm(推) 胴 径 73.4cm 底 径 13.9cm	(口)内側に突出するT字形 (器)截頭卵形 (凸)胴部断面三角形二条 (底)平底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 内外面 タテ方向のナデ 胎土 砂粒まじり土、淡褐色 内外面 赤褐色	 27号カメ ⑮
	下	器 高 66.0cm 口外径 39.2cm 口内径 28.8cm 胴 径 48.8cm(推) 底 径 13.0cm	(口)内側に突出するT字形 (器)砲弾形 (凸)口縁下断面三角形一条 胴部断面三角形二条 (底)平底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 外面 タテ方向のナデ 内面 磨滅し剥落している	
28号 甕 棺	上	器 高 34.4cm 口外径 56.9cm 口内径 46.7cm 底 径 12.3cm	(口)内側に突出するT字形 (器)鉢形 (凸)口縁下断面三角形一条 (底)わずかにあげ底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 内面 ナメ方向のナデ、胴部指頭調整 外面 ハケ目 螺旋状に積み上げている	 28号カメ ⑯
	下	器 高 121.2cm 口外径 78.8cm(推) 口内径 64.0cm(推) 胴 径 69.6cm(推) 底 径 14.0cm	(口)内側に強く突出するT字形 (器)砲弾形 (凸)口縁下断面三角形一条 胴部断面三角形二条 (底)平底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 内外面 タテ方向のナデ 胎土 石英を含む砂粒まじりの土 赤褐色	
32号 甕 棺	上	器 高 20.7cm 口外径 30.6cm 口内径 25.0cm 胴 径 27.6cm 底 径 9.8cm	(口)内側に突出するT字形 (器)鉢形 (凸) — (底)あげ底	口縁部 ヨコナデ 外面 口縁下はヨコナデした後ハケ目、 胴部ハケ目 内面 タテ方向のナデ 胎土 0.1~0.3cmの砂粒を含む 淡褐色、底部灰黒色	 32号カメ ⑰
	下	器 高 36.2cm 口外径 33.6cm 口内径 27.0cm 胴 径 29.5cm 底 径 8.2cm	(口)逆L字形 (器)いちじく形 (凸) — (底)わずかにあげ底	口縁部 ヨコナデ 外面 ハケ目 ハケ巾3cm—23本 内面 タテ方向のナデ 胎土 砂粒を含む、淡褐色	

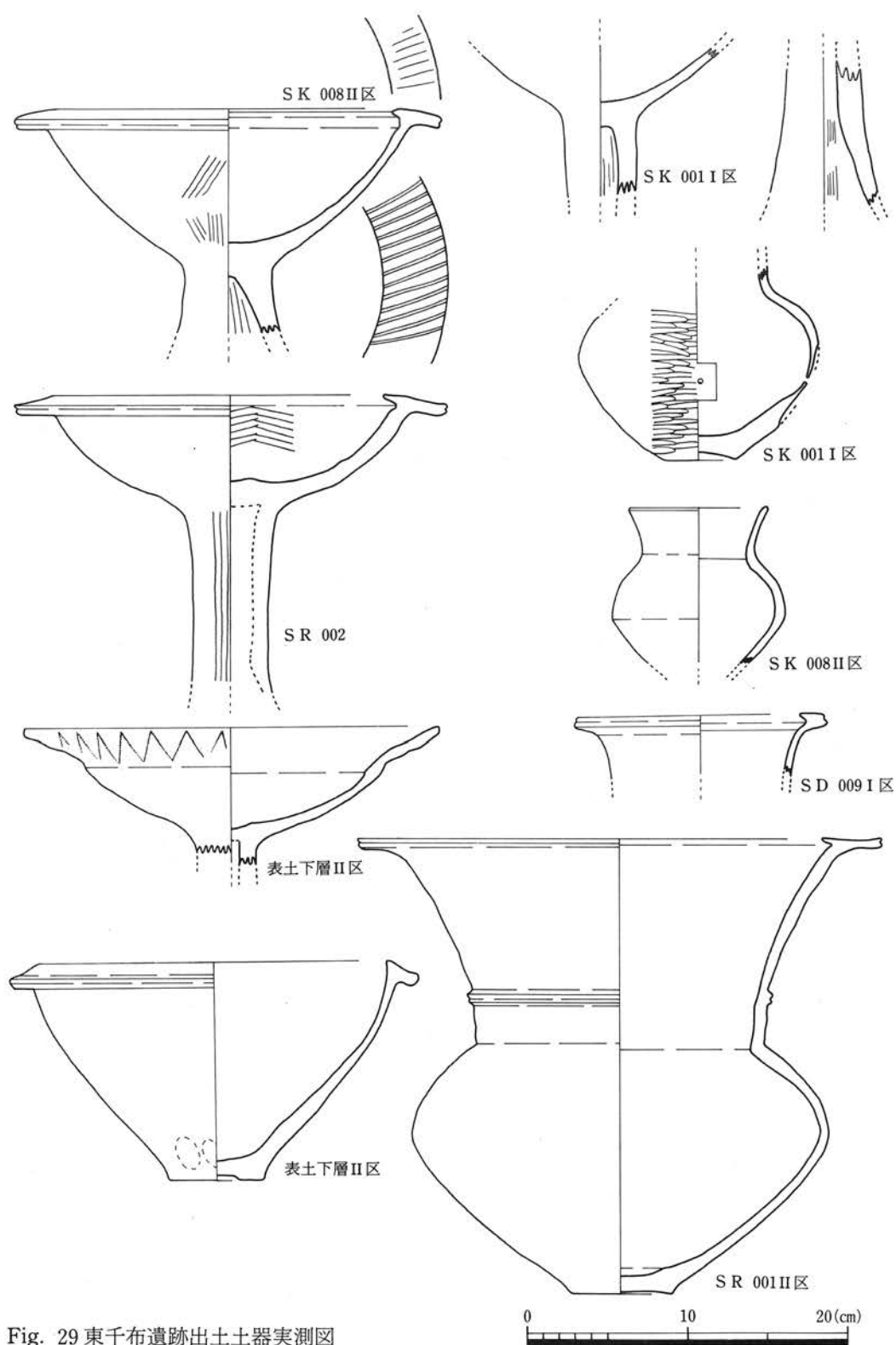


Fig. 29 東千布遺跡出土土器実測図

b. その他の土器

甕棺以外の土器として土壌や溝から高坏・鉢・壺・小皿・坏・磁器碗などがあるが、その数は少ない。個体数的には中世の溝、土壌出土の土師器が群を抜いているが、その大半が細片であり、比較的完形に近いものを検出した遺構はII区のSK002・003土壌程度しかない。当遺跡で検出した甕棺以外の特徴的な遺物をいくつか抽出し後述する。

Tab. 7 東千布遺跡出土土器観察表

器種 番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
高坏 1	(1)口径21.4 (2)器高 — (3)座径 —	T字形口縁を呈し、外への強い突出がある。	主としてナデ、ヨコナデ。外面の一部にハケ目が見られる。口縁平坦部に暗紋有り。	SK008 下層出土
高坏 2	(1) 26.9 (2) — (3) —	T字形口縁であるが、1よりも内側への突出が強い。 脚部は直線的である。	ナデとヨコナデによる。内面の一部と脚部外面にハケ目がある。	
高坏 3	(1) 25.8 (2) — (3) —	受部は脚部から内弯気味に立ち上がり、中央付近でゆるやかに外反する。	外面体部に縦方向のハケ目あり。 口縁部は内外面共にヨコナデ。	
高坏 4	(1) — (2) — (3) —	脚部は直線的な様相を呈する。	磨滅が著しいが、わずかにナデのあとが見うけられる。	赤色顔料の 痕跡有り。
高坏 5	(1) — (2) — (3) —	裾部はゆるやかに広がる様相を呈する。	内外面の一部に縦方向のハケ目あり。	SD004 上層出土
壺 6	(1) — (2) — (3) 4.4	上げ底の底部からゆるやかに内弯しながら立ち上がり、胴部上半に最大径を有する。	外面主としてヘラミガキ。	穿口部分の 器体が一部 剝離してい る
壺 7	(1) 8.8 (2) — (3) —	最大径が胴部中央付近にあり、口縁部はゆるやかに外反する。 口縁端部は丸みを帯びる。	内面ヨコナデ、ナデ、外面ナデのあとハケ目調整。	
壺 8	(1) 15.4 (2) — (3) —	大きく反外する口縁端部に補強のため粘土帯を貼りつけ平坦口縁を形成している。	主としてヨコナデとハケ目調整。	流れ込み
壺 9	(1) 32.5 (外径) (2) 28.3 (3) 6.5	平底に近い上げ底気味の底部を有し、体部は中央付近から大きく内傾し頸部に至る。 頸部は明瞭にくびれ、そこから反外しながら立ち上がり口縁部に至る。口縁部はT字形を呈するが、内側への突出がよわい。	外面は口縁部から胴部中央付近までヨコナデ、胴下半部に縦方向のナデ。 内面はナデとヨコナデ、頸部付近は強いナデ上げのあとヨコナデ。	上層出土
鉢 10	(1) 21.6 (2) 13.6 (3) 6.0	口縁部は外側に垂れ気味に突出する。底部は中央部付近のみ上げ底である。	主としてナデとヨコナデ、内外面の一部にハケ目が残る。	

土師器・磁器

東千布遺跡では中世の遺物として土師器・磁器を検出した。土師器についてはその大半がII区のSK002土壌より検出したものであるが、数種類に分類できると考え後述する。

小皿 A₁

口径8～9 cm、器高1.0～1.6 cm、底径7.2～8 cm。比較的体部と底部の境界が明確である。1

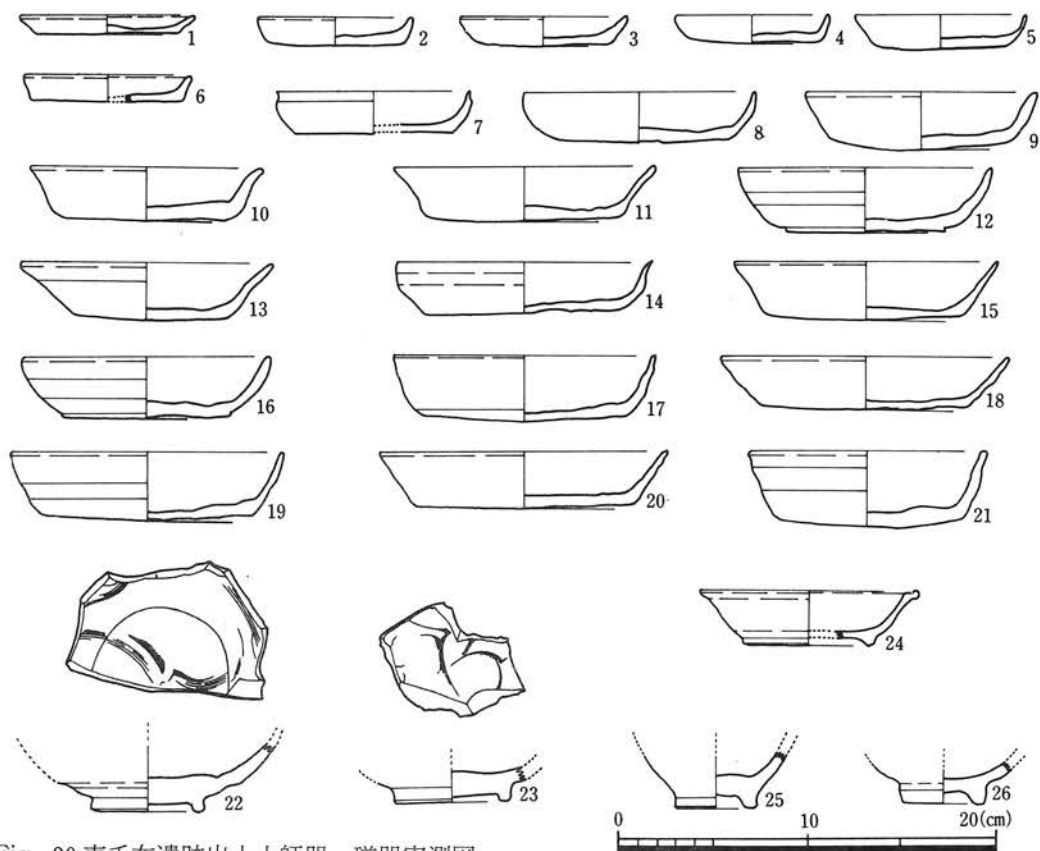


Fig. 30 東千布遺跡出土土師器。磁器実測図

～4、6 などがある。

小皿 A₂

口径 9 cm、器高 1.8 cm、底径 7 cm で口径と器高の割には A₁ に比して底径が小さい。体部と底部の境界が丸みを帯びていて不明確である。5 などがある。

坏 A₁

坏類の中では最も法量が小さく、7 で口径 10.1 cm、器高 2.3 cm、底径 8.3 cm を測る。底部と体部の境は比較的明瞭で、口縁部は直立する。口縁端部に力強い回転ヨコナデがあり、そのため口唇部は先鋭化する。

坏 A₂

A₁ と形態は似かよっているが、法量がやや大きい。8 で口径 12.3 cm、器高 2.8 cm、底径 9.2 cm を測り、体部の厚さに比して底部は 0.9 cm と厚い。口縁端部は先鋭化し直立気味に立ち上がる。

坏 B

坏類の中でも法量が中位であり、9～17 があてはまる。口径は 12.2～14 cm、器高 2.7～3.6 cm、底径 8.4～11 cm を測る。すべての底部に糸切り痕を有する。

坏C

B類より器高の割には口径が大きいものの一群で18~20などがある。口径14.4~15.2cm、器高1.8~3.4cm、底径11~11.4cmを測る。この一群は底部と体部との境が明確である。

坏D

口径の割には器高の高いもので、21がそれである。口径12.6cm、器高4cm、底径9.8cmを測る。底部、体部共に器壁は厚く口縁端部は平坦に近くなっている。底部は平底ではあるがやや丸味を帯びている。

磁器

すべてが破損しており全体の様相は不明であるが22・23・26は青磁、24・25は白磁である。22・23は淡緑灰色を呈する碗で見込みにクシ状工具による文様を有する。色調、形態から見て龍泉窯系のものとする。

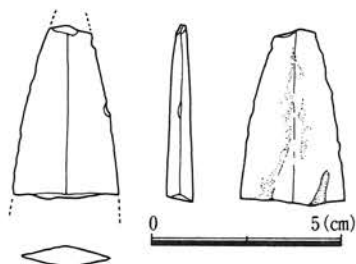


Fig. 31 磨製石剣実測図

c. 石器

前述の土器数に比して石器類の出土は非常に少なかった。表土下層より黒よう石の細片は若干検出したものの、石鏃類は皆無である。右図の石器はI区SJ003甕棺墓内より検出したもので磨製石剣と考える。残存最大長4.7cm、最大幅2.8cm、最大厚0.7cmで一方の面は磨滅が進んでいる。甕棺内部より折れた状態で検出されたことから供献とは考え難く、埋葬された者が刺突され、折れささったまま埋置されたのではなかろうか。

5. ま と め

今回発掘調査を実施した東千布遺跡（I・II区）は佐賀市金立町千布に所在する東千布遺跡の一部分である。調査の結果、甕棺墓42基、土壇基9基、土壇27基以上、祭祀遺構3か所、掘立柱建物跡1棟、溝、ピット多数を検出した。

甕棺墓については佐賀市での調査例を列記すると、大門遺跡^{註1}、大門西遺跡^{註2}、六本黒木遺跡^{註3}、金立開拓遺跡^{註4}などがあり調査例はあまり多くない。この他に銅戈鋳型を出土した櫟木甕棺遺跡、開墾中に多数の甕棺が出土した條木野遺跡などがあるが、いずれも本格的な調査は実施されていない。

今回検出した甕棺墓はその使用された土器により、弥生前期末から中期中頃にかけてのものであり、数的には中期初頭のものが大半を占める。42基中18基が小児用であった。墓壇上面はほとんどのものが削平・攪乱されており、小児用は特に破壊が進んでいた。I区の6号甕棺墓をのぞいて他はすべて複式棺であり、接合部は接口式がほとんどであった。主軸方向は概ね南北方向に延びる丘陵に平行しているが、II区のSJ022甕棺墓だけは東西方向であり、接合部も上

下甕共口縁部を打ち欠くなど特異な在り方を呈する。

棺として用いられた土器は、甕（大型甕・小型甕）・鉢・壺の3器種14型式に分類できると考える。これまで甕棺の編年については多くの先学によって検討されてきたが、本遺跡でも詳細な時期区分をし、それらに対応させるべきであったが時間的制約から果たせず、ここでは普遍的に用いられる森貞次郎氏編年と比較してみると次のようになると考える。

大甕A₁（前期後半・伯玄式）、大甕A₂・A₃・鉢A・壺A（前期末・金海式）、大甕B₁（中期初頭・城ノ越式）、大甕B₂（中期前半・汲田式）大甕C₁・C₂・D・E・小甕A₁・A₂・鉢B・C₁・C₂・壺B（中期中頃・須玖式）

特にこの中で弥生時代前期後半から前期末にかけて大甕の変遷は壺から甕への発達を示し、口縁部の形態も平坦口縁に至るまでさまざまな試みが行われている。

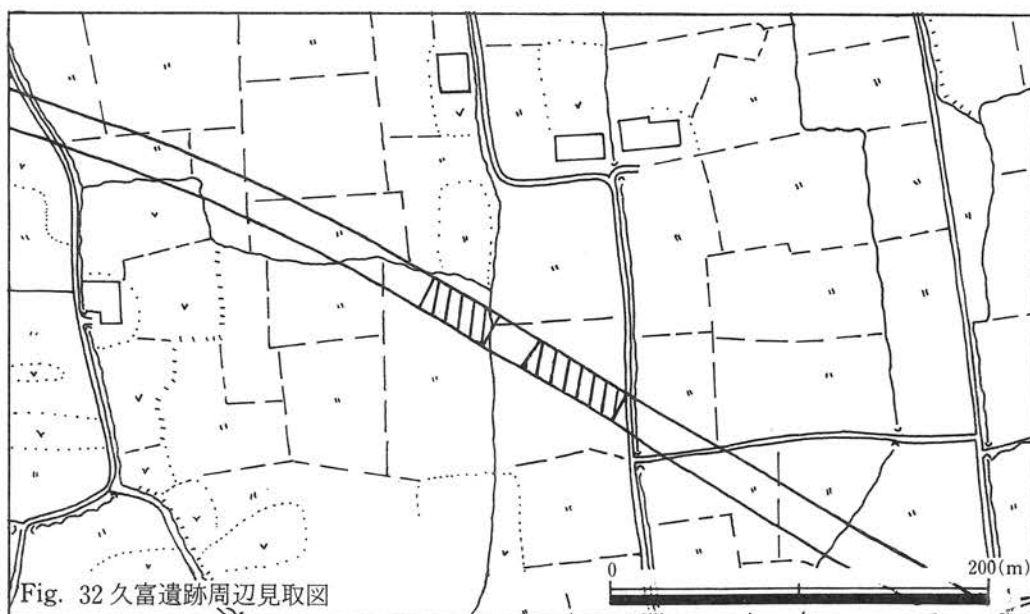
土墳墓は9基検出したが、SP005、9が成人用である。9基中2基が確実に石蓋を有していたが、あと2～3基程度の小児用のものに石蓋が存在していた可能性が大きい。遺物は全く検出できなかったが、甕棺との切合い関係から推定して中期以降の所産と考える。

祭祀遺構は3か所に確認したが、その検出位置は一連の甕棺墓をとおして見ると空白地帯にあり、検出された土器から見て中期頃の墓前祭の可能性もある。またII区のSK007・008土壌であるが前期末の甕棺が大破された状態で検出され、それらに混じって中期の土器も検出されている。これは既存の甕棺墓のある所に中期の土壌が造られたものと考えられるが、これらの遺構も高坏が検出されたので祭祀遺跡の可能性もある。

掘立柱建物跡は調査区でも最も高い位置で1棟検出された。22ページでもふれたが、柱穴と想定しているピット以外にもこの建物と関連が考えられるものがいくつか存在するが、そうなれば建物規模に比して庇が多すぎるくらいであったので今回は図中の規模にとどめた。その種の類例を今後の調査に期待したい。

以上、今回の調査で明らかになった事について若干の考察を加えながらまとめを行ったが、微高地及び平野部の調査はまだ始まったばかりなので、今後の類例の増加をまち、加筆修正をしたい。

II . 久 富 遺 跡



1. 遺跡の立地と環境

(1) 地理的環境

久富遺跡は佐賀市金立町大字千布字久富にあり、金立山から南方に広がる平野の比較的低い所に位置する。この久富の集落は江戸期の正保絵図に村名がみえ、東の境を巨勢川で徳永村や九郎名村と接し、南は市ノ江川を境に小黒村や東瀬村と接し、西は千布村、平尾村、北は金立村に接する。南部は巨勢川、黒川、市ノ江川の合流点で、市ノ江川の堤防が強固に造られているので降雨多量の際はこの集落が遊水地となって冠水を繰り返す。加えて久富遺跡が立地する付近は既存の県道小城北茂安線のすぐ北に位置するため後背湿地となり常に水位が高い。

(2) 歴史的環境

遺跡北西約300mに東千布遺跡があり、歴史的環境は大差ない。ただし、周辺には東千布遺跡に見るように隣接した確実な遺跡はなく、周辺全域が埋蔵文化財包蔵地とされている。遺跡周辺には実際、相当な広範囲で土器・石器の分布が見られるが、今回の道路部分の調査に基づいて推定すると、さほど広い範囲に遺跡が存在するとは考え難い。

2. 遺 構

遺跡は約200mの長さの道路予定地のうち水路をはさんで2か所に集中しており、東側をA区、西側をB区とした。

検出されたものとして、江戸期の性格不明の縦横に走る浅い溝、用排水路跡、土壌、掘立建物、弥生期の住居址、土壌、ピット群、古墳時代前期の溝等がある。ただし弥生期のそれは江戸時代の遺構により大破されており、住居址などに見るようにその片鱗しか検出できなかったものも多い。

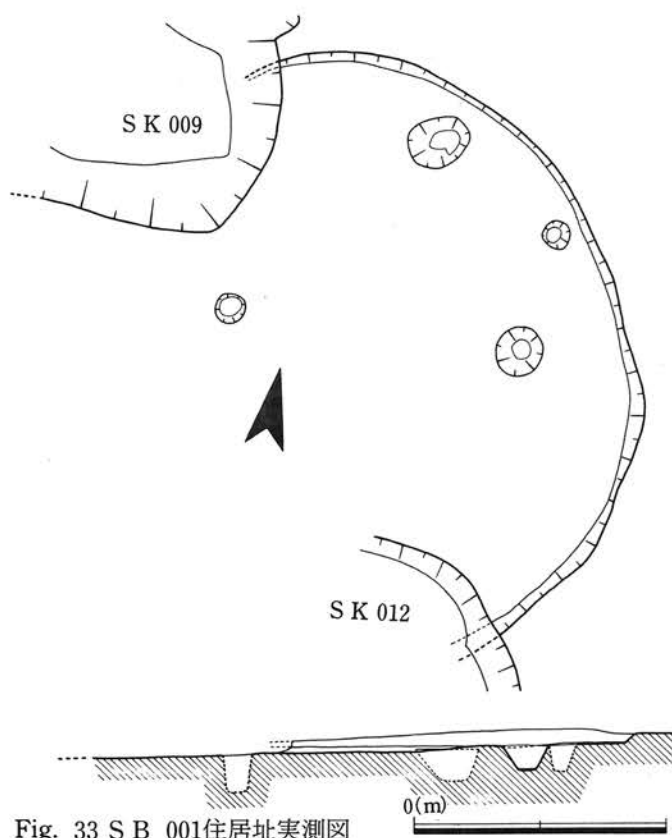


Fig. 33 S B 001住居址実測図

住居址とすることができる。この住居址に伴うと考えられるピットは径40cm程度のピット2基でその深さは床面から19cmを測る。炉址は検出できなかった。

埋土は黒褐色を呈する粘質に富むものである。遺物は埋土中から甕形土器、鉢形土器等が検出されたが、いずれも細片であった。

SB002住居址

A区中央に位置し、東南部約1.4mにはSB001住居址がある。この住居址もSB001と同様に後世の遺構によってその掘込みの大半を削平されており、残存状態は全体の35～40％程度である。この住居址の直径は残存しているプランから推定して4.8m程度で、残存している壁で最高値は8cmを測る。床面から柱穴とおぼしきピット3基と炉址と推定できる掘込みを検出した。炉址は2～3基の小ピットと切合い関係を有するが、基本的には長径70cm程度のものとする。

埋土は黒褐色粘質土で、遺物は甕形土器の破片を微量検出した。またこの住居址付近で20cm程度上層で大型磨製石斧を検出したが、後世の攪乱によりこの住居址のものが上方に掘り上げられた可能性がある。

SB004掘立柱建物跡

A区の西端中央に位置し、南北主軸は西傾1°を測る3×2間の建物である。桁行6.1m、梁行

(1) 住居址

A区東半部で3基検出した。いずれも後世の遺構によりその大半が破壊され、残存状況の良い壁面でも壁高10cmを超えない。住居址の平面形態は円形又は楕円形に近いものと推定され、時期的には弥生時代中期頃の所産であると考ええる。また、A区西半部で4棟の掘立柱建物跡を検出した。

SB001住居址

A区の東部に位置する。残存するのは東北部の掘込み部分で、全体の40％程度にあたと推定する。上面の平面形が正円に近いものとして推定すると直径4.8m程度の円形

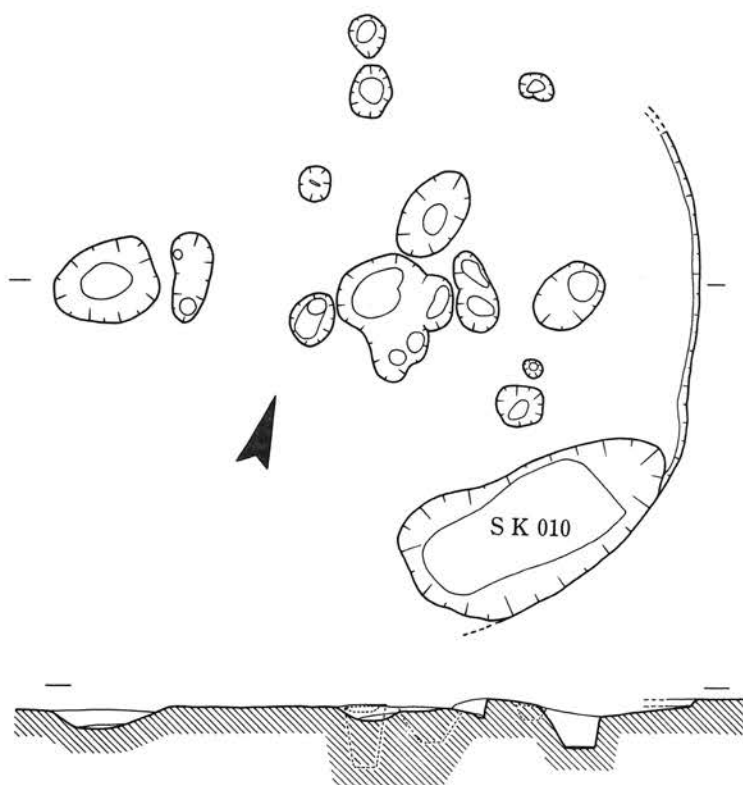


Fig. 34 S B 002住居址実測図

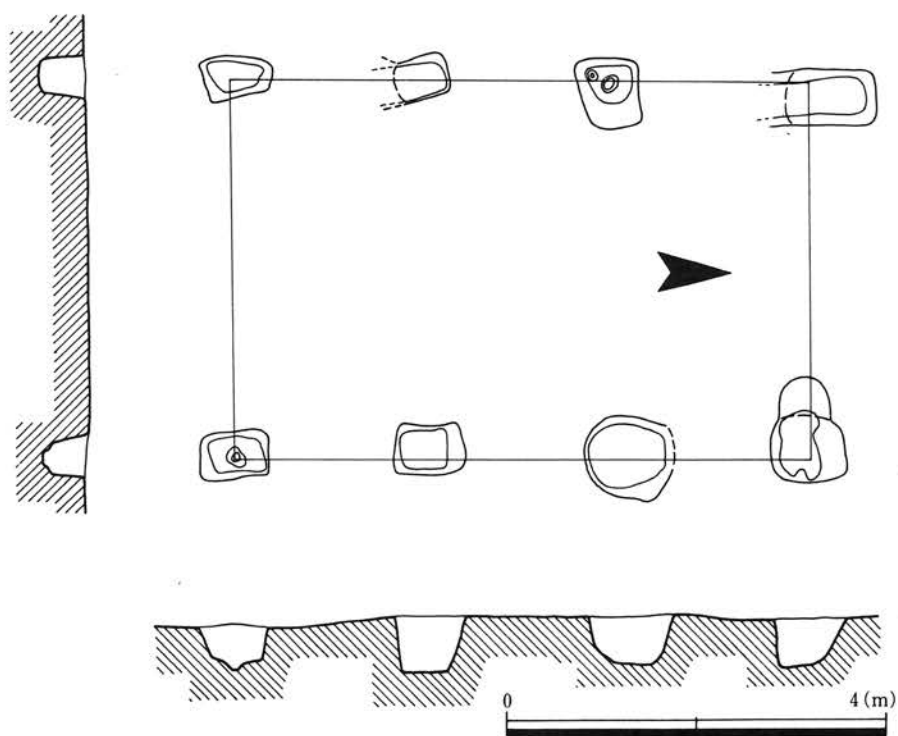


Fig. 35 S B 004堀立柱建物跡実測図

4 mを測る。柱間は桁行で、北から南へ $2.04 \cdot 2.04 \cdot 2.04\text{m}$ でほぼ均等にならぶ。妻柱は南北共に検出できなかった。柱穴の掘方は長辺 $0.7 \sim 0.8\text{m}$ 、短辺 $0.5 \sim 0.8\text{m}$ の隅丸長方形のものが多く、深さは $0.4 \sim 0.5\text{m}$ を測る。SB005掘立柱建物跡と主軸方向を同一にするが、一部の柱穴で切合い関係が認められ、当遺構が後出したものであると考える。

埋土は黄褐色粘土ブロックを多量に含み淡茶褐色のもので、遺物は近世の陶磁器細片が少量検出した。

SB005掘立柱建物跡

A区西端中央に位置する。SB005掘立柱建物と主軸をほぼ同じくするので同一の建物の可能性も想定したが桁行間隔が約1 mと短い。桁行 4.16m 、梁行 3.8m で、柱間は桁行で 2.8m を測る。妻柱は検出しなかった。基本的には 2×2 の建物であれば南北にやや長い。

埋土は黄褐色粘土ブロックを多含するもので、遺物は近世陶磁器細片の外、径 10cm 内外の木片を検出した。この建物の柱と考える。

SB006掘立柱建物跡

A区の北端にあり、総ての柱穴は検出していないが、その連続性から見て 1×3 間の建物跡と考えられる。南北主軸は西傾 1° で、桁行 2.87m 、梁行 1.84m を測る。柱間は桁行で西から東へ $0.9 \cdot 0.88 \cdot 1.11\text{m}$ と不均等である。柱穴は基本的には方形と楕円形のものであるが、他の遺構と切れ合って不整形のものがある。

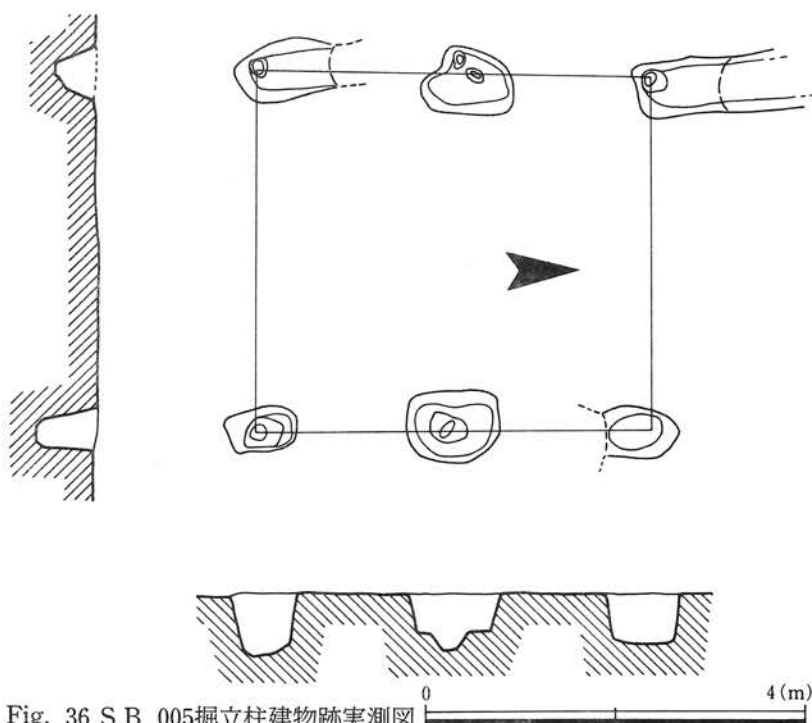


Fig. 36 S B 005掘立柱建物跡実測図

埋土は他の建物のもより粘土ブロックの少ない褐色粘質土で、遺物は近世陶磁器の細片の外、流れ込みと思われる弥生期の土器細片を微量に検出した。

(2) 土 壇

主としてA区東部に多く検出した。時期的には江戸期のものと弥生期のものがあり、その形状は楕円形、隅

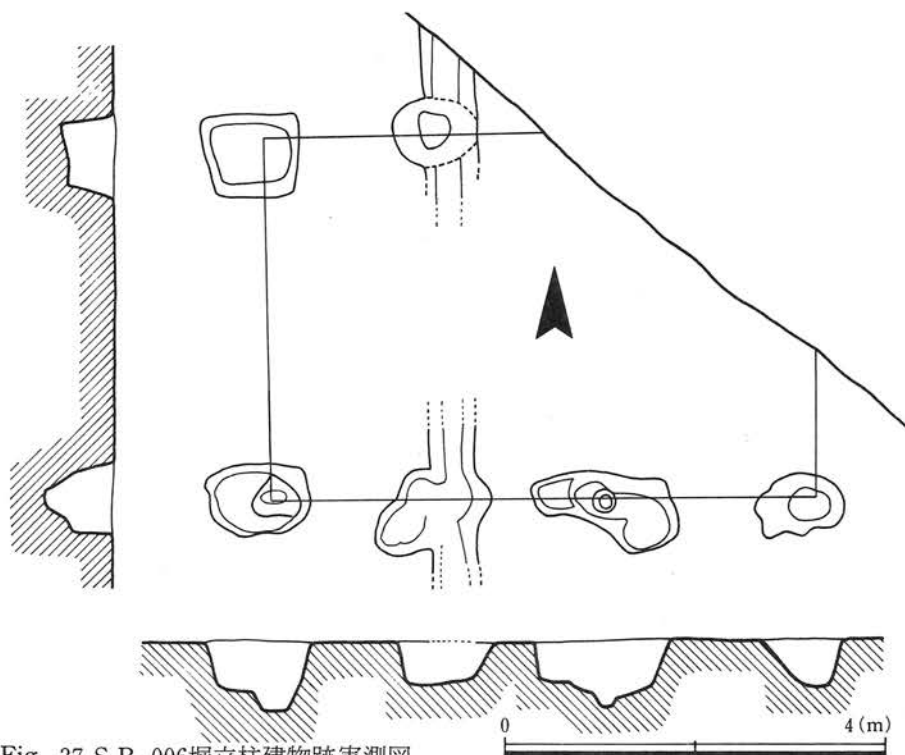


Fig. 37 S B 006堀立柱建物跡実測図

丸方形、不定形と様々である。ここでは残存状況の良好なものをいくつか抽出し、後述する。

SK003土壌

A区東北部に位置する。上面の平面形は不定形であるが、元来長辺1.4m、短辺0.8m程度の隅丸長方形を基調とするものとする。また、底面中央には不定形の長さ0.4m、幅0.2m、底面からの深さ0.06mの掘込みがある。最深部は掘込み上面から0.35mを測る。

埋土は黒褐色粘質土の中にわずかに砂粒を含むものである。遺物は埋土中より若干検出したが、いずれも細片で図化できないものであった。時期は弥生時代中頃～後半のものとする。

SK004土壌

A区東北部に位置する。北部の掘込みが調査区外で確認できていないが、長辺1.65m、短辺0.8m程度の隅丸長方形を基調とするものとする。東南部に0.6m程度突出した部分があるが、これは他の遺構と切り合っているものと判断する。底面はわずかに中央部が深くなっており、掘込み面からの最深部は0.22mを測る。

埋土は黒褐色で、底面に近づくにつれて砂粒を多く含む。遺物は弥生期の土器を検出したが、いずれも細片であった。

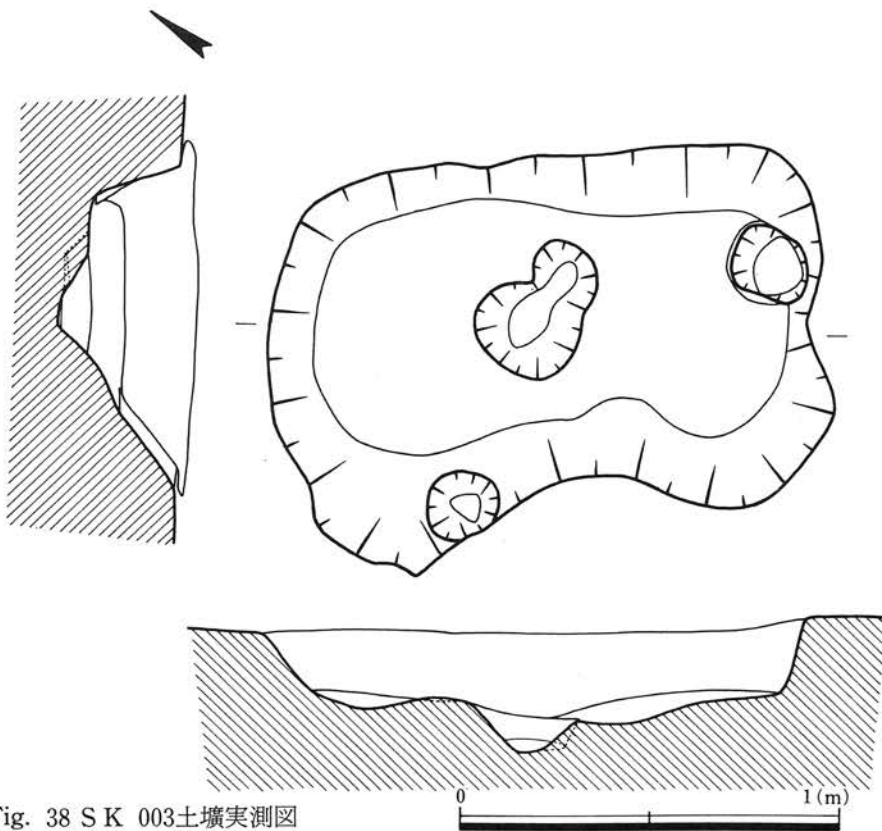


Fig. 38 S K 003土壤実測図

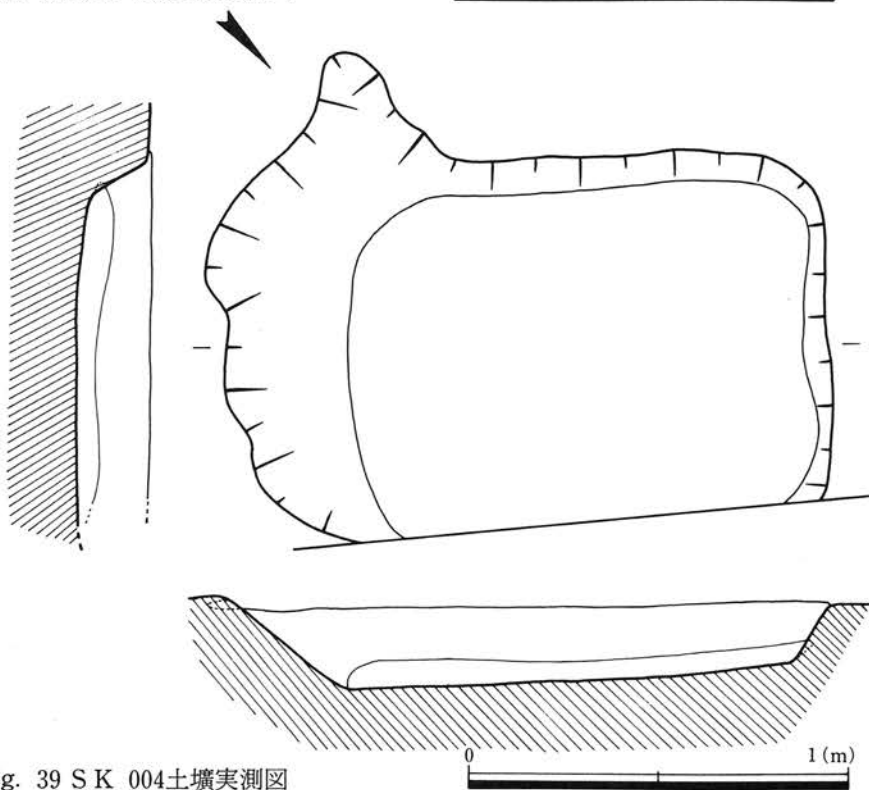


Fig. 39 S K 004土壤実測図

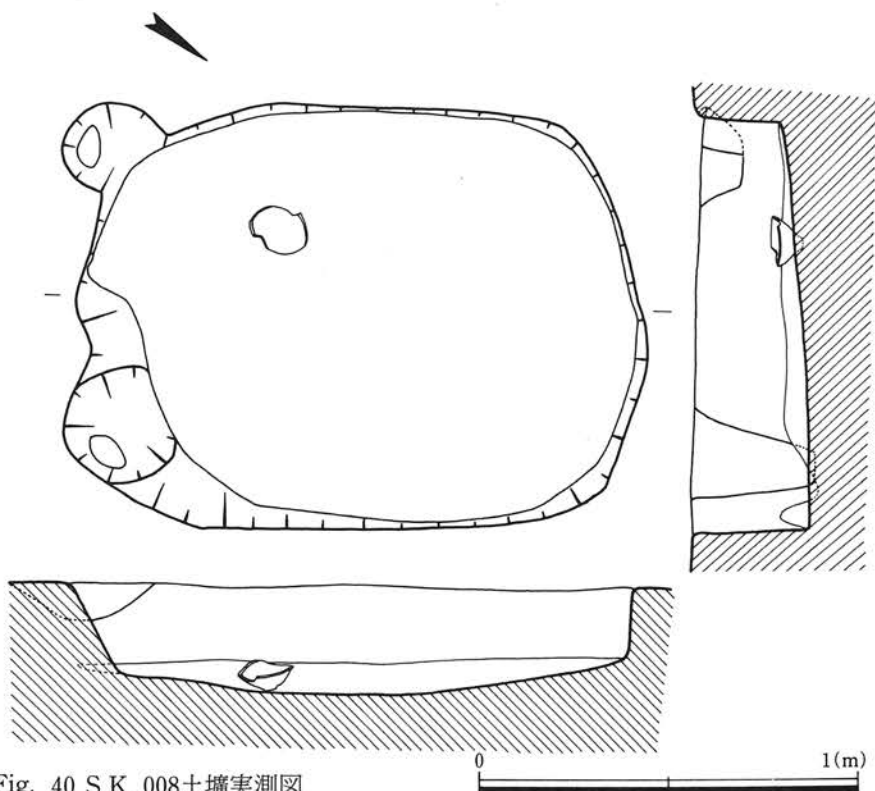


Fig. 40 S K 008土壌実測図

SK008土壌

A区東部中央に位置する。北東部と南東部隅が各々小ピットに切られている。上面の平面形は長辺1.48m、短辺1.24mの隅丸長方形を基調とするものであるが四辺とも多少カーブを描く。底面はゆるやかな起伏があり、最深部で掘込み上面から0.2m程度を測る。

埋土は黒褐色粘質土で砂粒を少量含む。遺物は遺構東南部から鉢形土器を検出したが、それ以外は細片であった。時期的には弥生時代後期のものとする。

SK009土壌

A区東部南寄りに位置する。上面の平面形は槌状を呈する。柄状部分と頭部と元来別の遺構の可能性もあるが、埋土の色調の差位は認められなかった。規模は東西7.8m、柄状部分最大幅1.32m、頭部最大幅2.32mを測る。最深部は東半部で0.48m、西半部で0.27mで、その差0.21mである。

埋土は黒褐色で非常に粘性がある。遺物は埋土全体から、主として江戸期の陶磁器類が検出された。SB001、SB002住居址を切っている。

その他の土壌

江戸期の土壌はA区東南部に集中し、この周辺は同じく江戸期の性格不明の浅い小溝や排水路と思われる溝によって上面を破壊され、その全容が明らかになったのは弥生期の遺構検出面

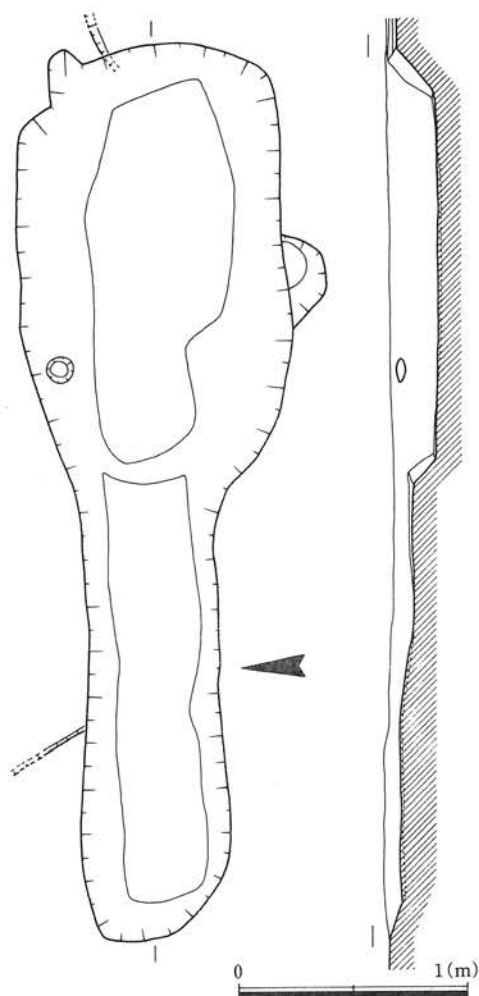


Fig. 41 S K 009土壌実測図

から東流する可能性もある。最深部は中央付近で0.6mを測る。

埋土は淡黒褐色で砂粒を多く含み、遺物はその中から全域にわたって出土している。時期は遺物から見て江戸後期と推定する。

SD006溝

B区の東南隅に位置する。検出全長約10m、最大幅2.6m、最深部0.6mを測る。南部西側掘込みが、わずかに南曲をみせている。北部はそのまま北上すると考えると農業用水路をはさんで東側にも検出できるはずであるが、遺構は全く検出できなかった。そうなれば、この溝は農業用水路付近が北端掘込みになるか、北折するかであるが、確認はできなかった。

埋土は黒褐色を呈し、下層部になるにつれて淡黒褐色になる。遺物は三地点に集中して土師

であった。また、明確ではないが土壌どうしの切合い関係も考えられ、東南隅には数基の土壌が存在した可能性がある。

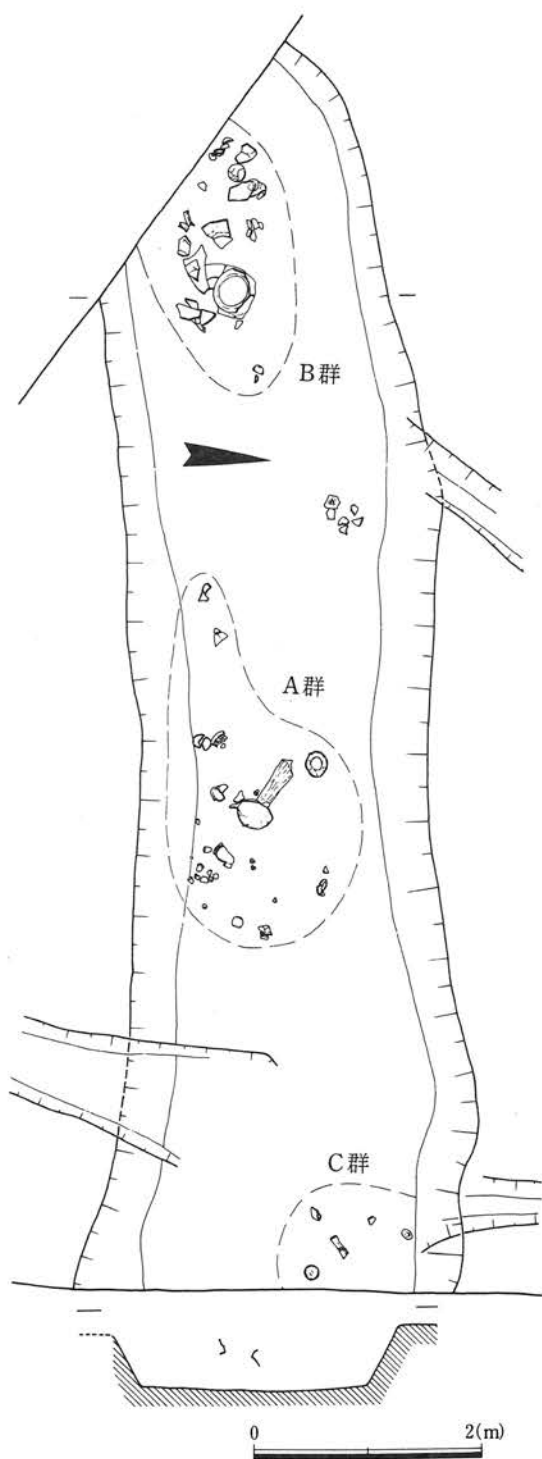
埋土は黒色の泥土と表現すべき粘質土であり、遺物はその中から江戸期陶磁器の日常什器が多数検出された。また、弥生期の遺構を破壊した際に流れ込んだと思われる土器片も少量出土している。さらに特筆すべきは東南隅のものから墓石の可能性のある石材が出土し、その周辺から銭が検出されたことから、江戸期の墓地関係であった可能性もある。

(3) 溝

A区東半部に集中して縦横に走る浅い溝があるが、そのほとんどが幅0.5m内外、深さ0.05～0.1m程度を計り、埋土は淡褐色砂粒まじりで、遺物は江戸期の陶磁器類を微量に検出した。それ以外に排水や祭祀という目的が比較的窺えるものを抽出し後述する。

SD001溝

A区の東端に位置し南北に走る。検出全長は11.6m。西側掘込み面から溝中央付近までしか、既存の農道があるために調査できなかった。南端は明確に検出できたが、排水路という性格と地形とを合わせて考えればここ



器が検出され、東から検出順にC群・A群・B群と呼称する。A群では手捏土器群・壺形土器・鉢形土器・碗形土器・甕形土器、B群では壺形土器・甕形土器・高坏、C群では高坏・壺形土器・碗形土器等を検出した。手捏土器、高坏等から推定して祭祀が行われたことに疑いはないと思うが、それぞれの土器群の器種構成は興味深い。また、木片が出土したが、加工痕はない。

Fig. 42 S D 006溝実測図

3. 遺 物

久富遺跡は弥生時代中頃から古墳時代前期・江戸時代後期と断続的に営まれた遺跡で、検出された遺物は弥生時代のものとして甕形土器、鉢形土器、石鏃、石斧、石包丁、古墳時代のものとして土師器坏、高坏、壺形土器、甕形土器、鉢形土器、江戸期のものとして磁器碗、小皿、土師質小皿、壺、土鈴等多岐にわたる。

以上の遺物のうち残存状態が比較的良好のものをいくつか抽出し後述する。

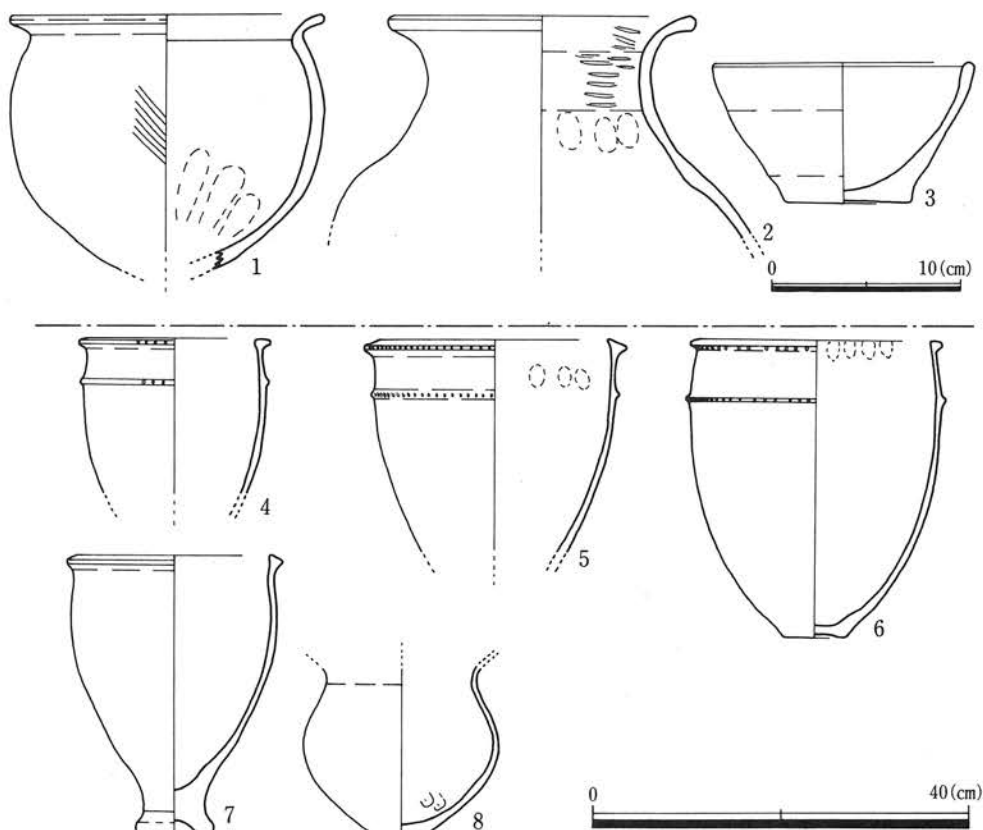


Fig. 43 久富遺跡出土土器実測図 (A区)

Tab. 8 久富遺跡出土土器観察表

(復元値)

器種 番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
鉢 1	(1) 口径16.5(復) (2) 器高 — (3) 底径 —	「く」の字状口縁を有し、全体的に丸みを帯びる。	外面ナデとハケによる調整、内面底部付近に力強いナデ上げ。	1 / 3 残
壺 2	(1) 15.8 (2) — (3) —	器壁は厚く、口縁部は外反する。	外面を主としてナデとヨコナデ、内面にヘラミガキ、ハケ、ヨコナデ調整。	1 / 3 残
鉢 3	(1) 13.6 (2) 7.5 (3) 6.6	平底であるが、わずかに上げ底気味である。 体部は内傾気味に立ち上がり、口縁端部は丸みを帯びる。	器面全体の磨滅が進んでいる。	2 / 3 残

器種 番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
甕 4	(1) 17.2(匁) (2) — (3) —	口縁部上面は平坦に近くなってきている。 口縁下部に断面三角形の突帯をめぐらす。 突帯部と口縁部に刺突文有り。	器体下半部は内外面共にナデ上げ、上半部は主としてナデとヨコナデ。	1 / 3 残
甕 5	(1) 22.8(匁) (2) — (3) —	T字形口縁に近いが、内面への突出が弱い。 口縁部は平坦で外傾する。 口縁端部外面と口縁下部に刺突文有り。	主としてナデとヨコナデ。内面に一部指頭圧痕有り。外面にスス付着。	1 / 2 残
甕 6	(1) 24.5(匁) (2) 31.6 (3) 6.8(匁)	全体的に器体は丸みを帯びる。底部は上げ底。	器体下半部は主としてナデ上げ、上半部はヨコナデ。口縁部内面に指頭圧痕有り。	2 / 5 残
甕 7	(1) 22.5(匁) (2) 30.0 (3) 8.0	底部は厚く、きわだった上げ底である。 口縁部は断面三角形を呈し外傾する。	内外面とも磨滅が著しい。	1 / 2 残
壺 8	(1) — (2) — (3) 5.2(匁)	平底で最大径を胴部中央に有する。	外面にヘラミガキ、ナデ、内面の一部にハケ目有り。	1 / 4 残

SD006溝から大量の土師器が出土したが、それらは大別して三群に分かれ、その分類を表末に記す。なお土埴土器はすべてA群である。

Tab. 9 SD006溝出土土師器観察表

(匁)推定値 (匁)復元値

器種 番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	群
坏 1	(1)口径10.8 (2)器高 3.1 (3)底径 —	一群の中で最も法量が小さい。器壁は厚く、口唇部は直立する。 底部は平底様を呈する。	主としてナデ、ヨコナデを施している。 外面口縁部にハケ目、底部付近に指頭圧痕有り。	B群
坏 2	(1) 11.3 (2) 3.5 (3) —	全体的に丸味を帯びていて、器壁の厚さも均等に近い。 口縁部は内弯気味に立ち上がる。	主としてナデ、ヨコナデによる。	埴土上層
坏 3	(1) 13.0 (2) 3.7 (3) —	口径の割には器壁が薄く、口唇部は先鋭化する。 口縁部はわずかに内弯しながら立ち上がる。	ナデ、ヨコナデのあと内外面の一部にハケ目調整がある。	B群
坏 4	(1) 13.4 (2) 4.5 (3) —	形態は3と似かよっているが、器壁がやや厚くなる。	主としてナデ、ヨコナデによる。	A群
坏 5	(1) 15.0 (2) 4.0(匁) (3) —	一群の中で口径が最も大きい。 底部付近は剝離している。	内外面の一部にハケ目有り。	C群
坏 6	(1) 12.8(匁) (2) 5.1(匁) (3) —	器壁の厚さが、全体的に均等で丸味を帯びる。口縁端部は直立傾向にある。	ていねいな、ナデ、ヨコナデによる。	A群
高坏 7	(1) — (2) — (3) 12.2	脚部から裾部への変換点は比較的角度をもち、端部は先鋭化する。 径0.7cm程度の穿口を有する。	脚部外面の一部に、ヘラミガキ様の痕跡をとどめるが、全体的に磨滅が進んでいる。	B群
高坏 8	(1) — (2) — (3) 8.2	法量から見て小型の台付鉢の脚部か。 脚裾部は内弯気味に下がり、端部に至って再度内傾する。	脚外面に縦方向のハケ目、内面の一部に細かい横方向のハケ目有り。	B群

器種 番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	群
高坏 9	(1) — (2) — (3) 16.5	台付鉢の脚部か。大きく広く脚部は先端に至って極端に細くなる。	外面上方と内面にハケ目有り、端部は内外面共にヨコナデ。	A群
甕 10	(1) 16.4(匳) (2) — (3) —	「く」の字状口縁をもつ。口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部に至って再度内傾し、外面に稜を有する。	口縁部内外面共にヨコナデ、体部外面の一部に細かいハケ目有り、体部内面はヘラケズリ。	B群
甕 11	(1) 18.0(匳) (2) — (3) —	口縁部は大きく開き内弯気味に立ち上がる。端部内面のつまみ上げはあまり見られない。	口縁部内外面共にヨコナデ、体部内面はヘラケズリ、外面の一部にハケ目と波状紋を有する。	B群
壺 12	(1) 17.4(匳) (2) — (3) —	短く直立気味に立ち上がる頸部が認められるので壺形土器とする。口縁部は11よりもやや角度をもち内弯気味に立ち上がる。口縁端部につまみ上げがある。	頸部外面に強いヨコナデ、内面頸部下に細いハケ目、胴部は主としてヘラケズリであるが、一部にハケ目を有する。	B群
甕 13	(1) 13.8 (2) — (3) —	口縁部はゆるやかに内弯しながら立ち上がり、端部は丸みを帯びる。	頸部外面に強いヨコナデ、胴部外面にハケによる波状紋有り。内面はヘラケズリ。	A群
甕 14	(1) 16.8 (2) — (3) —	口縁部は大きく開き内弯気味に立ち上がり、端部は丸味を帯びる。体部は球状を呈し、最大径は胴部中央にある。	口縁部は主として、内外面共にヨコナデ。胴部外面上半部に浅い沈線を有し、それ以下にハケ目が多く残存している。内面はヘラケズリの後、一部にハケ目痕を有するが不明瞭である。	A群
壺 15	(1) 13.6 (2) — (3) —	口縁部は外反し、端部は先鋭化する。頸部から肩部にかけて外側に大きく張る。	口縁部内外面共にヨコナデ。頸部は外面が強いヨコナデ、内面がナデ上げ。体部は内面ヘラケズリ、外面はナデとハケ目調整。	B群
甕 16	(1) 21.2 (2) 36.6 (3) —	口縁部は大きく外反しながら立ち上がる。胴部に最大径を有し、底部は丸底、器体は卵形を呈する。器壁は厚く全体的に均一に近い。	口縁部上半部は内外面共にヨコナデ、下半部外面に荒い縦方向のハケ目、内面に横方向のハケ目を有する。体部外面は主として縦方向のハケ目、内面はヘラケズリによる。	A群
壺 17	(1) 38.4 (2) 61.2(匳) (3) —	複合口縁の壺形土器で一群では最大の法量を有する。口縁部は外方向に直行し、端部は丸味をもつ。頸部は2cm程度と短いが直立する。体部は丸底と推定される底部から内弯気味に立ち上がり、胴部中央付近で一時直立する。	口縁部から頸部にかけてヨコナデ。体部外面全体にハケ目、内面は上半部と底部付近にハケ目がある。	B群
鉢 18	(1) 18.4(匳) (2) 5.5 (3) —	大きく開く口縁部をもつ浅鉢である。器壁が全体的に厚く均一であるが、口縁端部は先鋭化する。	口縁部内外共にヨコナデ。体部は主としてナデによる。	A群
鉢 19	(1) 17.3(匳) (2) 8.5 (3) —	頸部のくびれが大きく、口縁部はわずかに内弯しながら立ち上がる。器壁は口縁端部に近づくにつれて薄くなる。	同 上	C群

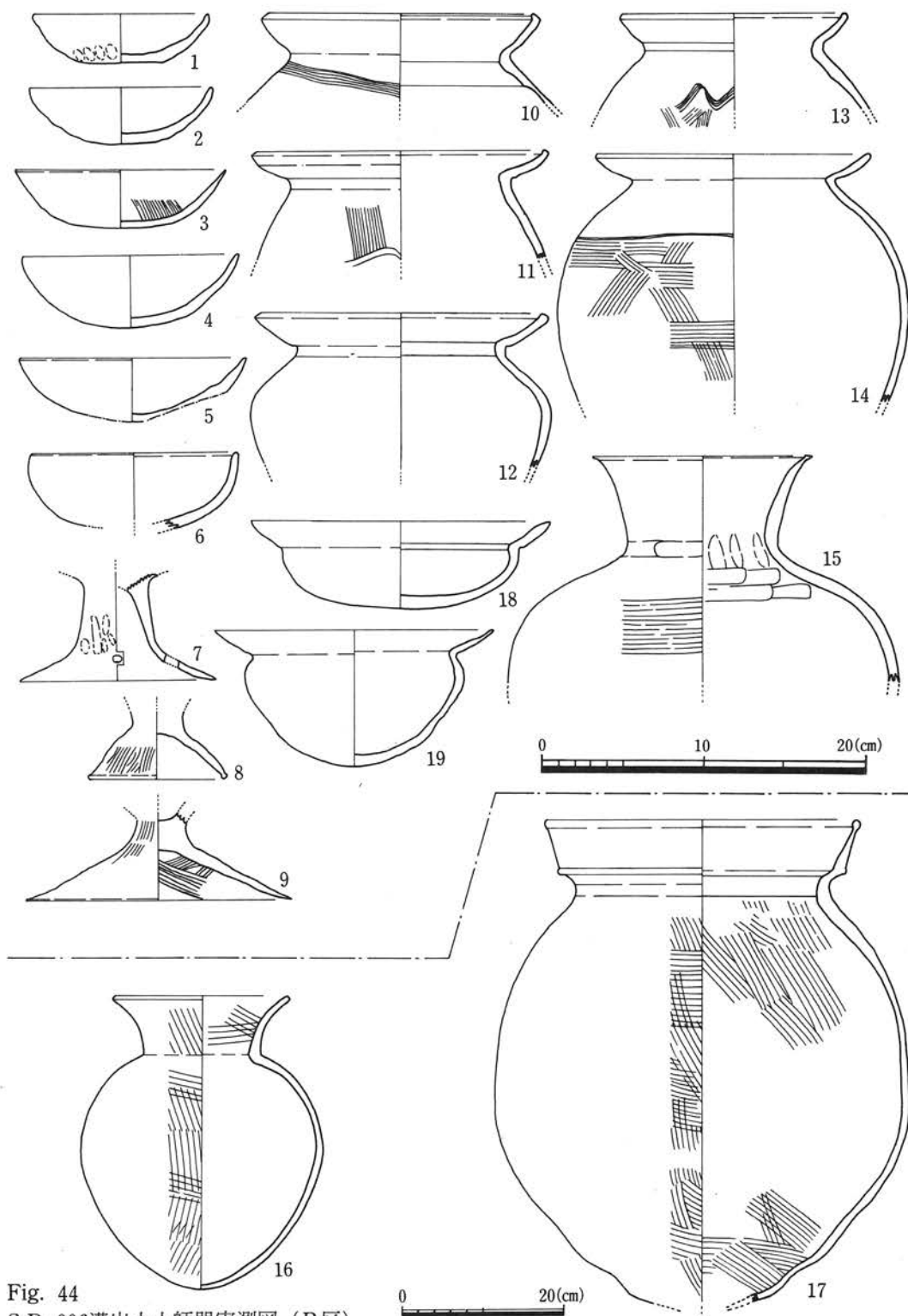


Fig. 44
S D 006溝出土土師器実測図 (B区)

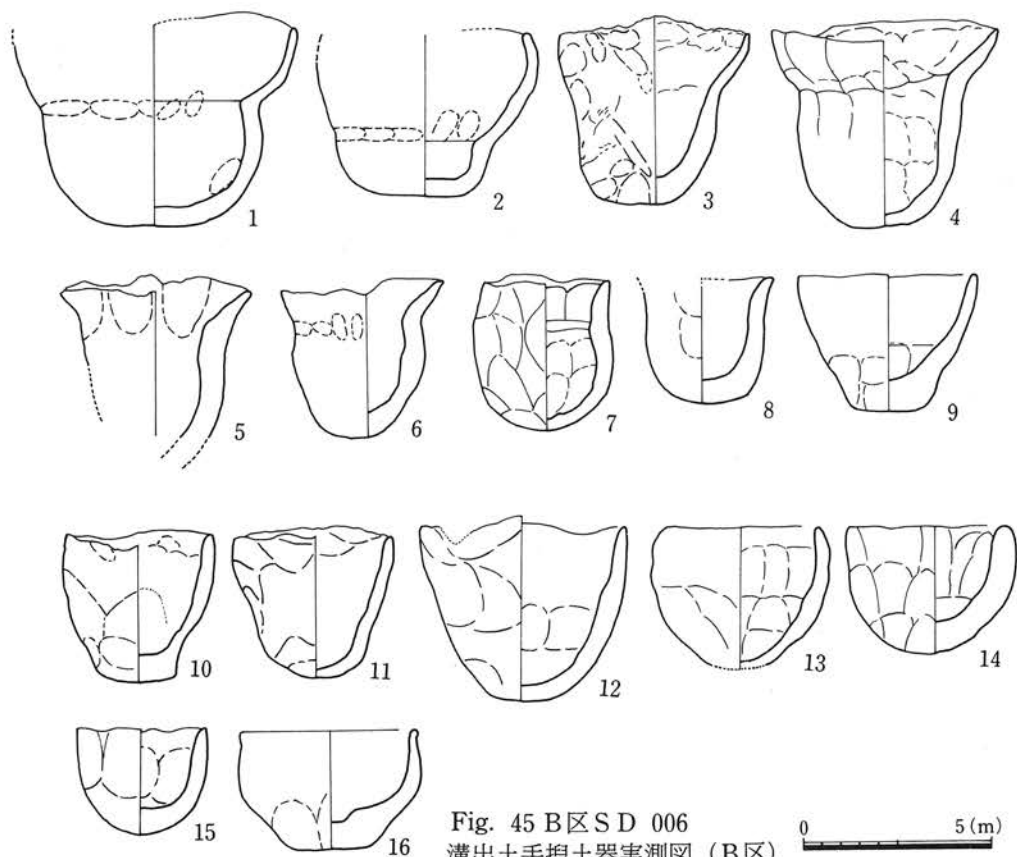


Fig. 45 B区SD 006
溝出土手捏土器実測図 (B区)

0 5 (cm)

Tab. 10 手捏土器観察表

匱推定値 匱復元値

番号	法量 (cm)	形態の特徴	整形	備考
1	口径7.5匱 器高5.5匱	一群の中でも最も大型である。口縁下部で大きくくびれ、内面に稜を有する。	主としてナデ、押圧による。口縁部内面にハケ目有り。	口縁部の一部を欠く。
2	5.6匱 5.0	1よりもくびれの位置が底部に近くなり、口縁部は大きく内傾。	ナデ、押圧、内面の一部に細かいハケ目有り。	〃
3	5.0 5.0	口縁下部のくびれ部から外傾するが、口唇部は直立に近い立ち上がりを見せる。	口唇部はナデよりも押圧が多く、そのため不均衡を呈する。	完形
4	6.0 5.0	器体は厚く、底部より直立気味に立ち上がり、頸に至って外傾する。	内面頸部付近は強い押圧によって、明瞭な稜を形成する。	
5	5.1 —	4と同形態であるが、頸部外面のくびれが少ない。	主として、ナデ、押圧による。	2/3残
6	4.3 3.8	4、5と同形態であるが規模が小さい。口縁頸部は外反する。	内面胴部付近に一部ハケ目を有する。	完形
7	3.3 3.9	わずかにくびれを有し、口縁部は直立する。内外面共にいねいなナデ、押圧が施されている。	〃	
8	3.6匱 3.3	胴部上半にわずかにくびれがあり、口縁部はそこからゆるやかに外反する。	主としてナデによる。	2/3残
9	4.7 3.6	平底様の底部を有し、体部はゆるやかに内傾しながら立ち上がる。	上半部をナデ、下半部を押圧。	完形

番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	整 形	備 考
10	3.8 3.7	平底様の底部を有し、9よりも体部は角度をもって立ち上がる。	主としてナデ、押圧によるが、内面の一部に細かいハケ目が施されている。	完 形
11	4.1 3.8	胴下半部がわずかにくびれ、器体はそこから直線的に立ち上がる。	主として押圧、ナデによる。	〃
12	5.4 4.9	体部にくびれを有しないこの種のものとしては最も法量が大きい。体部は内傾気味に立ち上がる。	幅広い押圧、ナデによる。	ほぼ完形
13	4.0 3.8(側)	ゆるやかな立ち上がりを見せ口縁部は内傾する。	内部に押圧気味の力強いナデ。	〃
14	4.2 3.4	器壁は厚く内傾しながら立ち上がる。	ナデ、押圧による。	完 形
15	3.4 2.9	この種のもので最も法量が小さい。口縁部は直立する。	〃	〃
16	4.7 3.2	平底で胴部上半部より直立する。口縁端部は丸味を帯びる。	外面の一部に細かいハケ目有り。	〃

Tab. 11 久富遺跡出土陶磁器観察表

復元値

器種 番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	文様、施釉、色調等	出土遺構
皿 1	(1)口径13.3 (2)器高 4.0 (3)底径 7.1(側)	底部から内湾しながらのびる。高台径が大きく口径の半分以上。	内面干し綱草花文。外面、草花文。	SD017
皿 2	(1) 13.1 (2) 3.5 (3) 8.3	器体は厚手で内湾気味に立ち上がる。高台径が大きい。	内面、見込みに草花文。色調は白濁し透明感にかける。	表土下層
皿 3	(1) 13.4(側) (2) 2.45 (3) 8.6	底部から内湾しながら大きく開く。高台径はこの種では最大。	見込みに花卉文、体部外面に草花文。	SD001
碗 4	(1) 10.4 (2) 5.8 (3) 4.3	器体は底部から口縁部にかけて均等の厚さをもつ。高台部がやや薄手。	外面に山水文、釉は灰白色。底部外面に文字有り。	SD001
碗 5	(1) — (2) — (3) 3.35	器体は厚手。高台径が小さい。	体部外面に文様があるが不明。	SD001
碗 6	(1) 6.5(側) (2) 4.1 (3) 3.0	器体は内湾気味に立ち上がり、口縁部に至って外反する。	内面は灰白色の釉であるが、外面の色調は暗茶褐色。	SD001
碗 7	(1) 8.6 (2) 4.7 (3) 3.7	厚手の器体をもちわずかに内湾しながら立ち上がる。口縁部外面に沈線有り。	釉は灰白色。	SK027
皿 8	(1) 17.0 (2) 4.2 (3) 5.1	複合口縁状を呈する。高台は高く削り出している。陶器。	内面体部に波状文。	SD001
碗 9	(1) 12.0 (2) 3.85 (3) 4.1	大きく開く口縁部をもち、高台は高く削り出している。陶器。	釉は淡灰白色。見込みに重ね焼きの痕跡有り。	SD017
碗 10	(1) 11.4 (2) 5.25 (3) 4.4	高台部は高く削り出している。陶器。	内面に細かい貫入がはいる。内面淡黄色。外面、淡黄白色。	SD001
碗 11	(1) 11.8 (2) 4.8 (3) 4.6	全体的に薄手のもので口縁部はわずかに内湾する。陶器。	全体に細かい貫入がある。	表土下層
碗 12	(1) 12.5 (2) 5.3 (3) 5.3	高台部が厚く造り出されている。外面の体部と高台付との間に沈線がある。陶器。	灰黒色。重ね焼き痕有り。	表土下層

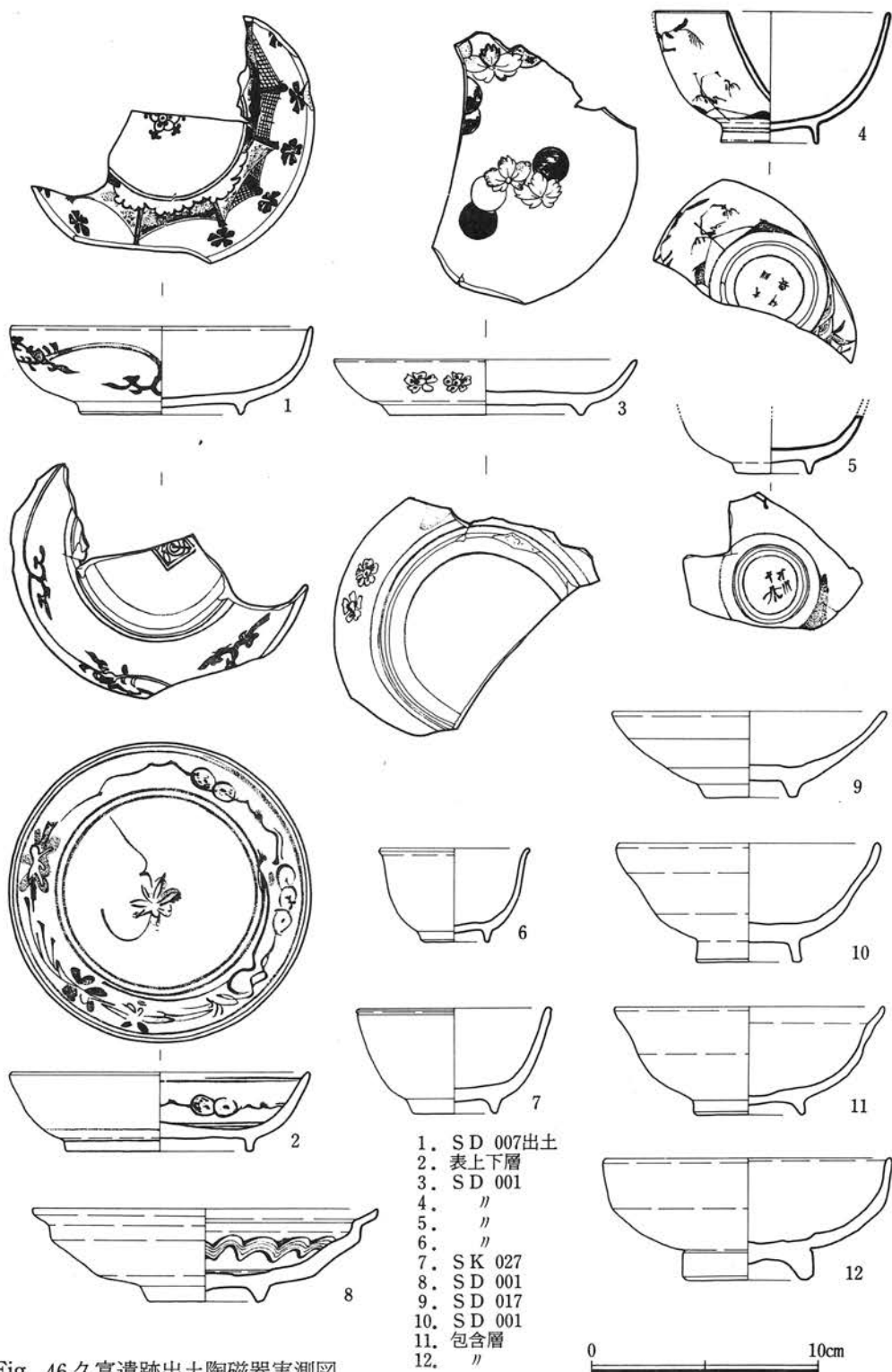


Fig. 46 久富遺跡出土陶磁器実測図

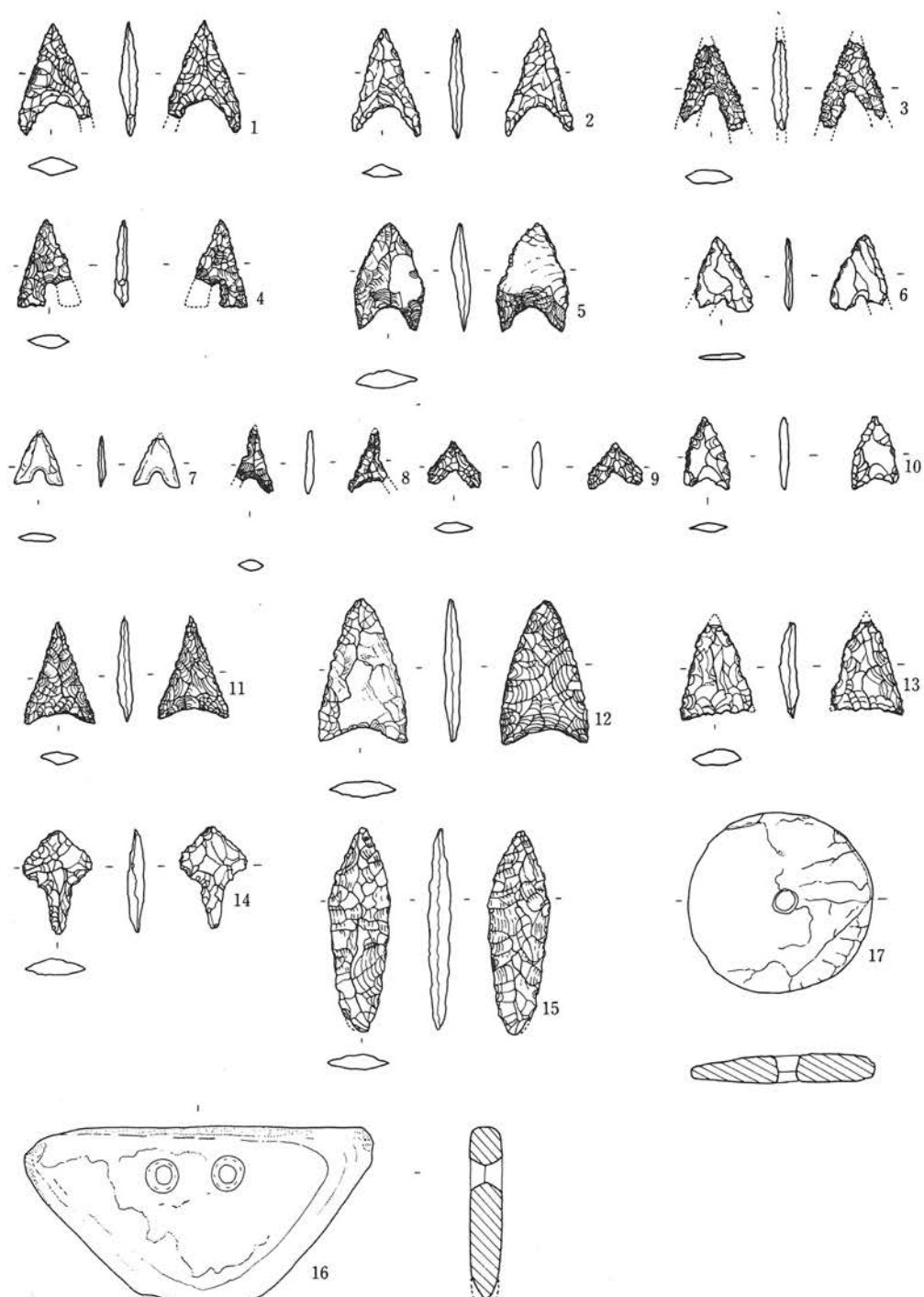


Fig. 47 久富遺跡出土石器実測図

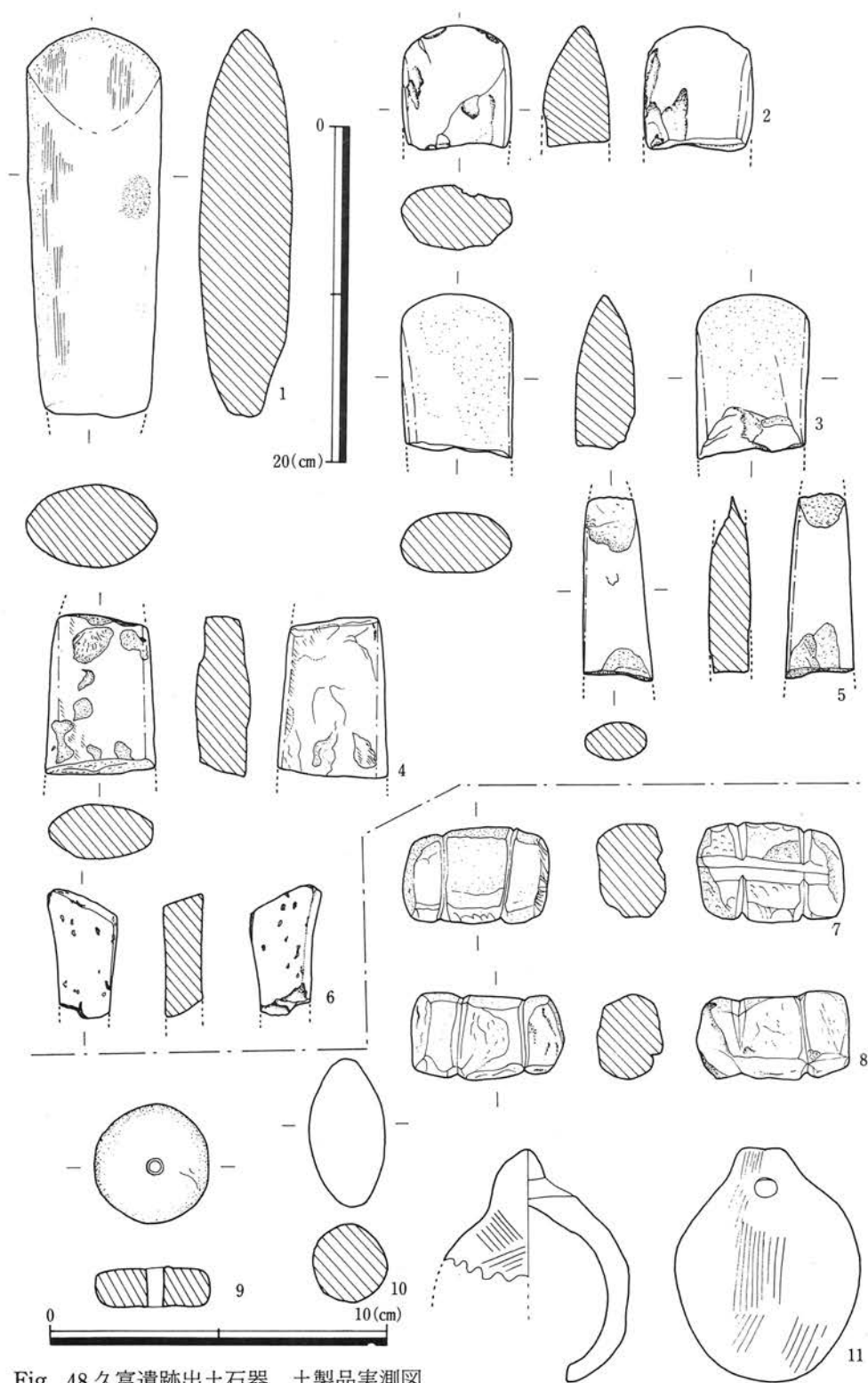


Fig. 48 久富遺跡出土石器。土製品実測図

Tab. 12 久富遺跡出土石器観察表

(単位：cm)

番号	器 種	出土地点	石 質	長 さ	最大幅	厚 さ	備 考
1	石 鍬	包 含 層	黒 よ う 石	3.2	2.0	0.5	
2	〃	〃	〃	3.2	1.9	0.5	完 形
3	〃	SD 003 (B区)	〃	2.4	2.0	0.4	
4	〃	包 含 層	〃	2.5	1.8	0.35	
5	〃	〃	〃	3.1	1.8	0.5	完 形
6	〃	〃	〃	2.1	1.5	0.15	
7	〃	〃	サヌカイト	1.5	1.4	0.25	
8	〃	SD 006	黒 よ う 石	1.85	1.0	0.3	
9	〃	包 含 層	〃	1.35	1.5	0.25	完 形
10	〃	〃	大 理 石 質	2.1	1.2	0.3	〃
11	〃	〃	〃	3.0	2.1	0.35	〃
12	〃	〃	サヌカイト	4.15	2.5	0.45	〃
13	〃	〃	〃	2.75	2.1	0.45	
14	〃	〃	〃	3.0	2.0	0.5	完 形
15	〃	〃	サヌカイト	5.8	1.7	0.65	〃
16	石 包 丁	〃	砂 岩 質	10.1	5.3	0.95	
17	紡 錘 車	〃	〃	長径 5.3	短径 5.15	0.8	完 形

Tab. 13 久富遺跡出土、石器、土製品観察表

(単位：cm)

番号	器 種	出土地点	材 質	長 さ	最大幅	厚 さ	備 考
1	蛤刃石斧	表土下層		23.2	4.0	2.5	ほぼ完形
2	〃	SD 017		7.2	6.2	3.8	
3	〃	包 含 層		9.2	6.4	3.8	
4	〃	SK 011		9.6	6.2	3.4	
5		包 含 層	粘 板 岩 質	10.8	4.0	2.3	
6	砥 石	SD 001	砂 岩	7.0	4.0	2.1	
7	石 錘	表土下層	緑 泥 片 岩	4.3	2.9	2.0	完 形
8	〃	〃	〃	4.55	2.5	1.85	〃
9	紡 錘 車	表土下層	—	(径) 3.6	—	1.15	〃
10	投 弾	包 含 層	—	4.5	—	2.15	〃
11	土 鈴	SK 001	—	6.95	5.55	—	

4. ま と め

久富遺跡は背振山塊から南に広がる平野にあって、周辺の比高からすると低湿地という言葉が当てはまる。しかしながら昭和58年秋は幸いにも好天がつづき、排水作業におわれたのは数日しかなかった。

調査の結果、竪穴住居址3軒、掘立柱建物跡3軒、土壌、ピット、溝を多数検出した。

住居址については、当地が現在低湿地であることからその存在は当初考えていなかったが、調査終了間際に粘土質の地山に掘り込んだプランが確認された。先に述べたとおり、当遺跡は江戸期の遺構に大破させられておりこの住居址もその例に違わず、片鱗を確認できたにすぎない。また、住居址内のピットも当時のものか後世のものか明確に確認できなかったが、その位置関係、形状から見て5本柱の形態と推定する。

土壌については弥生期のものと江戸期のものに大別できるが、弥生期のSK001土壌に関しては土壌墓の可能性もある。江戸期のそれはおしなべて廃棄用の穴であり、その中から大量の陶磁器類を検出した。

溝については、古墳時代の祭祀用のもの、江戸期の用排水のものの、縦横に走り浅くて性格不明のものに別れる。

古墳時代の溝については、その埋土から、甕形土器、鉢形土器、坏、高坏、手捏など多数検出されたが、市内に於いて墳墓以外の溝中祭祀は今回が初見である。埋葬遺構以外で土師器を検出した遺跡として現在知られているものとして^{註1}西原遺跡(住居址)^{註2}琵琶原遺跡(住居址)程度しかない。

また、この溝の形状であるが、西端が南折するか、その付近で終了するかの様相を呈するが確認できなかった。東端に関しては、それ以东では全く確認できなかったことから既存の南北水路付近で終了していた可能性が大きい。

江戸期の用排水路と考えられるSD001溝については堰の施設と想定される木杭を検出した。この溝は水路としての用をなさなくなっただけからは一時期に集中して不用品が投棄されたものと考ええる。

掘立柱建物跡は3棟を確認した。当初、上代のものと考えていたが、掘り進んで行くうちに弥生式土器片に混じって江戸期の陶磁器数片が検出されたので、時期的には江戸末期頃のものとする。柱穴は基本的には長方形の掘方で、深さ0.4～0.5m程度を測る。3棟の新旧関係であるが、SB004とSB005柱穴の切合いが認められ、SB004が新しい。しかしSB006は柱穴の切合い関係がなく新旧関係は不明であるが、建物主軸の延長が直行することやその位置関係から考えて、どちらかの建物と同時性をもつものとする。

これらの掘立柱建物の性格であるが、人家にしては少々規模が小さく、A区東南部で検出した墓石から考えて祠、仏閣的なものではないだろうか。また、屋根は、調査区から一点の瓦も

検出されていないことから、藁葺か茅葺であったと考える。

このような江戸期の遺構はあまり発見されておらず、市内では^{註3}長尾遺跡しかない。ただし、この遺跡のものは近世もしくは少しさかのぼるものとされており、当遺跡のそれは、江戸期後半のものとすれば市内での初見である。市外においては諸富町大字大堂字加与丁の^{註4}野村遺跡で12軒の規模をもつ掘立柱建物跡が発見されているが、その詳細は近々報告される予定である。

近世の建物はすべからず礎石を伴うものと考えがちであるが、実際はその多くに掘立柱が存在していた可能性は大きい。今後の調査で少しずつ明らかにされるであろうが、近世の遺跡遺構に関しても上代のそれと同じ配慮をもって調査にあたりたい。

註1 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書」(2) 佐賀県教育委員会

註2 「佐賀市埋蔵文化財調査報告書」(第13集) 佐賀市教育委員会

註3 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書」(2) 佐賀県教育委員会

註4 諸富町教育委員会、種浦氏御教示による。

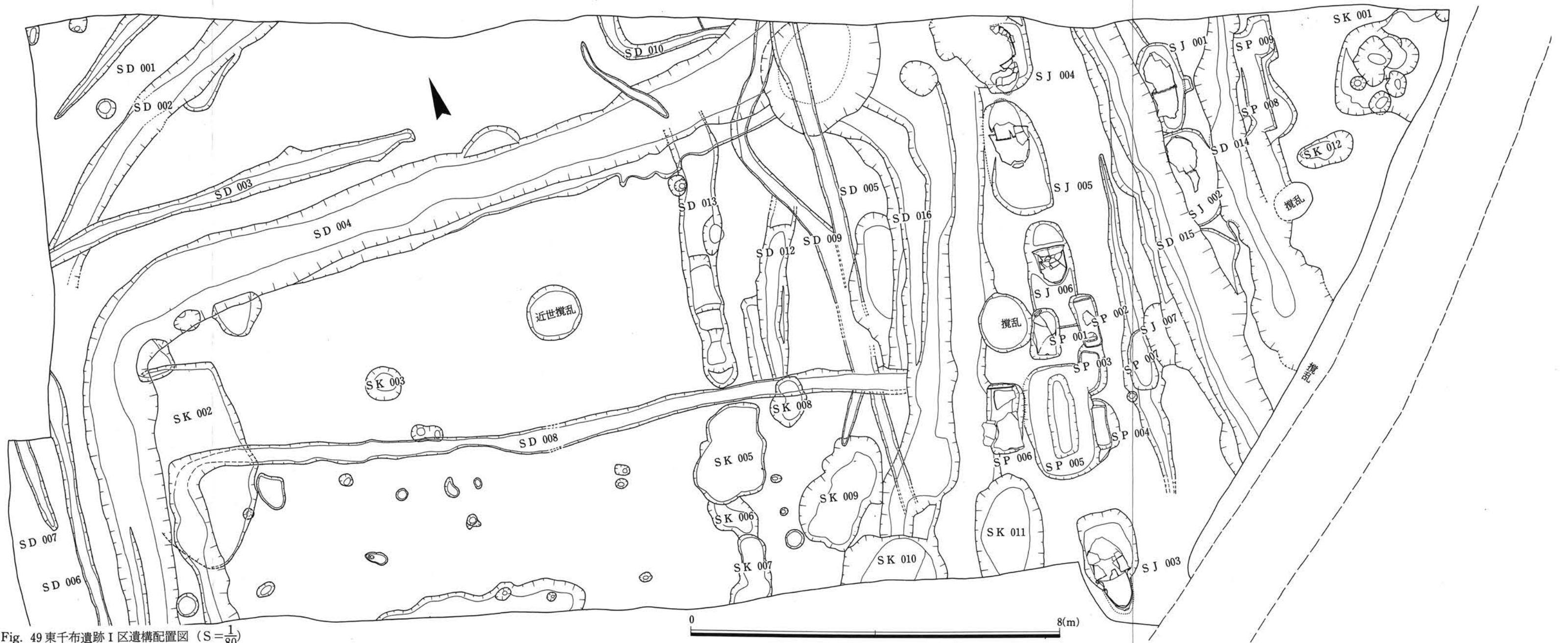


Fig. 49 東千布遺跡 I 区遺構配置図 (S=1/80)

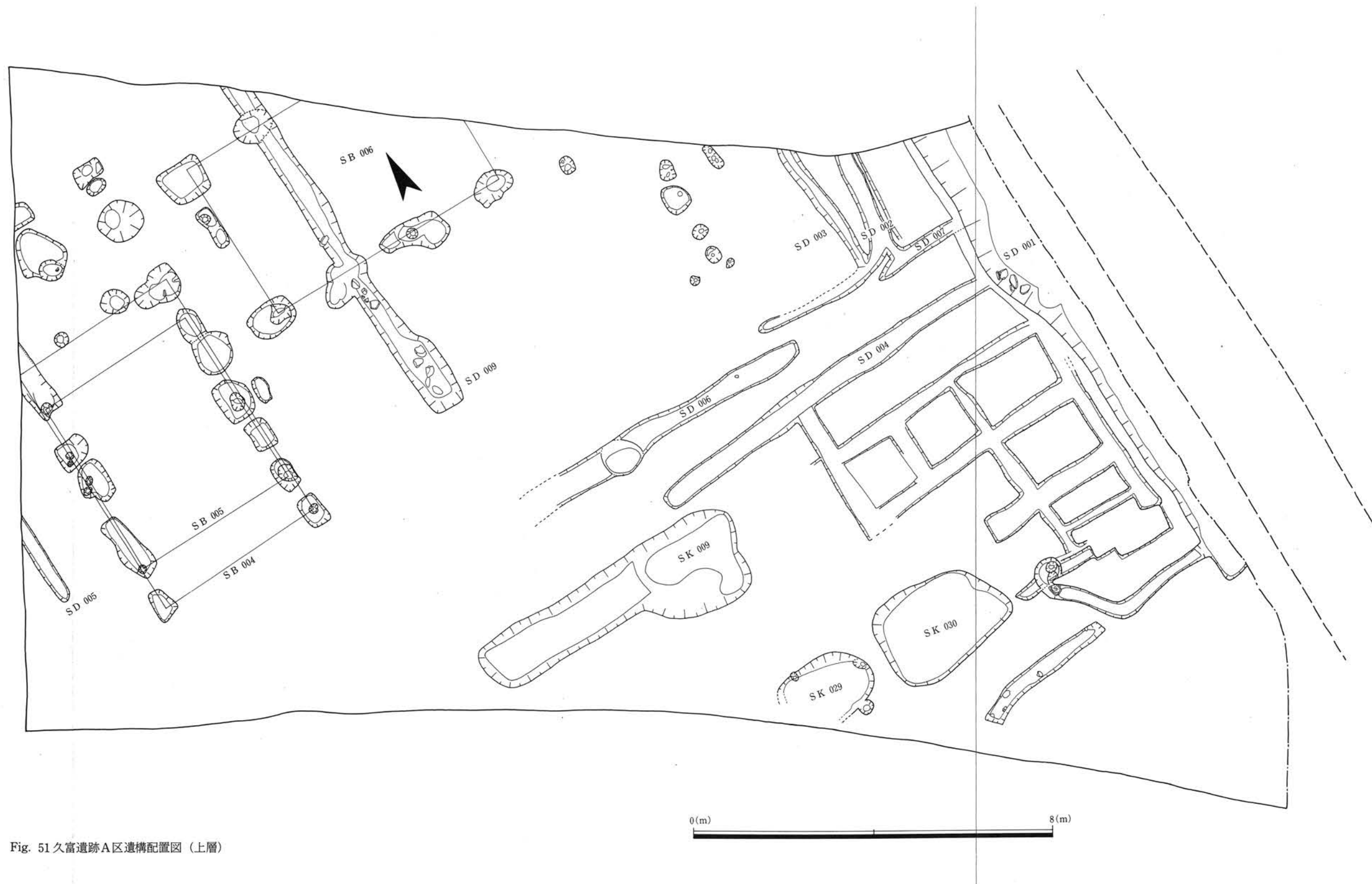


Fig. 51 久富遺跡A区遺構配置図（上層）

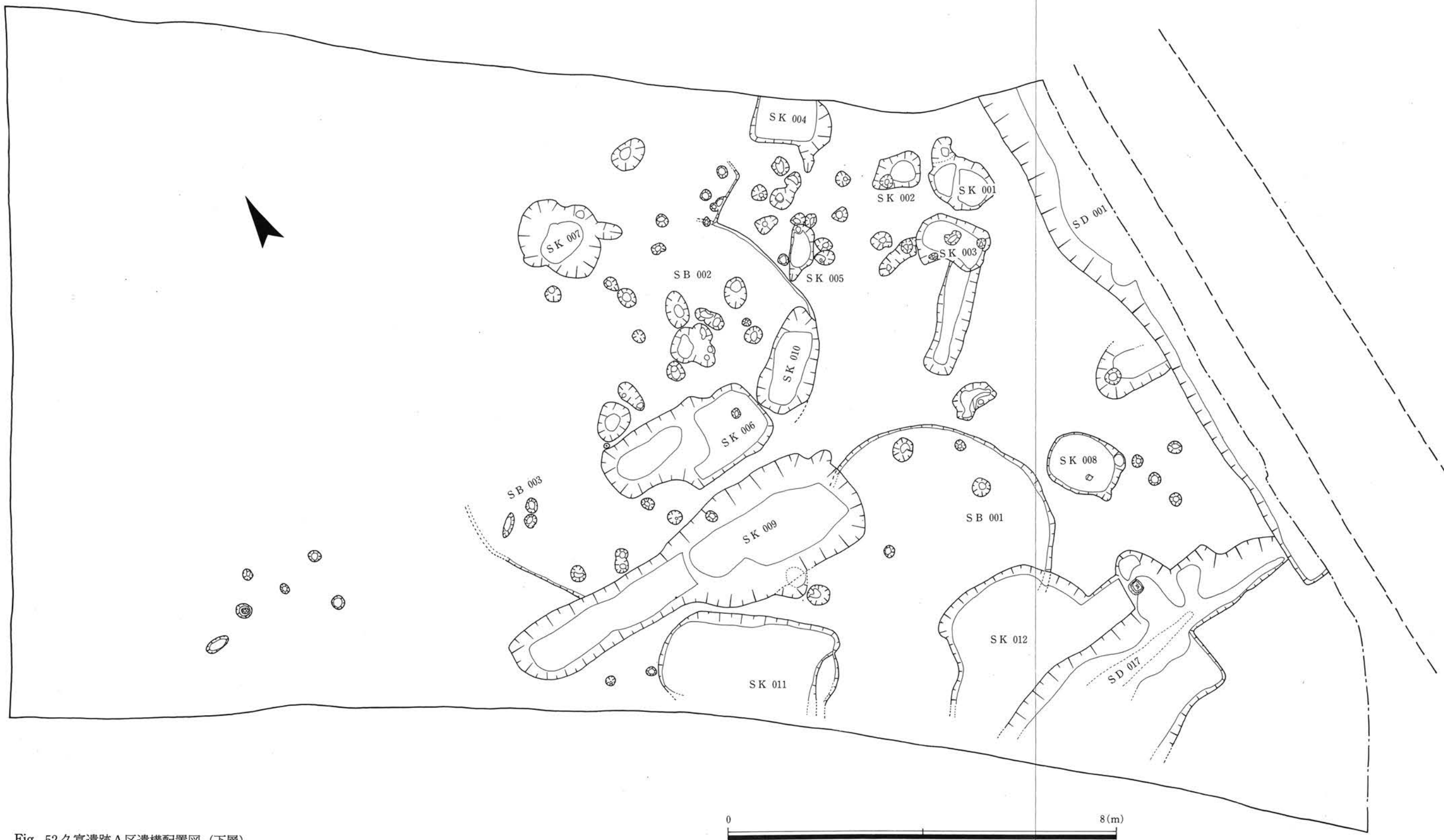
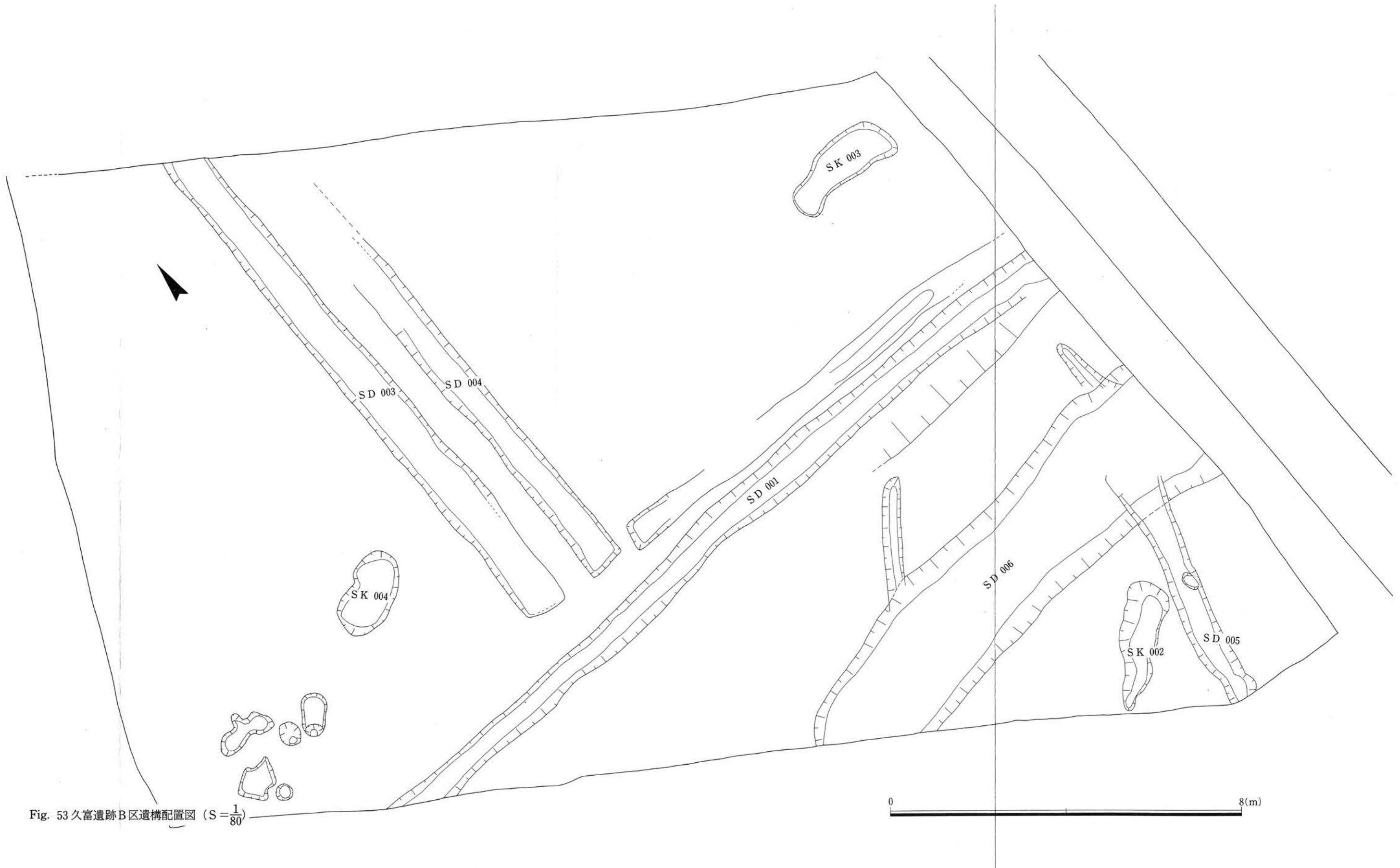


Fig. 52 久富遺跡A区遺構配置図（下層）

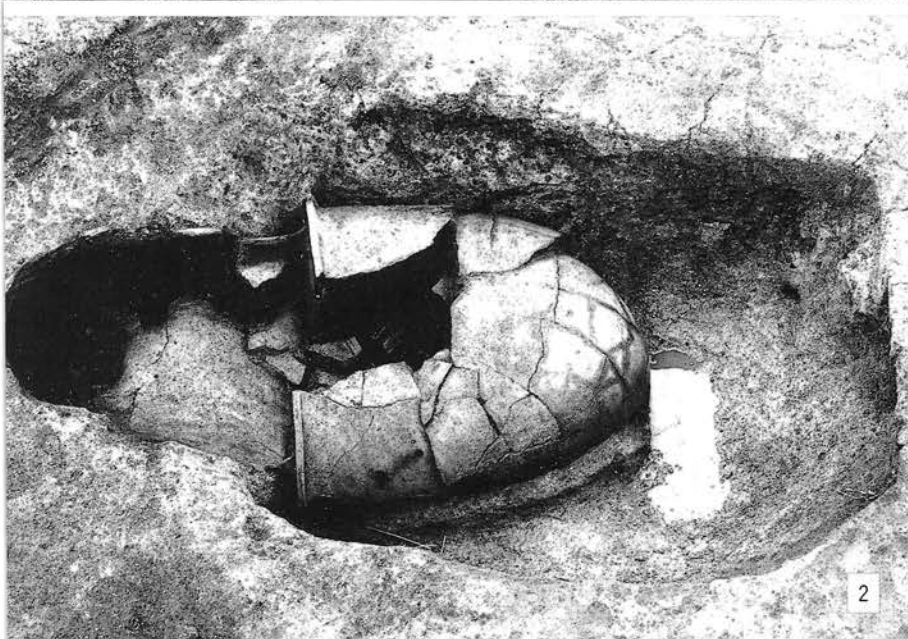


版 図

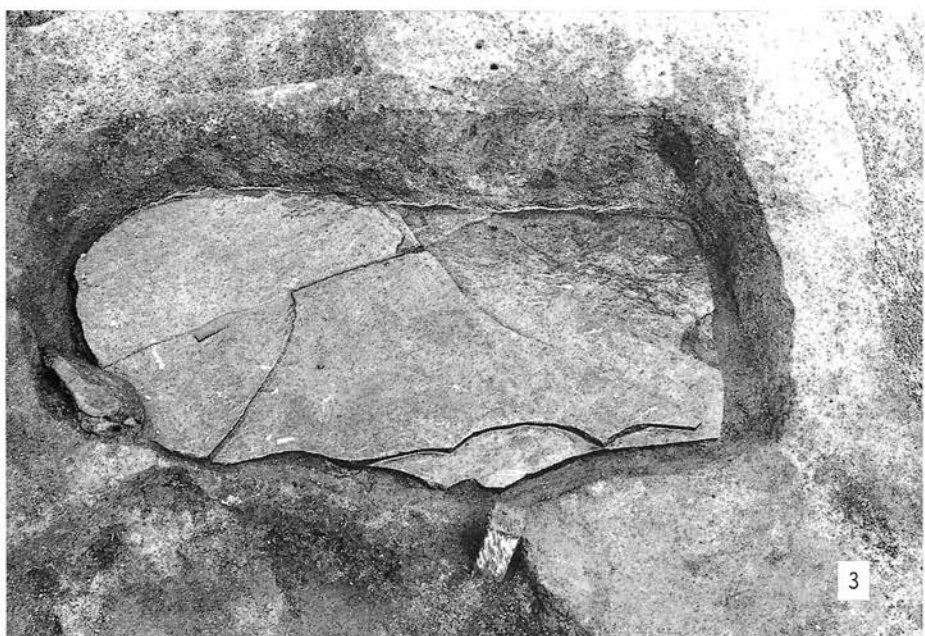


東千布遺跡Ⅰ区

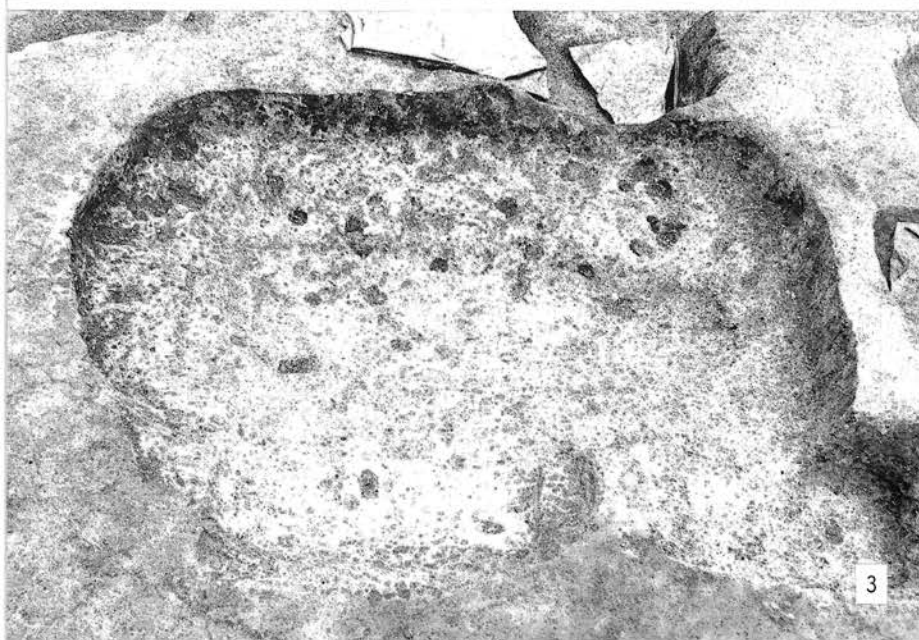
1. Ⅰ区調査前
2. " 東部
3. " 西部



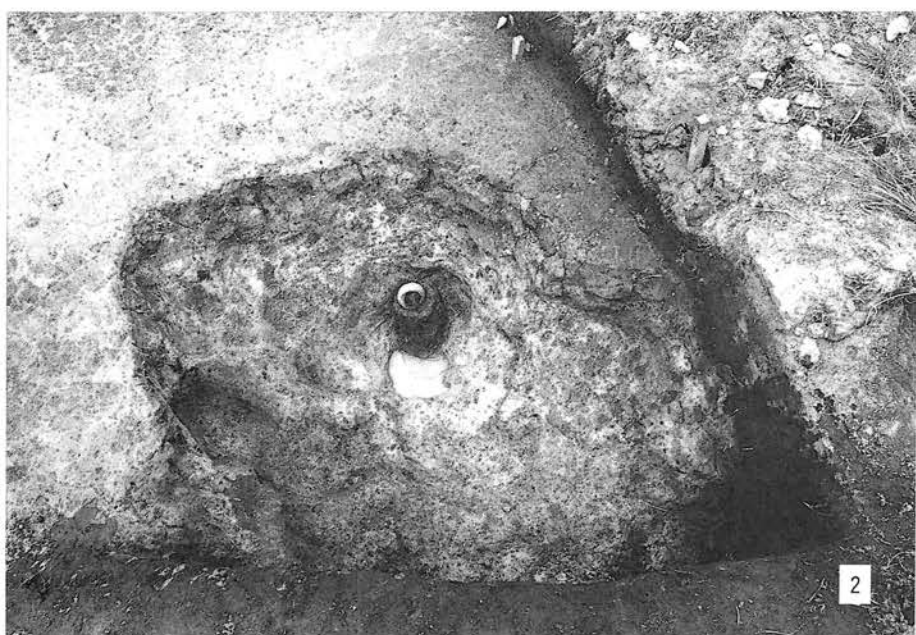
1. S J001、002甕棺墓
2. S J003甕棺墓
3. S J004、005甕棺墓



1. S J006甕棺墓
2. S J007甕棺墓
3. SP001土壙墓



1. SP002土墳墓
2. SP003土墳墓
3. SP005土墳墓



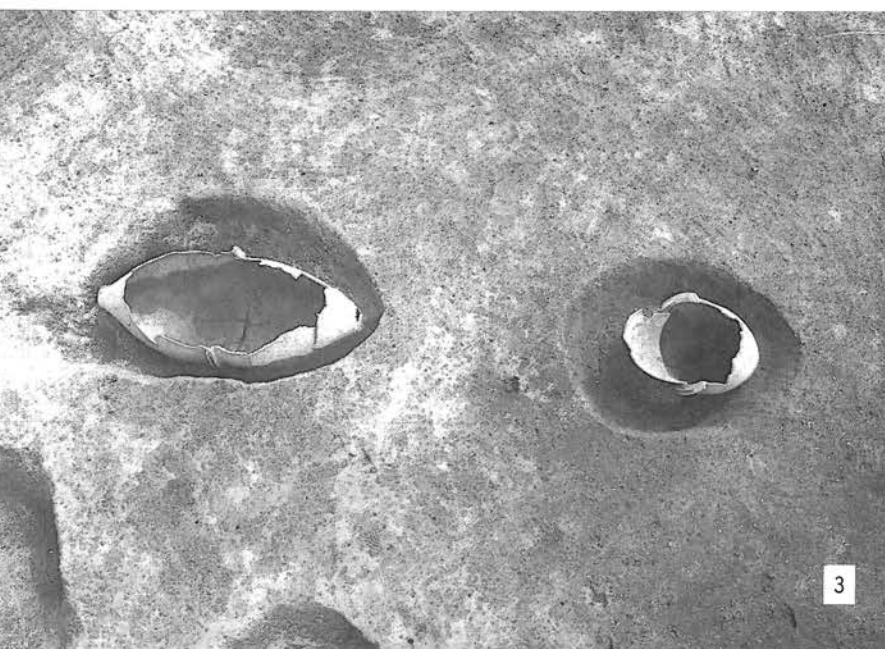
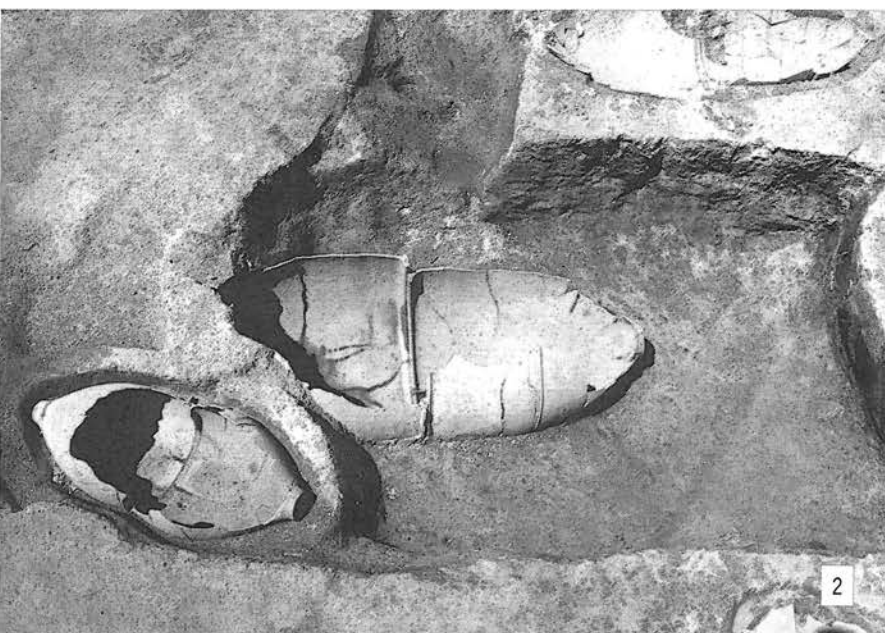
1. 土墳墓群(北から)
2. SK001土墳
3. SK009土墳周辺



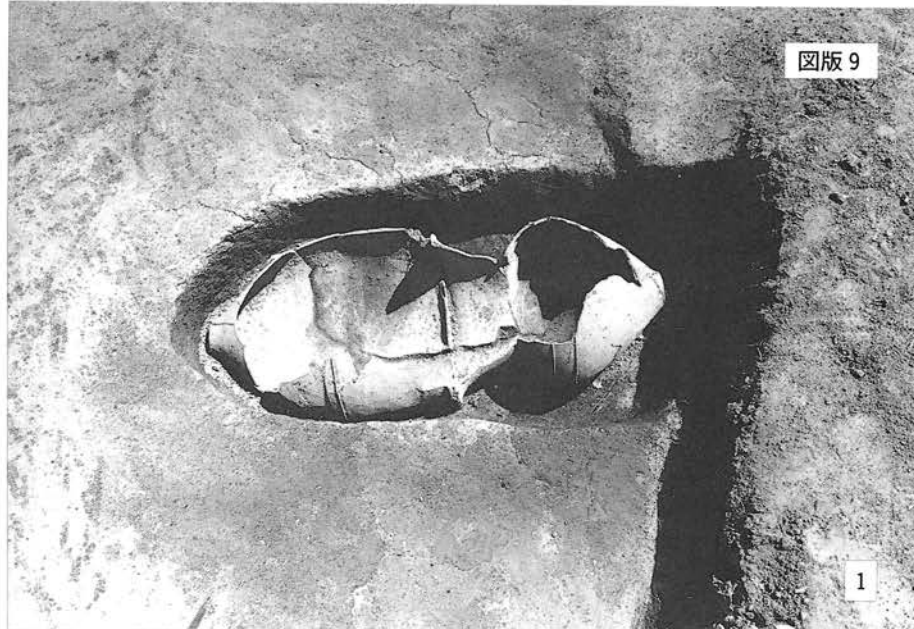
東千布遺跡Ⅱ区
 1. 調査前
 2. 調査区西部
 3. 調査区東南部



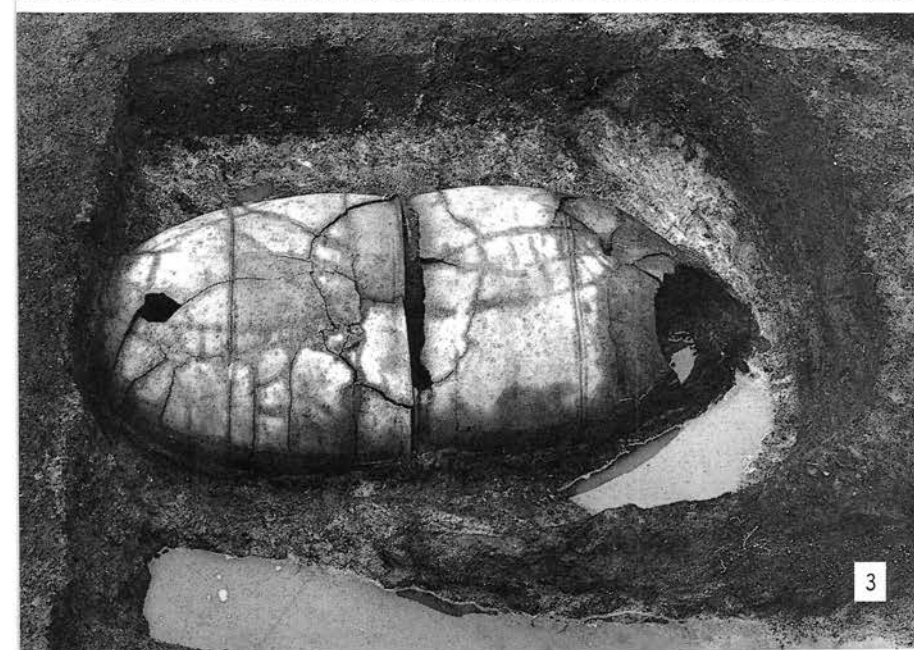
1. 調査区西南部
2. 調査区東部
3. 調査区全景(甕
棺取上げ後)



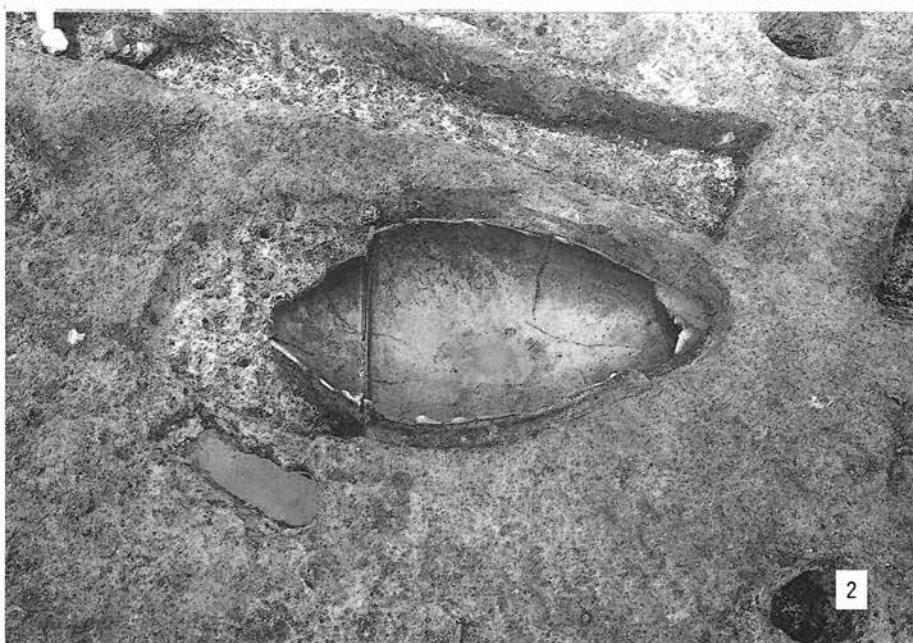
1. SJ001 甕棺墓
2. SJ002、003 甕棺墓
3. SJ008、013 甕棺墓



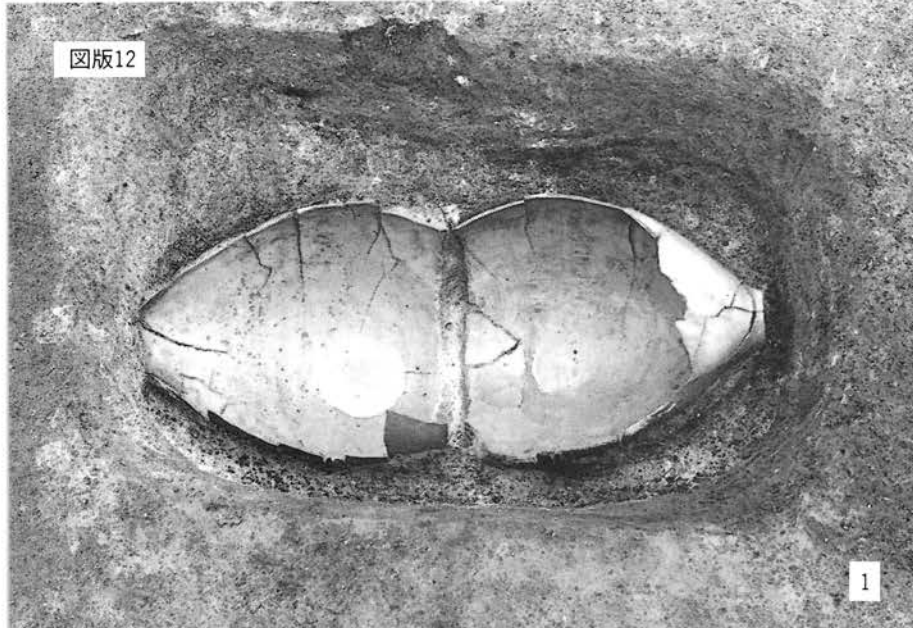
1. SJ009甕棺墓
2. SJ010、011甕棺墓
3. SJ012甕棺墓



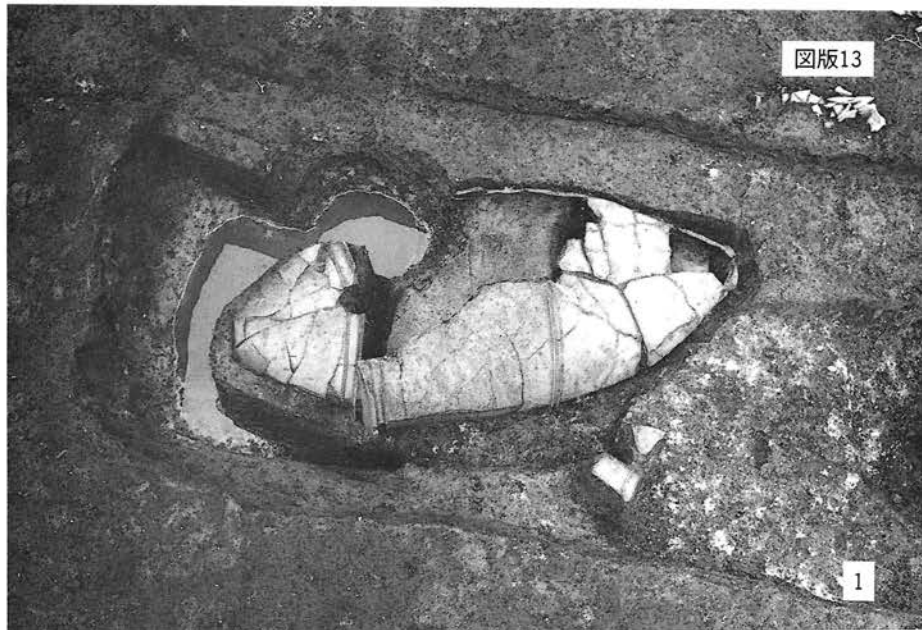
1. SJ013甕棺墓
2. SJ014甕棺墓
3. SJ015甕棺墓



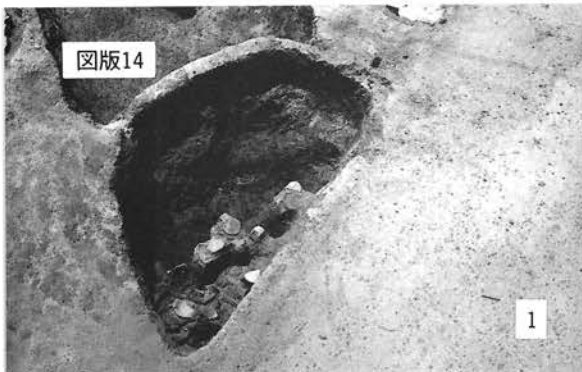
1. SJ016甕棺墓
2. SJ018甕棺墓
3. SJ019甕棺墓
(小児用)



1. SJ022甕棺墓
2. // 接合部
3. SJ023甕棺墓



1. SJ028甕棺墓
2. SJ019、032、033甕棺墓
3. SJ035甕棺墓



1



5



2



6



3



7



4



8

1. SK002土壤
2. // 土器出土状況
3. SK007土壤
4. SK008土壤

5. SK008土壤(高环出土状况)
6. SR001祭祀遺構
7. // (壺形土器出土状况)
8. SR002祭祀遺構

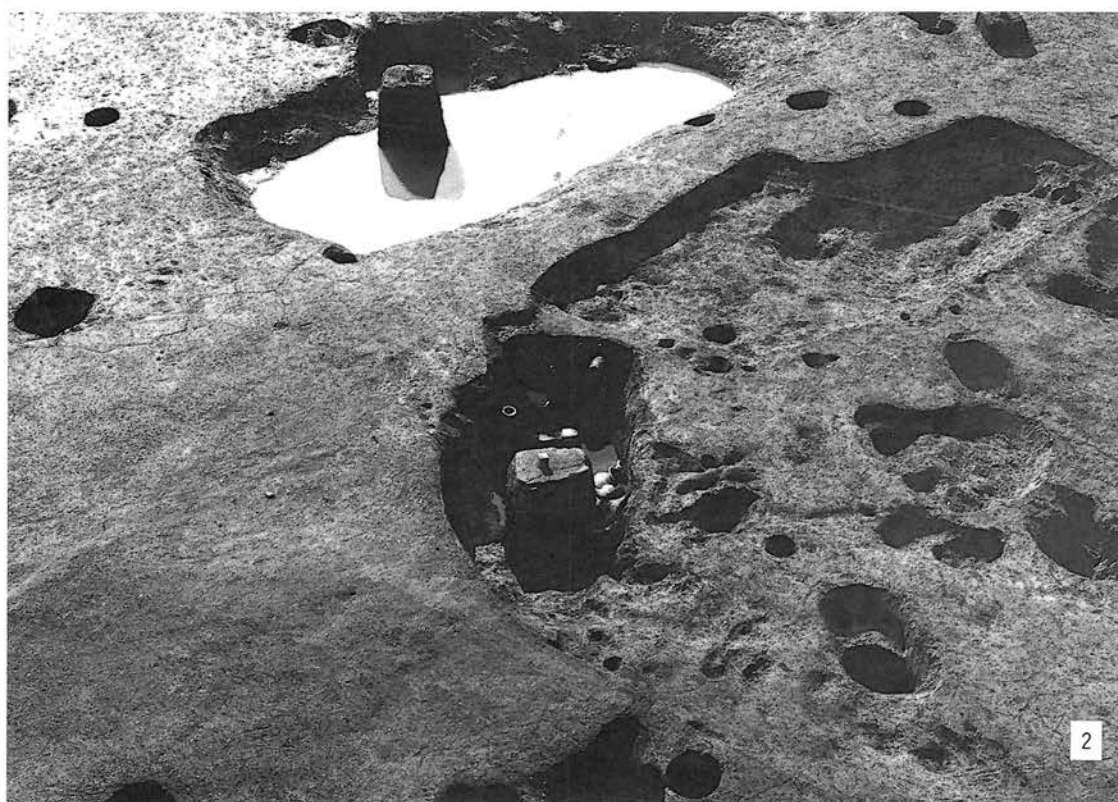


久富遺跡A区

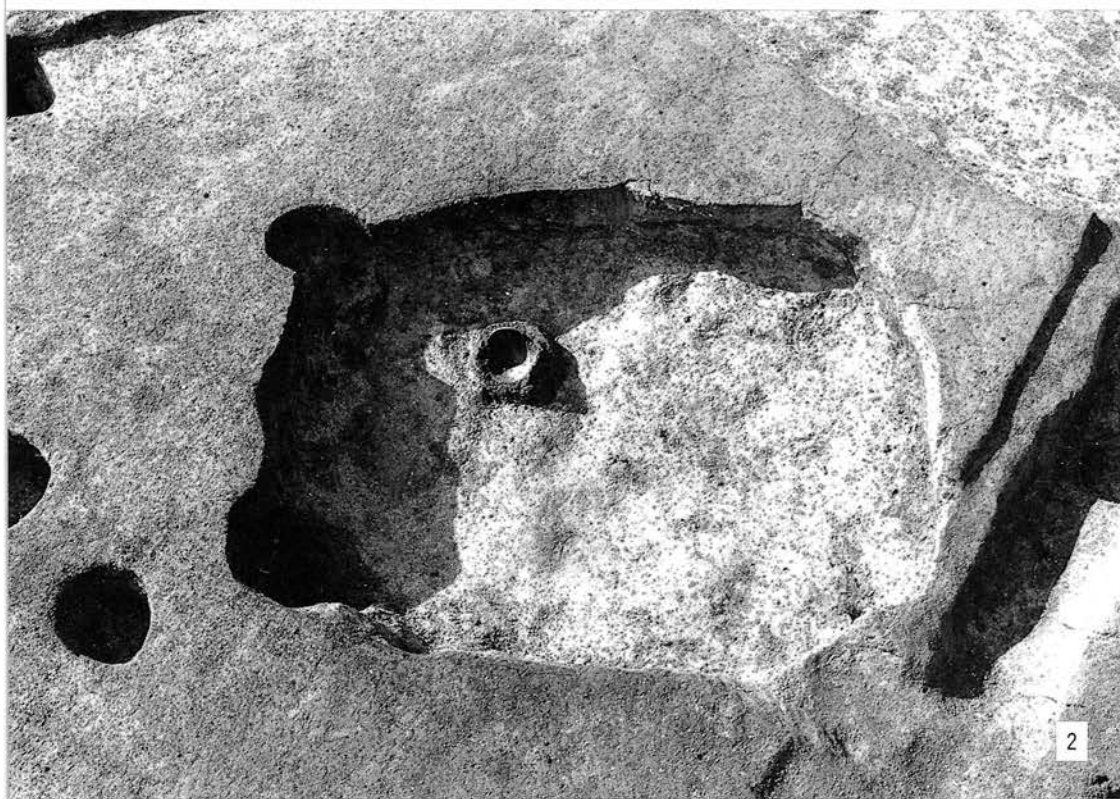
1. 調査前（東から撮影）
2. A区全景（西から撮影）



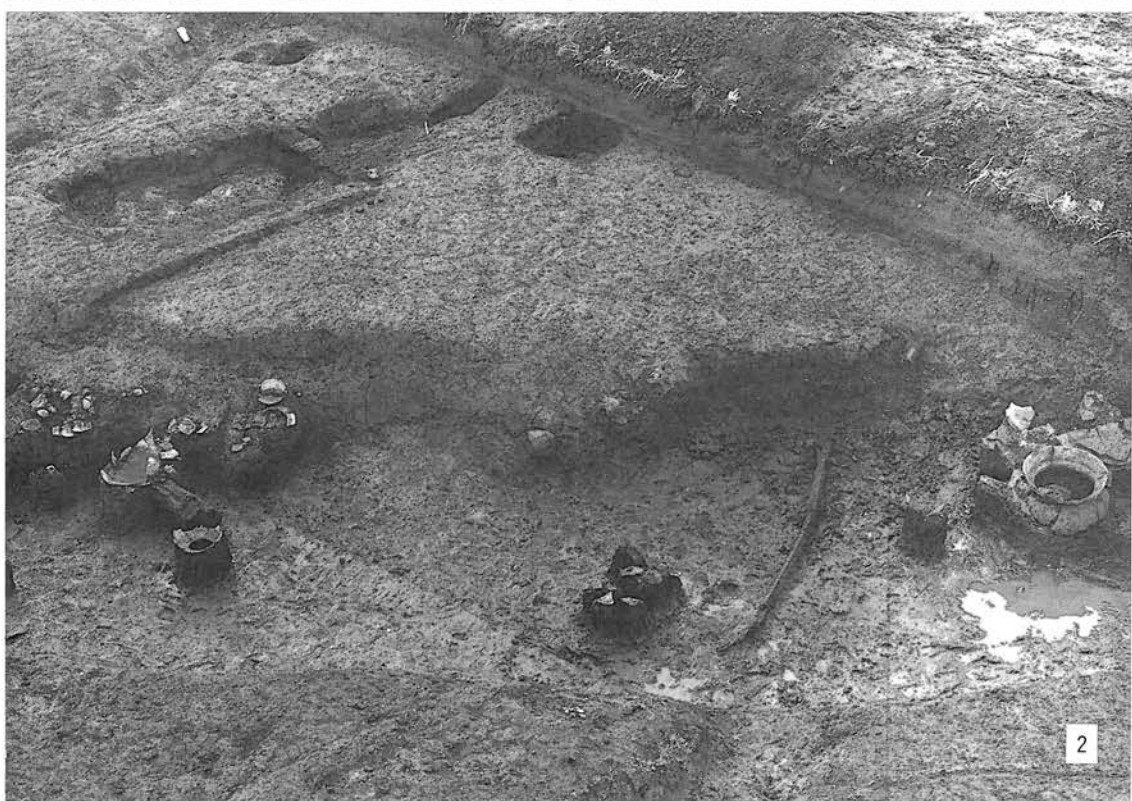
1. A区東部（西から）
2. // 西部（東から）



1. SB001住居址
2. SB002住居址周辺



1. 建物跡近景
2. SK004土壇



久富B区

1. 全 景
2. SD006溝



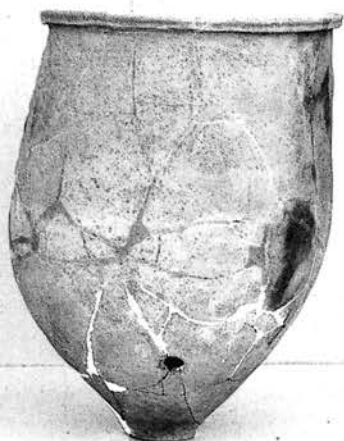
1. 表土はぎ状況
2. 甕棺検出作業状況
3. //



1



4



2



5



3



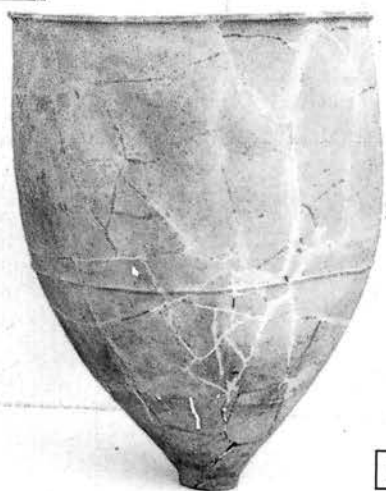
6



7

東千布遺跡出土 (I 区)

- 1. S J003 甕棺 (上)
- 2. " 1 (下)
- 3. " 3 (下)
- 4. " 5 (下)
- 5. " 6 (单棺)
- 6. " 7 (上)
- 7. " 7 (下)



1



4



2



5



3



6

(II区)

1. SJ002甕棺(上)
2. " " (下)
3. " 011 (上)
4. " 016 (上)
5. " 014 (下)
6. " 023 (下)



1



4



2



5



6



3



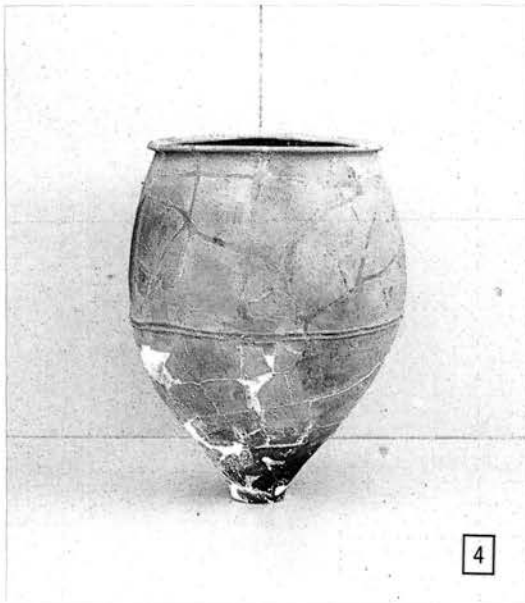
7

(II区)

1. SJ018甕棺(下)
2. " 027 (下)
3. " 028 (下)
4. " " (上)
5. " 024 (上)
6. " 026 (上)
7. " 026 (下)



1



4



2



5



3



6

(Ⅱ区)

- 1. SJ022甕棺(上)
- 2. " "(下)
- 3. " 009 (下)
- 4. " 023 (上)
- 5. " 010 (上)
- 6. " 027 (下)



1



5



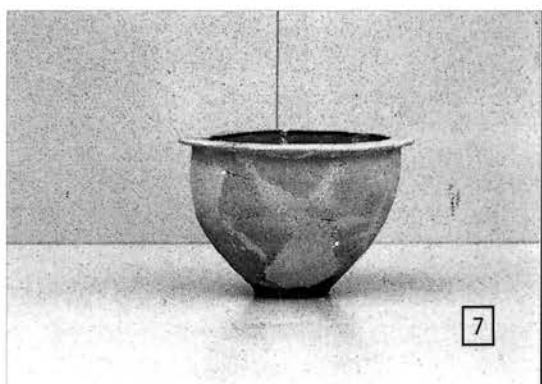
2



6



3



7



4

(Ⅱ区)

- 1. SJ019甕棺(上)
- 2. " " (下)
- 3. " 032 (下)
- 4. " 013 (上)
- 5. " 010 (下)
- 6. " 009 (上)
- 7. " 032 (上)



1



2



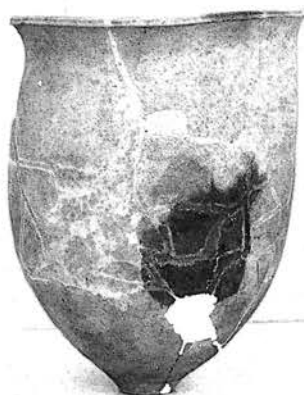
3



4



5



6

1. SR002(Ⅱ区) 2. SK008(Ⅱ区) 3. 表土下層(Ⅱ区)
4. SK001(Ⅰ区) 5. SR001(Ⅱ区) 6. SK008(Ⅱ区)



7



10



8



11



9

7. 8. 9. SK003(Ⅱ区)
10. 11. SK002(Ⅱ区)



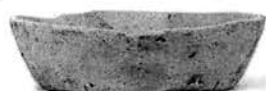
1



2



3



4



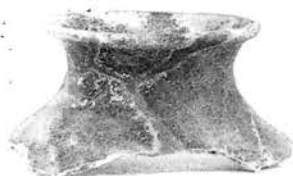
5

4. SK002(Ⅱ区)
SD017(Ⅰ区)

久富遺跡出土遺物



6



9



7



10



8

6. 表土下層 (4 地区)
7. SK010 (//)
8. 包含層 (//)
9. // (//)
10. SK008 (//)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12

1~12. S D006出土土器 (土師器、B区)



1



2



3



4

1～4. SD006出土 (B区)



5



6



7



8



9



10

5～10. SD006出土手捏土器



1



2



3



4

1~4. SD006出土手捏土器 (B区)



5



6



7



8



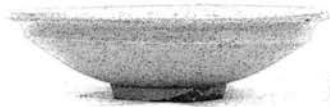
9



10



11



12



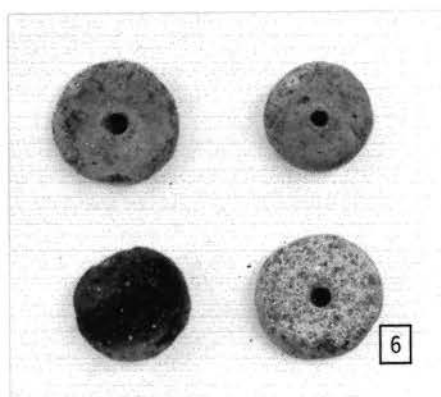
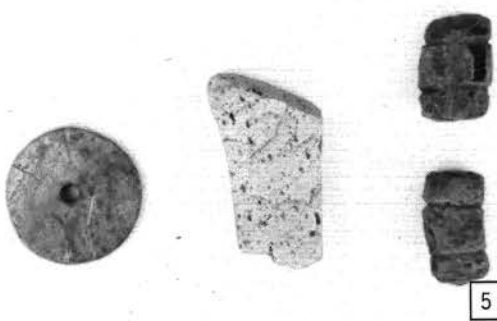
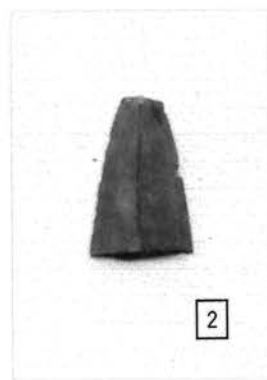
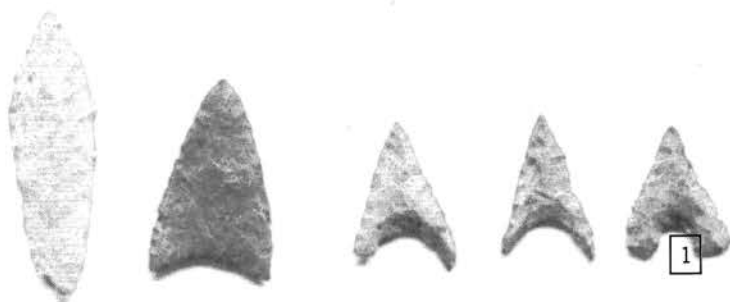
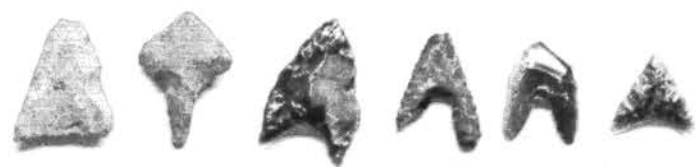
13



14

5. SD007出土

6. " "
7. " "
8. " "
9. " "
10. " "
11. " "
12. " "
13. " "
14. " "



東千布・久富遺跡出土
石器、石製品、土製品



作業風景スナップ

上
下

整理作業風景
発掘作業風景



佐賀市文化財調査報告書第15集

東千布遺跡

昭和60年3月30日

発行 佐賀市教育委員会
佐賀市栄町1番1号

印刷 (株) 宮地印刷
佐賀市長瀬町11-20